

川戸古墳群
発掘調査報告書

1995

岡山県大原町教育委員会

川戸古墳群

発掘調査報告書

1995

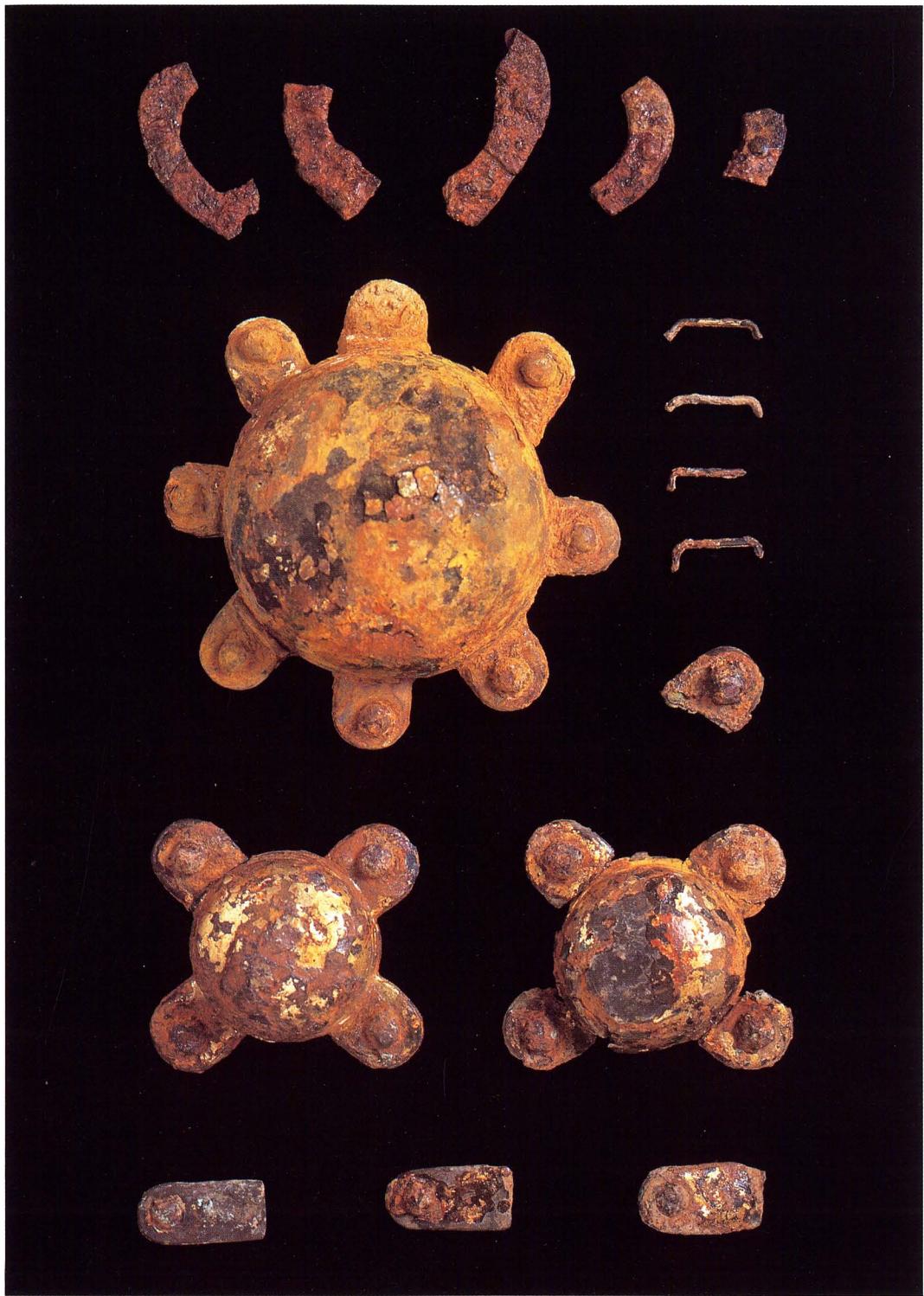
岡山県大原町教育委員会



1. 2号墳石室



2. 銅鐸形土製品



2号墳出土馬具

序

大原町は岡山県の北東部に位置し、剣聖宮本武蔵の生誕地として知られ自然と歴史遺産が豊かな町であります。

古くから因幡と播磨を結ぶ交通路の要衝として重視された場所であり、因幡街道の大原本陣のほか、宿場町の面影を残す町並みが残り、さらに竹山城、小原山王山城など戦国時代の大規模な山城も町内に点在しております。

平成6年12月には鳥取県東部と兵庫県西部を結ぶ第3セクター鉄道智頭急行が開業し、中国横断自動車道姫路一鳥取線も着工間近となりましたが、いずれも大原町を経由してのルートであり、現代の因幡街道と言えるものであります。大原町ではこの新たな交通網の整備にあわせ、町内に数多く残る歴史遺産や自然を生かしつつ地域の振興を推進しているところです。

ここに報告書を作成した川戸古墳群は圃場整備事業の実施にあたって発掘調査を実施したものであります。調査の結果、2号墳は全長12mと美作でも最大級の横穴式石室をもつ方墳であることが判明し、馬具や須恵器など豊富な副葬品も出土しました。町教育委員会ではこの古墳の重要性に鑑み保存の方途を検討し、古墳群の所在部分を圃場整備域から除外して現状保存することとしました。開発と文化財保護の両立は必ずしも容易なことではありませんでしたが、関係機関の協力を得て川戸古墳公園として整備することができました。

今後、本書および古墳公園が文化財の保護保存、研究に広く活用されることを希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたられた岡山県古代吉備文化財センター、大原町文化財保護審議委員会、現地での作業に参加していただいた地元有志の方々や関係の諸機関に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成7年3月

大原町教育委員会

教育長 平田行雄

例　　言

- 1．本報告書は県営圃場整備事業大吉地区の実施に伴い大原町教育委員会が実施した川戸古墳群の発掘調査報告書である。
- 2．川戸古墳群は岡山県英田郡大原町川戸307-3番地ほかに所在する。
- 3．発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター職員宇垣匡雅が担当し、平成2年7月23日から11月13日まで実施した。
- 4．本書の作成は宇垣が行った。
作成に際しては下記の方々から多くの援助・教示を受けたほか、文化財センターの諸兄から多々教示をいただいた。記して深く感謝の意を表したい。
秋山浩三、春成秀爾、妹尾　護（石材鑑定）
- 5．図中の高度値はすべて海拔高であり、方位は第1、8、66、71、72図が真北、他は磁北である。古墳群付近の磁北は西偏 $6^{\circ}30'$ を測る。
- 6．第2図は建設省国土地理院発行の1/50000地形図「佐用」を縮小したものである。
- 7．遺物実測図の縮尺は以下のとおり統一している。
土器1/4、鉄器・石製品・土製品1/2、装身具2/3
遺物番号は古墳、材質ごとの通し番号である。
- 8．出土した遺物は大原町教育委員会（英田郡大原町古町1709）に、実測図・写真は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管の予定である。

目 次

序

例言

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 復元・整備	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第3章 川戸古墳群の調査	13
第1節 立地と調査前の状況	13
第2節 2号墳	17
(1) 墳丘	17
(2) 墓壙	20
(3) 石室内の堆積	20
(4) 石室	20
(5) 閉塞施設	22
(6) 棺・棺施設	22
(7) 遺物の出土状況	26
第3節 2号墳出土遺物	29
(1) 装身具	29
(2) 武器	31
(3) 馬具	37
(4) その他の鉄器	45
(5) 須恵器・土師器	45
(6) 土製品・石製品	55
(7) 鉄滓	56
(8) 小結	59
第4節 3号墳	59
(1) 位置と墳丘	59
(2) 主体部	60

(3) 出土遺物	60
第5節 1号墳	63
(1) 位置と墳丘	63
(2) 石室	65
(3) 出土遺物	66
第6節 その他の遺構	66
第4章 古墳築造前・後の遺構と遺物	69
第1節 縄文・弥生時代～古墳時代中期	69
(1) 遺構	69
(2) 土器	69
(3) 銅鐸形土製品ほか	75
(4) 石器	77
第2節 古代・中世	78
(1) 2号墳石室の再利用	79
(2) 墳丘周辺包含層の出土遺物	80
(3) 中世後半以降の遺構・遺物	84
(4) 小結	85
第5章 復元・整備の概要	86
第6章 考察	89
第1節 2号墳の特色	89
(1) 立地と方位	89
(2) 石室	90
(3) 墳形	91
(4) 出土遺物	91
第2節 川戸2号墳の占める位置	93
(1) 石室の規模	93
(2) 鉄滓の評価	95
(3) まとめ	97
報告書抄録	奥付裏

図・表目次

第1図 遺跡位置図	5	第19図 2号墳石室内遺物出土状況(1) (S = 1/40)	27
第2図 周辺遺跡位置図	6	第20図 2号墳石室内遺物出土状況(2) (玉・耳環) (S = 1/60)	27
第3図 伝・古町松尾遺跡出土遺物 (1 : S = 1/3)	7	第21図 2号墳石室内遺物出土状況(3) (鎌・大刀・馬具他) (S = 1/60)	28
第4図 豊野火の釜1号墳石室実測図 (S = 1/100)	9	第22図 2号墳出土玉類	30
第5図 釜の口1号墳石棺復元図 (S = 1/30)	9	第23図 2号墳出土耳環	31
第6図 五名遺跡出土蔵骨器	11	第24図 2号墳出土大刀 (S = 1/4)	32
第7図 伝・古町福本遺跡出土遺物	11	第25図 2号墳出土刀装具・刀子	33
第8図 川戸古墳群周辺地形図 (S = 1/4000)	13	第26図 2号墳出土鉄鎌〈1〉	35
第9図 川戸4号墳石室実測図 (S = 1/60)	14	第27図 2号墳出土鉄鎌〈2〉	36
第10図 2号墳調査前測量図 (S = 1/200)	14	第28図 2号墳出土両頭金具	36
第11図 2号墳・3号墳墳丘測量図 (S = 1/150)	15	第29図 2号墳出土馬具〈1〉	38
第12図 2号墳裾部の堆積 (S = 1/60)	17	第30図 2号墳出土馬具〈2〉	39
第13図 2号墳墳丘・石室断面図 (S = 1/60)	18	第31図 2号墳出土馬具〈3〉	41
第14図 2号墳石室石材抜き跡および墓壙 (S = 1/100)	19	第32図 2号墳出土馬具〈4〉	42
第15図 2号墳石室内の堆積 (S = 1/40)	21	第33図 2号墳出土馬具〈5〉	44
第16図 2号墳閉塞施設 (S = 1/60)	22	第34図 2号墳出土須恵器〈1〉	46
第17図 2号墳石室 (S = 1/60)	23	第35図 2号墳出土須恵器〈2〉	48
第18図 2号墳玄室床面の状況 (S = 1/50)	25	第36図 2号墳出土須恵器〈3〉	50
		第37図 2号墳出土須恵器〈4〉	52
		第38図 2号墳出土須恵器〈5〉	53
		第39図 2号墳堆積土出土須恵器	54
		第40図 2号墳出土土師器	55
		第41図 2号墳出土土製品・石製品	56
		第42図 3号墳墳丘・石室 (S = 1/80)	61
		第43図 3号墳出土遺物	62
		第44図 1号墳石室 (S = 1/60)	63
		第45図 1号墳墳丘 (S = 1/180)	64

第46図	1号墳トレンチ土層断面 (S=1/60)	65	第60図	2号墳石室内出土鉄器	80
第47図	1号墳出土遺物	66	第61図	古代・中世の土器	81
第48図	溝1 (S=1/30)	67	第62図	中世の土器	82
第49図	縄文土器・弥生土器〈1〉	70	第63図	流土中出土鉄器	82
第50図	弥生土器〈2〉	71	第64図	2号墳周辺の中世の遺構	83
第51図	弥生土器〈3〉	72	第65図	井戸1	84
第52図	弥生土器〈4〉・土師器等	73	第66図	古墳公園平面図	87
第53図	銅鐸形土製品 (S=1/3)	74	第67図	古墳公園断面図・施設	88
第54図	1号墳トレンチ出土遺物	74	第68図	装飾椀の分布	92
第55図	土製品	75	第69図	吉野川上流域の横穴式石室 (S=1/100)	93
第56図	石斧未製品 (S=1/3)	76	第70図	石室規模の比較	94
第57図	石斧未製品・台石 (S=1/3・1/4)	77	第71図	巨石墳・大型石室の分布	94
第58図	2号墳玄室内の遺物出土状況 (S=1/60)	78	表1	2号墳出土土器観察表	57
第59図	2号墳石室内出土土器	79			

図版目次

- 卷頭図版 1 1. 2号墳石室
2. 銅鐸形土製品
- 卷頭図版 2 2号墳出土馬具
- 図版 1 1. 調査前の状況（南西から）
(手前畦畔-2号墳、中央-1号墳)
2. 調査前の状況・2号墳（南東から）
- 図版 2 1. 発掘調査風景（東から）
2. 2号墳玄室上部の堆積（南から）
- 図版 3 2号墳・3号墳
1. 2号墳および3号墳（南東から）
- ら）（堆積層掘り下げ前）
2. 2号墳 石室前半の状況（南から）
- 図版 4 2号墳
1. 前庭部・墳丘（西から）
2. 石室内の遺物出土状況（東から）
- 図版 5 2号墳
1. 遺物出土状況（玄室奥）（北から）
2. 遺物出土状況（玄室奥）（北から）

- 図版 6 2号墳
 　1. 遺物出土状況（袖部）（北から）
 　2. 石室前半の状況（北から）
- 図版 7 2号墳
 　1. 石室（東から）
 　2. 玄室西壁（南東から）
- 図版 8 2号墳・3号墳
 　1. 2号墳西裾・須恵器甕出土状況
 　　（南西から）
 　2. 3号墳全景（西から）
- 図版 9 3号墳
 　1. 墳丘および葺石（東から）
 　2. 石室残存状態（南から）
- 図版10 1号墳
 　1. 発掘調査風景（北から）
 　2. 墳丘および石室（西から）
- 図版11 復元・整備
 　1. 復元後の2号墳（南から）
 　2. 復元後の1号墳（西から）
- 図版12 2号墳出土遺物
 　1. 耳環および玉類
 　2. 大刀
- 図版13 2号墳出土遺物
 　刀装具（4～6）・刀子（7～13）・
 　両頭金具（49～51）・釘（103）・鎧
 　（102）
- 図版14 2号墳出土遺物
 　鉄鏃
- 図版15 2号墳出土遺物
 　1. 繡・釣舌金具
 　2. 鐙
- 図版16 2号墳出土遺物
- 辻金具b・飾金具・鉸具他
- 図版17 2号墳出土遺物
 　須恵器〈1〉　杯
- 図版18 2号墳出土遺物
 　須恵器〈2〉　杯・高杯・蓋
- 図版19 2号墳出土遺物
 　須恵器〈3〉　高杯・椀
- 図版20 2号墳出土遺物
 　須恵器〈4〉　高杯・椀
- 図版21 2号墳出土遺物
 　須恵器〈5〉　有蓋椀
- 図版22 2号墳出土遺物
 　須恵器〈6〉　壺
- 図版23 2号墳出土遺物
 　須恵器〈7〉　甌・提瓶
- 図版24 2号墳出土遺物
 　須恵器〈8〉・土師器〈1〉　提
 　瓶・椀・甕
- 図版25 2号墳出土遺物
 　須恵器〈9〉・土師器〈2〉　壺・
 　甕
- 図版26 2号墳・3号墳出土遺物
 　須恵器〈10〉　器台・甕・高杯、鉄
 　滓他
- 図版27 縄文土器・弥生土器・銅鐸形土製
 　品
- 図版28 石斧未製品
- 図版29 弥生土器・土師器・須恵器・勝間
 　田焼
- 図版30 中世の遺物・周辺遺跡出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

県営圃場整備事業〈大吉地区〉の計画策定は昭和60年にさかのぼる。この事業は大原町の南西部、大吉地区全域の農地101.5haを対象とし、昭和61年度から平成2年度までの5ヶ年で圃場の整備を実施するものである。対象地域内には埋蔵文化財包蔵地数ヶ所が含まれていたため、文化財保護法第57条の3にもとづく協議が岡山県勝英地方振興局長から提出され（昭和60年8月12日付け、勝英地振農第1030号）、古墳4基、石塔2基が協議の対象となった。このうちの1基が川戸1号墳である。

のことについては、田面の計画高や施工方法に留意して遺跡に影響をあたえないように工事をすすめることで協議が整い、県教育委員会から、工事によって埋蔵文化財への影響が生じないよう慎重に実施すべき旨の通知がなされた（昭和60年9月30日付け、教文埋第3752号）。

圃場整備事業は昭和61年に着工され、地区ごとに順次工事が進められていった。川戸地区については平成2年秋に工事が実施されることになったが、それに先だって平成元年に川戸1号墳について地元から再度協議があった。すなわち、この古墳を現状保存した場合、水田中に石室の天井石がわずかにのぞくだけとなり、耕作に支障をきたすこととなるので、むしろ発掘調査を実施した後に石室を移築して社会教育の資料としてはどうかというものであった。

のことについて現地で協議をもったが、その際に1号墳西側の水田中に別の古墳（2号墳）が所在する可能性が強いことが判明した。2号墳は圃場整備域のなかで最も高い田面の端に位置しており、その部分では1m以上の削平が予定されていたため現状での保存が困難であり、その取扱いが1号墳以上の問題となつた。

2号墳については確実に古墳であるかどうかを含めて、残存状況がまったく不明であり、設計変更を行うにしてもどこまでの高さが必要であるか判断しかねる状態であったため、この古墳については発掘調査を実施し、1号墳については墳丘規模の確認にとどめ石室内の調査については今後の課題とすることとした。これにもとづいて大原町教育委員会から県教育委員会に発掘調査についての依頼書が提出され（平成元年11月21日付け、大教財第229号）、平成2年夏に調査を実施することとなつた。

調査には岡山県古代吉備文化財センターがあたることになったが、調査員の配置に余裕がなかったため、県文化課職員（文化財センター兼務）が調査を担当することとした。

調査の体制

大原町教育委員会		岡山県古代吉備文化財センター
教育長	平田行雄	所長 長瀬日出明
教育課長	岡本修一	次長 河本清
		総務課長 竹原成信
岡山県教育庁文化課		課長補佐 藤本信康
課長	鬼澤佳弘	課長補佐 柳瀬昭彦
課長代理	光吉勝彦	主任 平松郁男
課長補佐	伊藤晃	
主査	藤川洋二	
文化財保護主事	宇垣匡雅	

最後になりましたが酷暑のなか発掘調査に従事された下記の方々に厚く御礼申し上げます。

芳野昌司、芳野兼男、芳野安男、船舩亘、小林正宏、船曳輝男、船曳武男、横山豊太、河副志づ子、船曳かつ代、船曳静子

第2節 調査の経過

調査は平成2年7月23日に開始し、11月13日に終了した。

2号墳 7月23日に発掘用資材を搬入し、24日から27日まで重機により1号墳および2号墳周辺の水田層の除去を行った。

それに平行して石室位置と推定した部分の表土を除去したところ大形の石材が現れ、2号墳はかなり大形の横穴式石室をもつことが確実となった。石室内には水田の造成・耕作の際に出土と思われる石が多量に入っており、その下面から玄室前半部を中心に古代末～中世の椀、羽釜、鍋等が出土し、少なくとも古代末には石室が開口しており、人の出入りがあったと推定された。また、石室南側は一段下がった水田面となっているため石材の大部分が除去されていたが連続する抜き取り穴を検出でき、最終的に石室の全長は12mに達することが明らかになった。

墳丘は大部分が削平されていたが盛土の一部と旧表土とみられる黒色土が残存していた。また、古墳の地山にあたる黄褐色土中には弥生時代中期の土器が包含されており、特に石室東側のトレンチにおいては土器の出土が顕著であった。

8月8日からは石室床面の掘り下げに着手したが、奥壁付近と袖部付近を中心には多数の遺物が出土したため、墳丘外側の調査と平行して、検出・実測作業を進めた。

8月末からは古墳周辺部の調査にかかった。古墳の南～東側には大形の礫が広範囲に堆積し

ていたため、その検出にかなりの時間を要し、また、性格の把握に苦慮したが、いくつかのトレンチで礫層下から中世の遺物が出土したため、この礫層が中世ないしそれ以降の時期に堆積し、南東側の墳端を埋めていると判断できた。この礫層の内縁は弧を描かず直角の屈曲を示していたことから（第64図）2号墳は方墳である可能性が考えられたが、そのことはこの部分の墳端や西側の墳端の形状によって確認することができた。トレンチでの観察によれば角礫層は墳丘南側が約50cmと最も厚くなっている、礫も大形のものが密集していたため人力での掘り下げは困難であり、その付近については重機で掘り下げを行った。また、墳丘東側では墳裾付近に古代末から中世の包含層が形成されていた。

10月25日からは石室の掘り方内の掘り下げをおこない、あわせて石室の実測を行った。

3号墳 2号墳墳丘の西側についても墳端の検出を進めたが、その過程で墳丘西側に別の古墳が所在することが判明し、これを3号墳とした。3号墳は径約10mの小規模な円墳で調査区にその半分が所在する。墳丘裾部に堆積した流土の掘り下げが必要となったが、角礫を含む固結した粘質土が堆積しており、また、掘り下げの必要な範囲もかなりの広さであったため、やむなく重機を用いて堆積上部の掘り下げを行うこととし、9月4日に実施した。

墳丘の東側、2号墳に接する部分では鉄滓および須恵器大甕破片の堆積が認められ、破片の散布状況からこれらは2号墳から転落したものと推定した。また、それらとともに大形の角礫の堆積も見られたが、これは3号墳墳裾に設けられていた葺石が転落・堆積したものと判断でき、墳丘側では原位置をとどめるものも確認できた。

墳丘の南側、上記須恵器の西側は墳丘にそったくぼみが見られ、部分的に設けられた周溝と推定した。この部分からは須恵器甕と高杯が出土した。

墳丘中央には調査区南側の道路下からのびる掘り込みが認められ、主体部と判断したが、石室石材がすべて除去されており規模等は明確に把握できなかった。

1号墳 1号墳所在部分の水田は圃場整備実施の際には現状よりも若干高くなる予定であり、石室は現状保存とすることで協議が整っていた。したがって石室内部の調査は行わず、石室の現状の実測を7月27日に、墳形・墳丘規模確認の調査を11月1日から6日まで実施した。なお、石室の内部には耕作の際に掘り出されたとみられる礫が充満しており、不用意に除去した場合、石室が崩壊する恐れもあったため、壁面の実測は行えなかった。

当初、水田耕作土等を除去して墳丘平面形をとらえるため広く表土剥ぎを行ったが、墳丘・堆積土の境界が明確に把握できなかっただため、トレンチ調査に切り替えた。トレンチ5本を設定して掘り下げを行った結果、墳丘は旧表土付近まで削平されていたものの、径約18mの円墳であることが判明した。また、トレンチ3では古墳時代前半期の土壙が所在しており、甕1個体がはいっていたため、その部分を拡張して土器の取り上げを行った。このほか、トレンチ4

第1章 調査の経緯と経過

では銅鐸形土製品が出土した。

また、調査中に1号墳～3号墳の南西400mの山麓に4号墳が所在することが判明した。この古墳自体は圃場整備実施範囲外に位置していたが、その南側の水田内にも巨石が露出しており、古墳の可能性も考えられたため試掘を行ったが自然石であることが判明した。

以上のように発掘調査は掘削がおよぶ2号墳、3号墳を中心に実施した。また、2号墳の墳丘旧表土層下には弥生時代中期の遺構が所在すると考えられたが、後述のように調査の最終段階に古墳群の現状保存が決まったため、それらについては掘り下げを行っていない。

古墳群の調査に約3ヶ月半と、相当の時間を要することになった。2号墳の規模・内容が調査前の推定を大きく上回るものであったためもあるが、最大の要因は古墳群が所在するのが扇状地上であるため、基盤層・流土が礫混じりの粘質土であり、土層の区分、掘り下げとともに容易でなかったことである。

第3節 復元・整備

石室規模や豊富な副葬品、また、方墳という希な墳形をとることなどから、2号墳はこの地域の原始・古代を考えるうえで重要な位置を占めるものであることが判明した。この重要性に鑑み町教育委員会ではこの古墳群の現状保存の方途を検討し、調査の終盤段階で史跡公園として現状保存することを決定した。古墳群が道路に面して所在していたこともあり、古墳群が所在している圃場整備区画1,740m²を買収し、公園として整備することとなった。

工事の設計・施工は下電造園土木株式会社が行うこととなったが、遺跡や古墳の復元・整備例は県下でも数が少ないとため、県内および他府県の整備状況の調査を行いつつ発掘調査担当者と協議をかさね、最終的に第66・67図に示す設計とした。

工事は平成4年1月31日に着工し、6月18日に竣工した。その間、石室の復元など現地協議を要する工事に際しては調査担当者も現地で工事の指導にあたった。

7月23日に川戸古墳公園のオープン記念式典を行い現在にいたっている。

第2章 遺跡の位置と環境

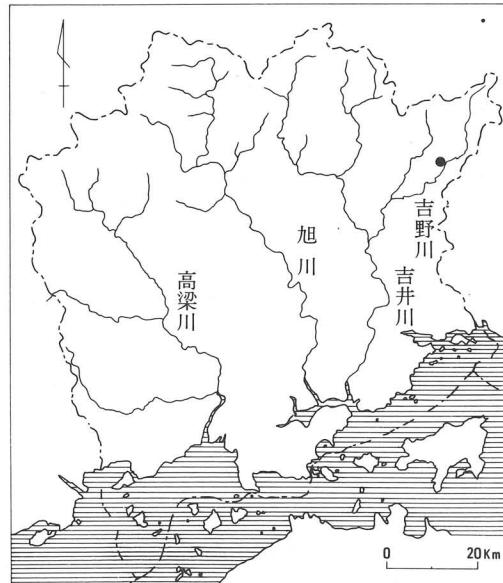
川戸古墳群は岡山県英田郡大原町川戸307-3ほかに所在する。

大原町は岡山県の北東端に位置する町であり、町境の東は兵庫県佐用町、北側も西粟倉村を経て鳥取県智頭町に達する。中国山地脊梁部の南側にあたるため町域のかなりの部分を山地が占め、町境には標高724mのツズラ山以下、500m前後の山々が連なっている。町の北半部および東粟倉村、西粟倉村には花崗岩と片岩類が広く分布しており、町の南半部から作東町にかけての地域には安山岩および流紋岩、砂岩、泥岩等が分布している。

町の中央には吉井川の支流である吉野川が南流し、それにむかって後山川、宮本川など中小の河川が流れ込んでいる。平地はおもに吉野川、後山川にそって形成されているほか、それらの支流ぞいにも小規模な谷平野が形成されている。また、吉野川北岸の小原田から粟野にかけては緩傾斜面がみられ、現在、水田、畑として利用されている。

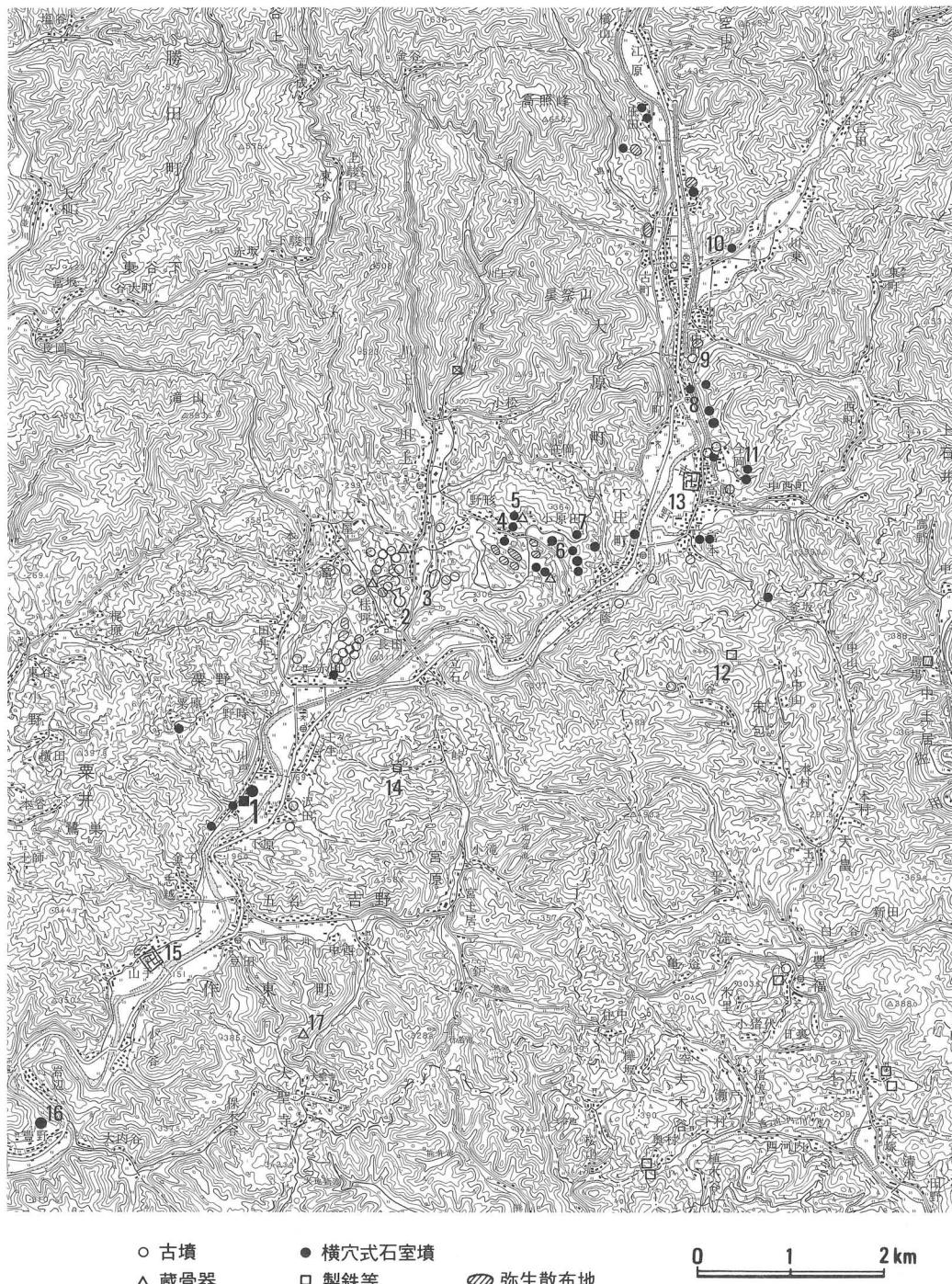
これらのうち中心となるのは吉野川にそって形成された谷底平野で、町南部の立石から川戸、さらに作東町北端にかけての一帯と、町北半の古町から下庄町にかけては細長い盆地状の地形を呈しており、ともに最も広い部分で幅500m前後の広がりをもつ。現在の行政境界では川戸地区は大原町の南端となっているが、律令制下の英多郡吉野郷は大原町赤田付近から作東町小ノ谷付近までと推定され、地形的なまとまりとよく対応している。

この吉野川ぞいの平野は古くから山陰、山陽を結ぶ道としての機能を担っており、江戸時代には因幡藩主の参勤交代の要路として因幡往来と呼ばれていた。また、平安時代末に因幡国司が任地、因幡国府へ赴く際にも佐用から西粟倉村坂根を経て入国しているが、そのルートは佐用から北西に進んで釜坂峠を越え、大原町を経て志戸坂峠に至るものであったと推定されており、この経路はすくなくともその時期までさかのぼるものと考えられている¹⁾。さらに、南に接する作東町では、佐用から西に進んで杉坂峠を越え、美作国府を経て出雲国に至



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境



1. 川戸古墳群
2. 桂坪12号墳
3. 美土路遺跡
4. 野形2号墳
5. 野形1号墳
6. 小原田火の釜古墳
7. 才の辻2号墳
8. やすらぎ荘裏古墳
9. 山の後2号墳
10. 築出し古墳
11. 釜の口1号墳
12. 小中山遺跡
13. 今岡廃寺
14. ナイゲ遺跡
15. 大海廢寺
16. 豊野火の釜1号墳
17. 五名遺跡

第2図 周辺遺跡位置図

る出雲街道が東西に通っているが、そこには大原町から吉野川にそって下ることによっても連絡が可能である。

岡山県北部の山間地域では原始・古代の遺跡の分布は希薄であることが多いが、吉野川流域では古墳を中心に多数の遺跡の分布が見られる。これは上記のように比較的広い平野が所在すること、また、播磨と因幡の交通路としての位置を占めるという地域的な特性にもとづくものと考えられる。

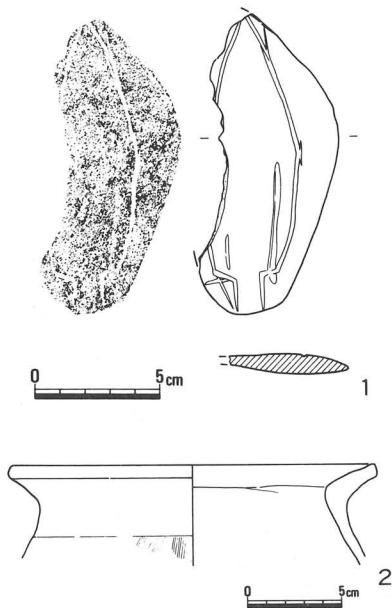
この地域の考古学的調査は戦後かなり早い時期に着手され、資料もかなり蓄積されたようであるが、その後資料に混乱が生じているため町内出土としてしか取り扱えないものが多く、残念ながらそれらを十分に活用することができない。また、古墳等については古く1928年に刊行された『英田郡史考』に記載されながら地点が不明になっているものがいくつかあり、特にそれは作東町分で著しい。したがって本来の古墳の分布は、第2図に示したものよりも若干多くなるとみてよい。なお、第2図には弥生時代、古墳時代の遺跡を中心に掲載しており、山城等中世の遺跡については割愛している。

大原町あるいは周辺地域においては、今後発見されると予想されるものの、これまでのところ旧石器、縄文時代の遺物は発見されておらず、今回川戸古墳群包含層から出土した縄文時代後期の土器片が最も古い遺物となる。

続く弥生時代の遺跡については大原町および作東町北部で10数ヶ所が知られている。発掘調

査によって内容が明らかになったものとしては川戸古墳群下流約2kmに所在する大海廃寺があり、弥生時代中期から後期末までの遺物が出土している²⁾。大原町の北部には池が平遺跡、福本遺跡などが、南部には桂坪遺跡群、赤田遺跡群などが所在している。遺跡の詳細が不明なものが多いが丘陵上あるいは山上に立地するものが多く、弥生時代中期から後期にかけて集落が増加し、吉野川ぞいの平野や谷水田に面した山麓や丘陵上に拡散していくものと考えられる。

第3図1に示したのは大原町古町・松尾遺跡出土と考えられる資料である。発掘時の状況が不明であるが弥生時代中期とみられる土器2が伴出しており、この資料もその時期のものと考えられる。長さ12cmの偏平な礫の片面に線刻が施されており、その表現から礫に銅剣を描いたものと思われる。



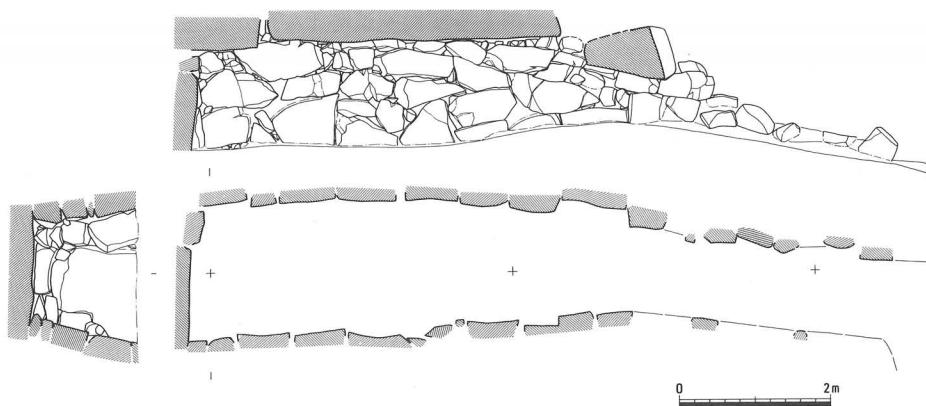
第3図 伝・古町松尾遺跡出土遺物
(1: S=1/3)

古墳時代には町内に約65基の古墳が築かれる。主体部の構造や副葬品が不明なものもかなりあるが、横穴式石室をもつと判断できるものは33基を数え、古墳の半数以上が後期古墳であるとみてよい。横穴式石室導入以前とみられるのは内部主体が竪穴式石室と伝えられる川上古墳³⁾、箱式石棺であった山の後2号墳⁴⁾、山頂に所在し墳丘が低平な赤田古墳群などである。

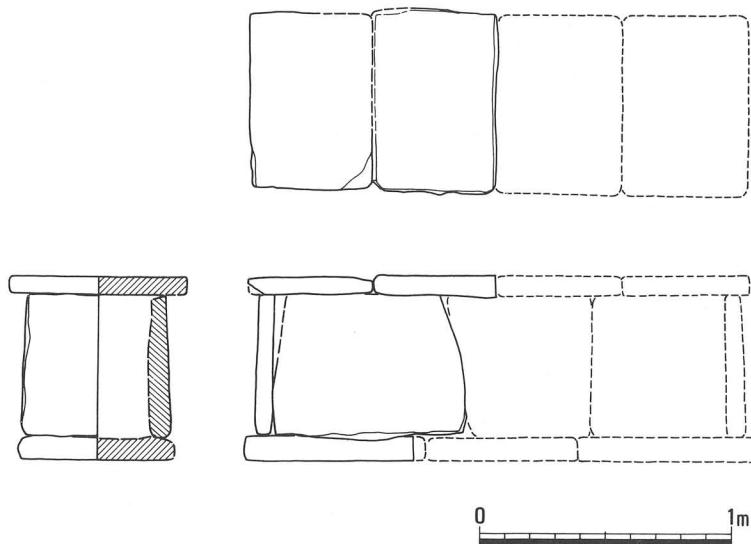
また、大原町桂坪に所在する桂坪12号墳は丘陵頂に築かれた全長35mの前方後円墳で後円部径20m、同高さ2mを測り、この地域の首長墓である。前方後円墳は美作東部では梶並川、滝川の流域に集中して築かれており、吉野川流域は基本的にそれらの首長の支配領域に含まれていたとみられるものの、数基の前方後円墳が点在的に築かれている。桂坪12号墳の下流9.2kmには美作町緑青塚古墳（全長36m）が築造され、また、県堺の東側、千種川流域には佐用町横坂古墳が築かれており、直線距離で10kmを測る。緑青塚古墳は出土須恵器から6世紀中頃の築造であることが知られるが、桂坪12号墳は立地や墳形から横穴式石室導入以前と推定できる程度であり、年代の推定は困難である。したがって、詳細な検討は行いがたいが、これら前方後円墳の築造は、一時的にではあれ、この地域に政治勢力が成立したことを示しているとみてよいと思われる。

後期古墳はおもに大原町中部から南部に分布している。単独墳、あるいは2基が50m前後離れて築かれる例が多く、3基以上からなる群を形成するのは川戸古墳群、野形古墳群、小原田古墳群などであるが、それらも古墳間の距離が広く、墳裾を接するように築かれる例は川戸2・3号墳のみである。野形古墳群は3基で構成されており、小原田古墳群は現存するのは3基であるが古墳群の中央部が造成を受けており、さらに多かった可能性がある。分布の北限は町北部の庄田1号・2号墳であり、西粟倉村、東粟倉村域ではこれまでのところ古墳は確認されておらず、弥生時代の遺跡と同様の分布状態を示している。石室の規模については第6章において整理を行うが、奥壁幅1m前後、全長6mほどの小規模なものが主体を占めており、墳丘も径10m強の円墳であることが多い。そうしたなかにあって川戸2号墳、同1号墳は群を抜いた大きさであり、この地域の首長墓とみてよい。この川戸2号墳に先行する首長墓と推定されるのは吉野川の下流4kmの位置に所在する作東町豊野火の釜1号墳（第4図）である。この古墳は径16mの円墳で、入り口付近がやや明確でないが石室の全長9.4m、玄室長さ5.8m、同奥幅1.8mを測り、川戸2号墳に次ぐ規模をもっている。玄室の天井石のうちの一枚は長さ3.9mを測る巨大なものである。出土遺物は不明であるが羨道が比較的短く、奥壁も大形の石材に小形の石材を加えて構築されることからみて川戸2号墳に先行すると考える。

第5図に示したのは今岡に所在する後期古墳、釜の口1号墳の組合式石棺の復元図である。石棺石材が墓石に転用されており、本来の組み合わせは明確でないが、このような形状の石棺であったものと思われる。それほど加工しないままに使用している石材が多いが、小口板など



第4図 豊野火の釜1号墳石室実測図 (S=1/100)



第5図 釜の口1号墳石棺復元図 (S=1/30)

は凝灰岩製で全面が加工されている。また、大原町内では尾崎・築出し古墳からも小形の組合式石棺が出土している^{5) 6)}。吉備南部では削抜式の家形石棺が首長墓に限って使用されているが、この2例はそうしたあり方とは異なるものであり、播磨地域の影響を受けて採用された可能性が考えられる。なお、美作の後期古墳では陶棺の使用が一般的であるが、この地域での出土例は野形2号墳と上記の釜の口1号墳のみで陶棺の使用は盛んとは言いがたく、それがこの地域の特色と言えよう。

古墳時代の後、7・8世紀の英多郡を考えるうえで注目される資料として白鳳寺院をあげることができる。白鳳時代、つまり7世紀後半から8世紀初頭にかけて美作には9ヶ所の寺院が

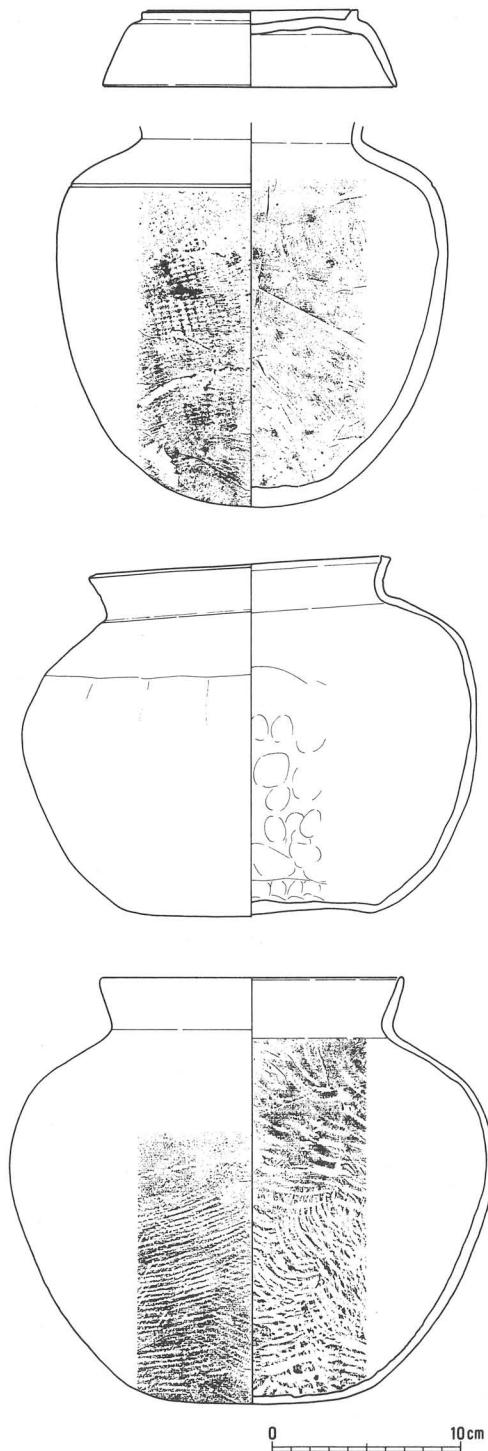
建立されるが、東端の英多郡では寺院5ヶ所と寺院関連遺跡1ヶ所が知られており、美作の半数を占めている。これらの寺院の多くでは複弁7弁蓮華文と呼ばれる特異な意匠の瓦が使用されており、それぞれで瓦の同範関係も確認されている。密接な関係を有し、集中して建てられたこれらの寺院のもつ意義については壬申の乱の論功行賞とみる説⁷⁾、郡司層の連帶および畿内との結び付きとみる説⁸⁾、吉備に対する大和政権の介入とする考え方⁹⁾、さらに大和政権が以前から英多郡地域と特別な関係を有していたとみる説¹⁰⁾などがある。そのいずれをとるかは措くとしても、この地域が7世紀後半代に地域的なまとまりを有し、大和政権と特別な関係にあったことを示す証左とみてよいであろう。

郡内5ヶ所の寺院のうち、大原町今岡には今岡廃寺が所在しており、川戸古墳群の下流2kmの作東町山手には大海廃寺が所在している。このうち大海廃寺は発掘調査が実施されており、法起寺式の伽藍配置であることが判明している¹¹⁾。また、今岡廃寺からは複弁7弁蓮華文ではなく法隆寺式の軒丸瓦が出土しており、その系譜について今後の検討が必要である。

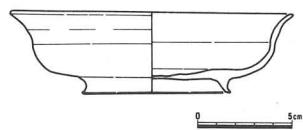
寺院以外にこの時期の資料として、蔵骨器がある。町教育委員会に保管されている資料には蔵骨器と推定される資料7点があり、それ以外に大原町内出土の個人蔵品1点がある。また、第6図に示したのは作東町五名出土の資料で、林道工事中に3点がまとまって出土しており、8世紀代のものとみられる。こうした蔵骨器の多くは偶然の出土であるため出土量はそれほど意味をもたない可能性もあるが、県北部の1地域で11点の出土というのはかなり多い出土点数と言えるのではなかろうか。

また、第7図に示したのは大原町古町福本出土と伝えられる稜椀である。出土状態は不明であり、現在は一部破損しているが、出土時には完形であったようであり、蔵骨器の蓋等として用いられていた可能性が強い。稜椀は佐波理椀の模倣のもとに成立した須恵器の器種の俗称であり、官衙的要素をもつ遺跡に特有の遺物であることが指摘されている。また、この資料は体部が丸みをもち口縁部がゆるやかに外反しており、吉備に一般的な稜椀の形態とはかなり異なっており¹²⁾、むしろ平城京跡や陶邑古窯跡群など畿内の資料に近い。

なお、この地域を考える際に考慮すべきものに製鉄がある。北の西粟倉村、東粟倉村の花崗岩地帯においては近世初頭以降、盛んに製鉄が行われており、製鉄遺跡も両村に多数分布している。一方、古代の製鉄遺構については作東町高本遺跡¹³⁾で奈良～平安時代の炉が検出されているほか奈良時代には英多郡から鉄の貢納がなされていたことが木簡によって知られ、『日本靈異記』には英多郡内の鉄山で落盤事故があったものの仏の加護によって救助されるという説話が記されている。また、兵庫県佐用郡内にも多数の製鉄遺跡が分布しており、近世のものも含まれるが、出土遺物や炉形等から多くが8、9世紀の操業と考えられている。『播磨国風土記』讚容（佐用）郡の条には別部犬という人物がこの地で鉄を発見（製鉄を開始）し、後にそ



第6図 五名遺跡出土蔵骨器



第7図 伝・古町福本遺跡出土遺物

の孫が朝廷（孝徳朝）に鉄を献じたと記されているが、その記載によるなら備前北東部を本拠とする和氣氏の支族が7世紀初頭にこの地域に進出して製鉄をおこなったことができる。備前北東部の製鉄遺跡の年代が十分に判明していないものの、備前における製鉄遺跡全般の状況からみて、こうした山間部への製鉄集団の移動・拡散があった可能性も少なくないと思われる。

現状では大原町内の製鉄関係の遺跡はあまり明確でないが、最近、町南部の壬生においてナイゲ遺跡の調査が実施された¹⁴⁾。この遺跡は横口付き製炭窯と呼ばれる炭釜の遺構であるが、この種の炭釜は6世紀後半に出現し7世紀代も存続すること、基本的に製鉄遺跡に付随することが知られており¹⁵⁾、この付近にその時期の製鉄遺跡が所在している可能性が強い。また、野形地内の遺跡で須恵器片とともに鉄滓が採集されているものもあり、古代の製鉄遺跡が所在する可能性がある。このほか、作東町北部の五名には鉢という地名もあり、近世以前の製鉄遺跡が所在する可能性が考えられる。

時期が下って南北朝、戦国時代にはこの地域は播磨の赤松氏の勢力圏となるが交通の要衝として重視されたようであり、小原山王山城、竹山城など地域の拠点となる大規模な城

第2章 遺跡の位置と環境

郭が築かれている。また、中小の山城も町内各所に分布しており川戸古墳群の背後の山上にも小規模な山城である郷籠山城が築かれている。なお、川上所在の美土路遺跡は確認調査が実施されており、13世紀を中心とする集落遺跡の存在が確認されている¹⁶⁾。

以上に見るように、この地域は中国山地山間部の交通の要衝としての位置を占めている。7世紀代を中心に英多郡は美作のなかでも強い地域性を示しており、それは大和政権との密接な関係によって生じたものと考えられるが、その要因の一つは大和政権による交通路の掌握にあったと思われる。

参考文献

- 『土地分類基本調査 坂根・佐用』岡山県 1991年
椎口松玲『英田郡史考』 1928年
湊 哲夫『美作の白鳳寺院』津山郷土博物館 1992年
平瀬順一ほか「製鉄遺跡I（作用郡）」『兵庫県生産遺跡調査報告』第1冊 兵庫県教育委員会 1992年
大佐雅彦「播磨の鉄」『風土記の考古学』2 同成社 1994年

註

- 1) 内藤季義「因幡往来」『岡山県歴史の道調査報告書』第5集 岡山県教育委員会 1993年
- 2) 正岡睦夫・岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』26 1978年
- 3) 無蓋の小竪穴式石室で弥生時代後期の土器を伴出したと伝えられ、弥生時代後期末の墳丘墓の可能性がある。
- 4) 栗野克己・福田正継「山の後2号墳発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』8 1978年
- 5) 岡田 博「築出し古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』15 1985年
- 6) 平井 勝「岡山県大原町築出し古墳の小石棺」『古代吉備』第11集 1989年
- 7) 伊藤 晃「初期寺院と瓦」『吉備の考古学』福武書店 1987年
- 8) 出宮徳尚「古代」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- 9) 駒井正明「古代吉備における軒瓦の様相」『考古学研究』第37巻第3号 1990年
- 10) 吉田 晶「美作・備前・備中の国と郡」『岡山県史』第3巻古代Ⅱ 1989年
- 11) 註2) 文献および、岡本寛久・伊藤 晃「大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』33 1979年
- 12) 小川真理子「いわゆる稜椀について」(「龍野市小犬丸遺跡Ⅱ」『兵庫県文化財調査報告』第66冊 1989年)
- 13) 井上 弘ほか「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 1975年
- 14) 亀山行雄「壬生・ナイゲ窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24 1994年
- 15) 行田裕美「製炭窯」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 1992年
- 16) 山磨康平「美土路遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』64 1987年

第3章 川戸古墳群の調査

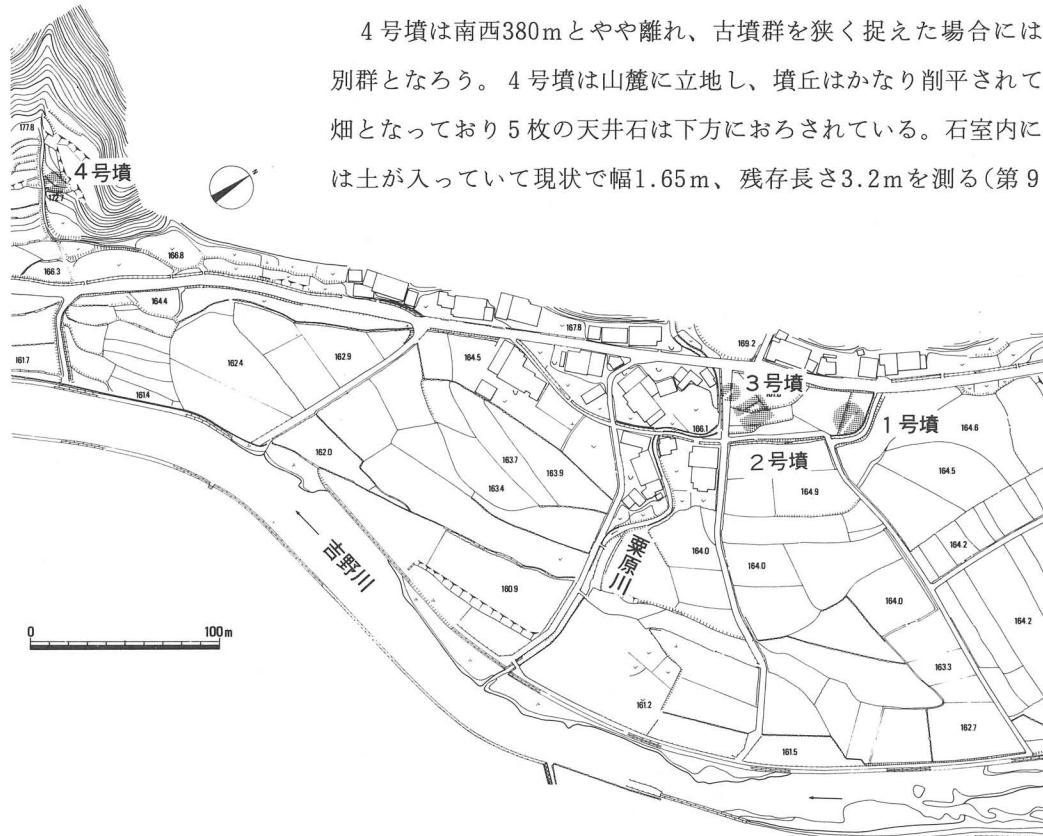
第1節 立地と調査前の状況

川戸古墳群は大原町の南端、吉野川西岸に位置する川戸地区に所在する（第8図）。川戸地区の西側は急峻な山で、山裾からは吉野川むかってゆるやかに下降する斜面がひろがり、水田となっている。地区のほぼ中央には吉野川の支流、粟原川が流下しており、この緩斜面は粟原川によって形成された扇状地とみられ、弧を描く水田の畦畔がその形状をよく示している。基盤層は粘質土で、多量の亜円礫、角礫を含んでいる。

古墳群は扇状地の最上部に2号墳、3号墳が所在し、それらの北東30m、約1.1m下がった位置に1号墳が所在する。1号～3号墳は山裾から離れて築かれており、この地域の古墳のなかでも特異な立地である。

2号墳の所在する田面が海拔166.99m、吉野川河畔の水田で160mである。

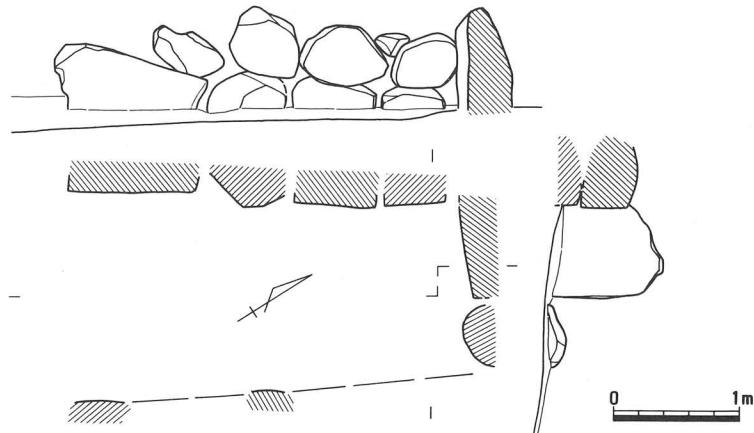
4号墳は南西380mとやや離れ、古墳群を狭く捉えた場合には別群となろう。4号墳は山麓に立地し、墳丘はかなり削平されて畠となっており5枚の天井石は下方におろされている。石室内には土が入っていて現状で幅1.65m、残存長さ3.2mを測る（第9



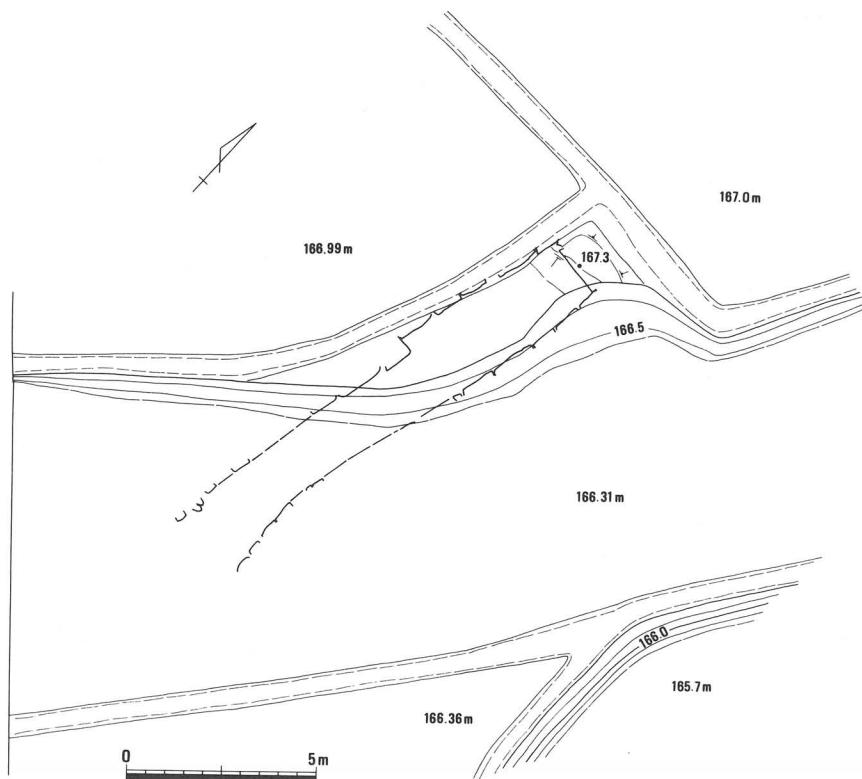
第8図 川戸古墳群周辺地形図 (S=1/4000)

図)。東壁の状況から、図示した西壁は少なくともさらに1段は下にのびると考えられる。

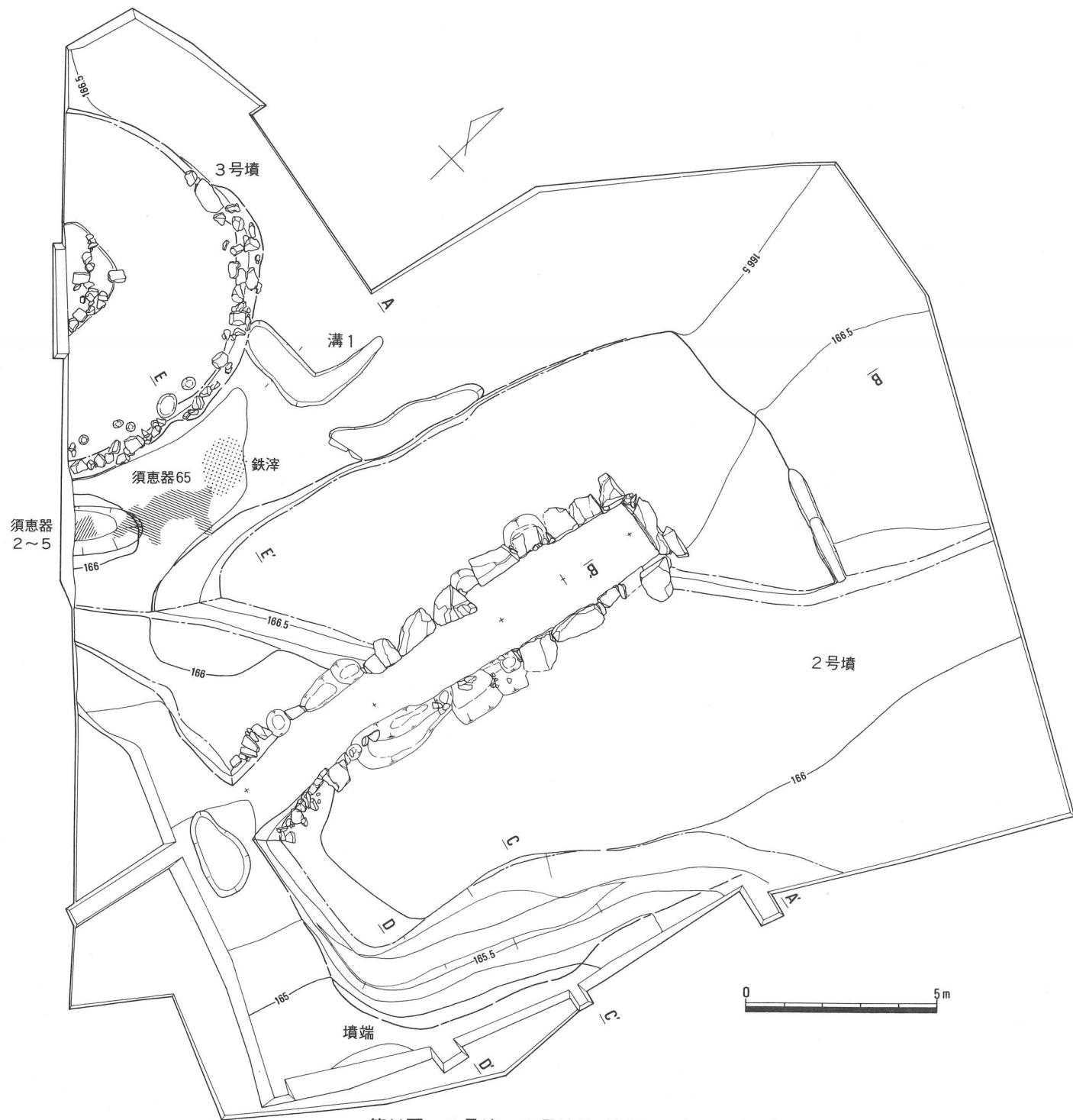
調査前の状況(第10図、図版1)

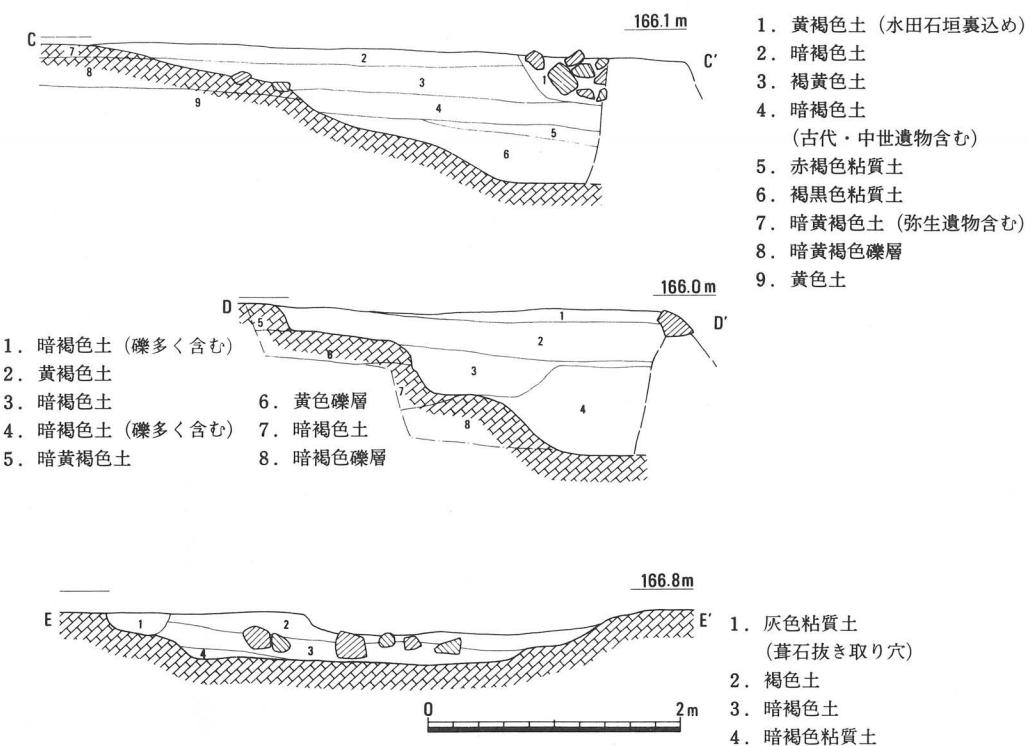


第9図 川戸4号墳石室実測図 (S=1/60)



第10図 2号墳調査前測量図 (S=1/200)



第12図 2号墳裾部の堆積 ($S=1/60$)

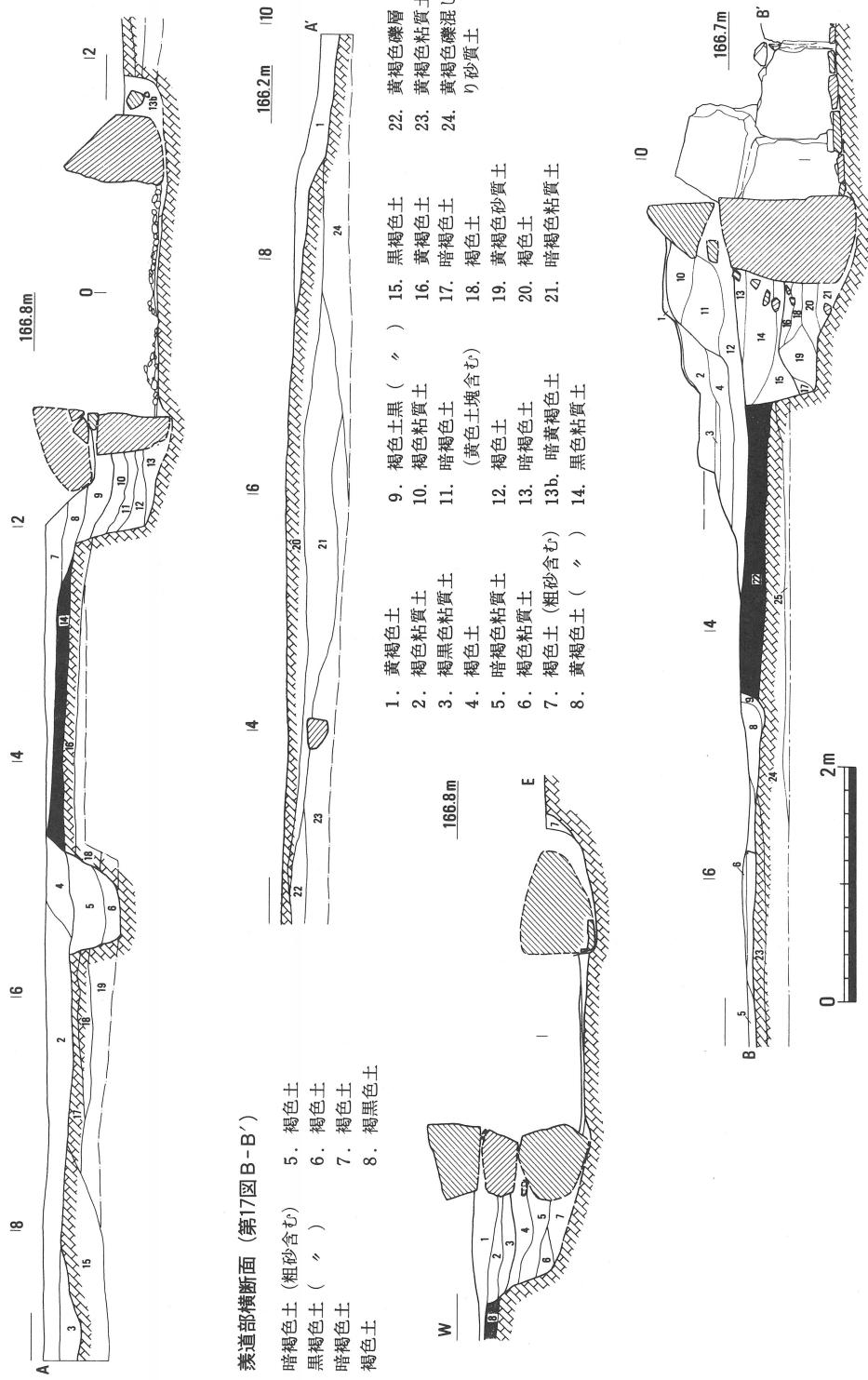
古墳群は水田中に所在しており、3号墳は墳丘の半分が農道の下になっている。水田の段差は扇状地上部で大きく、高低差数10cm前後、最大1mを測る。

1号墳は墳丘が削平されて横穴式石室のみが水田内に露出した状態であり、小規模な石舞台古墳といえるような景観であった。一方、2号墳は水田の畦道にそった長さ7m、幅2mの細長い長方形の未耕作部分として残っており、調査によって石室が遺存していることが判明したが、一見しただけでは古墳とは思ひがたいものであった(第10図)。また、3号墳は完全に削平されて田面下となっていた。

第2節 2号墳

(1) 墳丘 (第11図)

南に開口する横穴式石室を内部主体とする方墳で、墳丘軸線をほぼ南北にとる。墳丘の東西14.5m、南北17mを測り、南北がやや長い長方形をなしている。墳丘の上部は大きく削られており、特に南東側は水田の造成によって一段削り落とされているため墳丘の東半部では盛土・旧表土とも完全に失われ、北東隅では墳端も削平されている。盛土が残っているのは石室奥壁付近から石室西側にかけての部分であるが、奥壁付近で56cm、他の部分では10cm前後である。



第13図 2号墳墳丘・石室断面図 (S=1/60)

第13図 墳丘縦断面(B-B') 土層注記

- | | | |
|---------------------|--------------|---------------|
| 1. 腐植土 | 9. 褐色微砂質土 | 18. 黄褐色砂質土 |
| 2. 灰色粘質土
(水田耕作土) | 10. 明褐色土 | 19. 黄褐色砂質土 |
| 3. 赤褐色粘質土 | 11. 明褐色礫混じり土 | 20. 暗褐色土 |
| 4. 明褐色粘質土 | 12. 褐色土 | 21. 黑褐色土 |
| 5. 黄褐色粘質土 | 13. 黄褐色土 | 22. 黑褐色土(旧表土) |
| 6. 灰色粘質土 | 14. 褐黑色土 | 23. 褐黑色礫混じり土 |
| 7. 灰色粘質土 | 15. 黑褐色土 | 24. 暗褐色砂質土 |
| 8. 黄褐色礫混じり土 | 16. 黄色砂質土 | 25. 褐色砂質土 |
| | 17. 暗褐色土 | |

墳丘北西隅は鈍角になり、北側の墳端もやや内側に入るが、この付近では盛土下の旧表土がわずかに残っているのみであり、水田の造成によって墳丘が削平され、本来の墳端が失われていると考えられ、もとはもう少し外側に出ていたとみられるが、それほど大きく北にのびることはないとある。

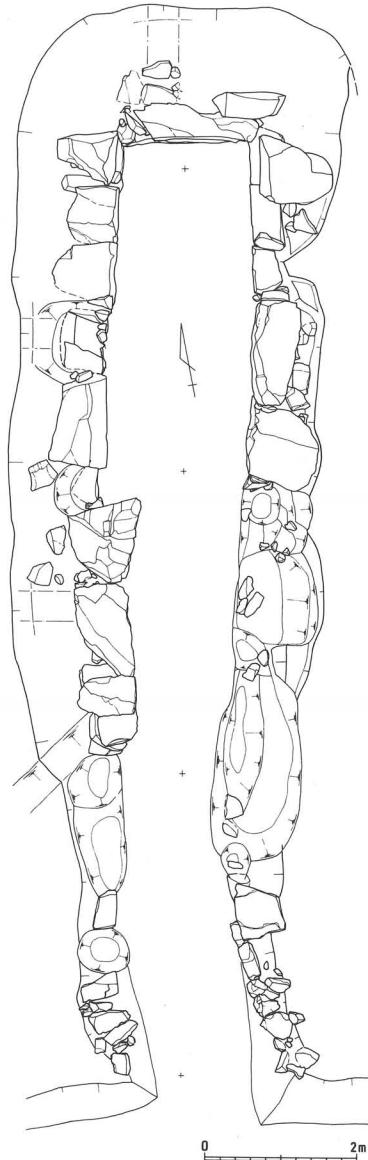
墳端が最も高くなるのは北西隅で166.5m、低くなるのは南東隅で164.8m、墳端は南東にむかって1.7m下降している。墳丘南西隅の北半は良好に遺存していたが、それを見る限り墳丘隅は直角にならず若干丸みをもっている。また、南東隅および墳丘東斜面では狭い平坦面がみられるが、その部分には中世の包含層がのっており、築造当初のものではない可能性が強い。

上記のように墳丘の築成状況についてはほとんど不明であるが、旧表土の位置からみて、北西側は基本的に盛土によって墳丘が築かれ、南東側では下半が地山の削り出し、上部が盛土によって築成されたとみられる。

石室は墳丘の中軸線よりも北側に築かれるが、これは旧表土面の中央付近に墓壙が設定されたためと思われる。

外表施設については調査の初期に墳丘南側と東側に多量の角礫の集積が認められたため、葺石がなされていた可能性を考えたが、それらは後世に堆積したものであり外表施設はなかったことが判明した。

この時期の古墳では後方に周溝が配されることが多いが、本墳の墳端北・西側はゆるやかに



第14図 2号墳石室石材抜き跡
および墓壙 (S=1/100)

上がっており、周溝は設けられていない。なお、西裾の中央に溝状のくぼみがあるが攪乱であるのか古墳築造前の遺構であるのか判断できなかった。また、北裾の一部に溝があるが、これは水田に関係するものである。

3号墳と南西隅の間は浅い溝状になっているが、この部分では須恵器大甕と炉壁の堆積が認められた。

なお、古墳の地山、旧表土層中には弥生土器が含まれており、特に墳丘横断トレンチ（第13図A-A'）21層からは多量に出土した。

(2) 墓壙（第13・14図）

墳丘の約半分が失われているため、墓壙は北西側では良好に遺存しているが、南東側では下部がわずかに遺存するにすぎず、さらに抜き取り穴によって削られている部分が多い。隅丸長方形の箱形を呈し、壁面は急角度で下がっている。推定幅4.6m、深さ85cmを測り、奥壁付近ではかなり余裕のある大きさになっている。

墓壙の深さは石室の基底石がほぼ収まるものであり、埋土は大きく2分できる。奥壁部の土層（第13図B-B'）を例にとれば下層（16～21）は黒褐色の粘質土と黄色砂質土の互層であり、各層は薄く、入念に石材の固定を行っているようである。上層（13～15）は褐色の砂質土で玄室基底石の上端、羨道の2段目の半ばまでを埋め戻している。これより上の層（10～12）は墳丘の盛土であり、石室の構築と平行して墳丘の築成がなされたと考えられる。

(3) 石室内の堆積（第15図、図版2）

石室内には多量の礫が入っていた。礫はおもに西側から投げこまれたような堆積状況で、石室上部が撤去された時点で耕作の支障となる石が捨てられたものと思われる。玄室前半が最も深くなってしまっており第15図縦断面に示すように床面の上15cm付近まで達している。

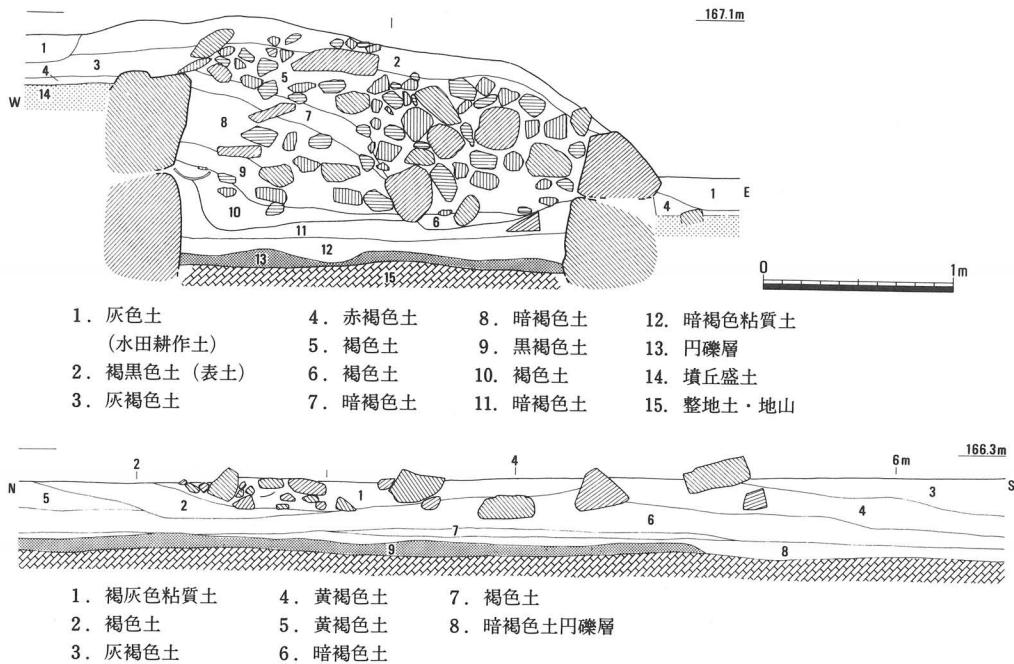
横断面10層、縦断面4層には古代末～中世の遺物が入っており、準完形品を含んでいる。少なくとも古代末には開口してなんらかの形で石室が利用されていたようであるが、床面が攪乱された形跡は見られなかった。

13層は石室床面の円礫、12層が古墳時代の堆積層である。

(4) 石室（第17図、図版6・7）

石室の遺存状況は良くなく、石室上部および天井石すべてが失われていたが、床面はほぼ完全に遺存していた。壁面の遺存状態が最も良かったのは奥壁付近で、玄室西壁および羨道の奥側も高さ1m前後が遺存していた。一方、東壁は全般に遺存状況が悪く、多くの石材が抜き取られていたが、抜き取り穴の形状から石材のおよその大きさや位置を推定することができた。

石室は左片袖で全長12.35m、玄室長さ4.75m、奥幅1.64m、玄室最大幅2.0m、羨道の奥幅1.5m、入り口部幅1.6mを測り、残存高さは奥壁部分で1.63mである。玄室は羨道にむかって



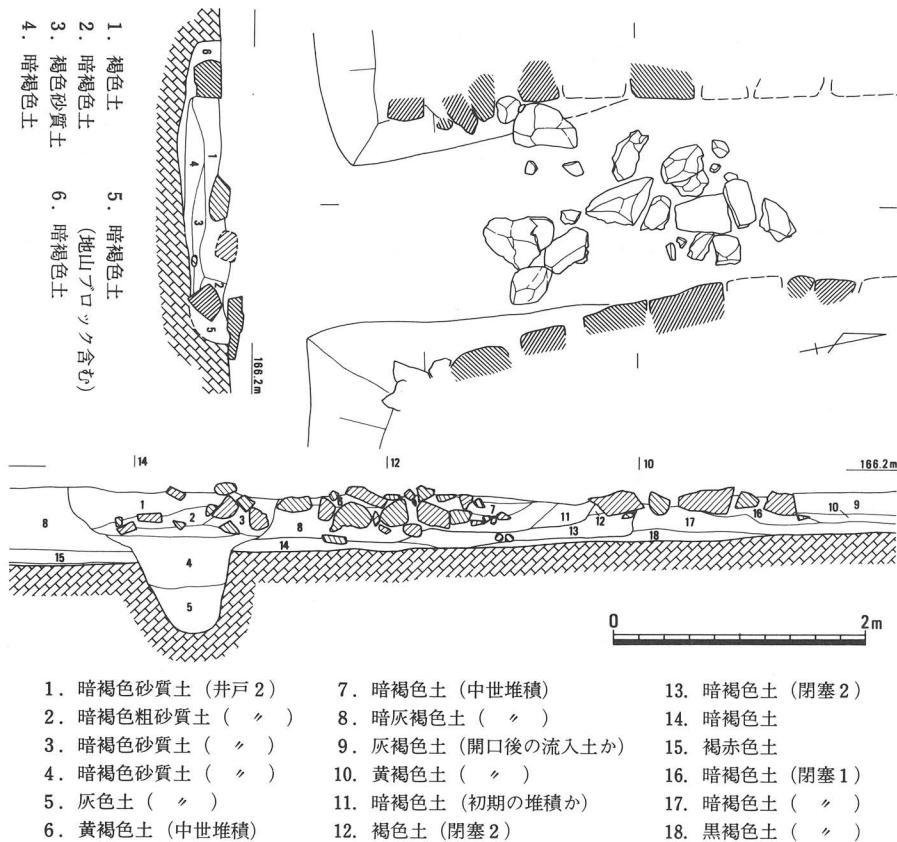
第15図 2号墳石室内の堆積 (S=1/40)

広くなっており、羨道は玄室の約1.6倍の長さをもつ。

奥壁は高さ1.1mのほぼ長方形の石が据えられ、その上に高さ60cmの横長の石材が置かれている。玄室西側壁下段では奥壁に接する部分に長方形の石材を縦に配し、それより前方には横長に4石を配しており、横目地は奥に向かってゆるやかに上昇する。2段目は6石が配されたようで、そのうちの4石が遺存している。羨道側から奥に向かって順に石材は小さくなるが、上面の目地はなお羨道側に下降している。東壁も西壁と同様な石の配置になっているが奥から4石目に大形のものが配される関係で、横目地は波状になるようである。

袖石には幅1.15m、高さ約1.5mの大形の石材が用いられている。この石の上端は不規則な凹凸を示しているが、これは耕作に支障をきたすため打ち割られたためとみられ、本来の上面は平坦であったようである。羨道の西壁は袖石に接する部分では横長の石材が3段に積まれているが、その南側は長さ60cm前後の石がやや不揃いに積まれている。

羨道のこれ以外の部分では基本的に石が抜かれており、入り口付近にかろうじて残存している。羨道の東壁はやや湾曲し、入り口は若干ハ字に開いている。抜き跡となっている部分には耕作の支障となる比較的大きな石が用いられていたと見られるが、そうした石を配するのは奥から11m付近までで、そこから外側には長さ30cm前後の小さいものが用いられており、据えられる位置も徐々に上方になってくる。



第16図 2号墳閉塞施設 (S=1/60)

玄室の奥から1.5mまでの範囲には長さ40cm、厚さ8cm前後の板石が敷かれており、そこから玄門付近までの間には円礫が敷かれている。遺物の出土状況については後にふれるが、円礫床よりも少し手前に須恵器甕が置かれていたのが注意された。

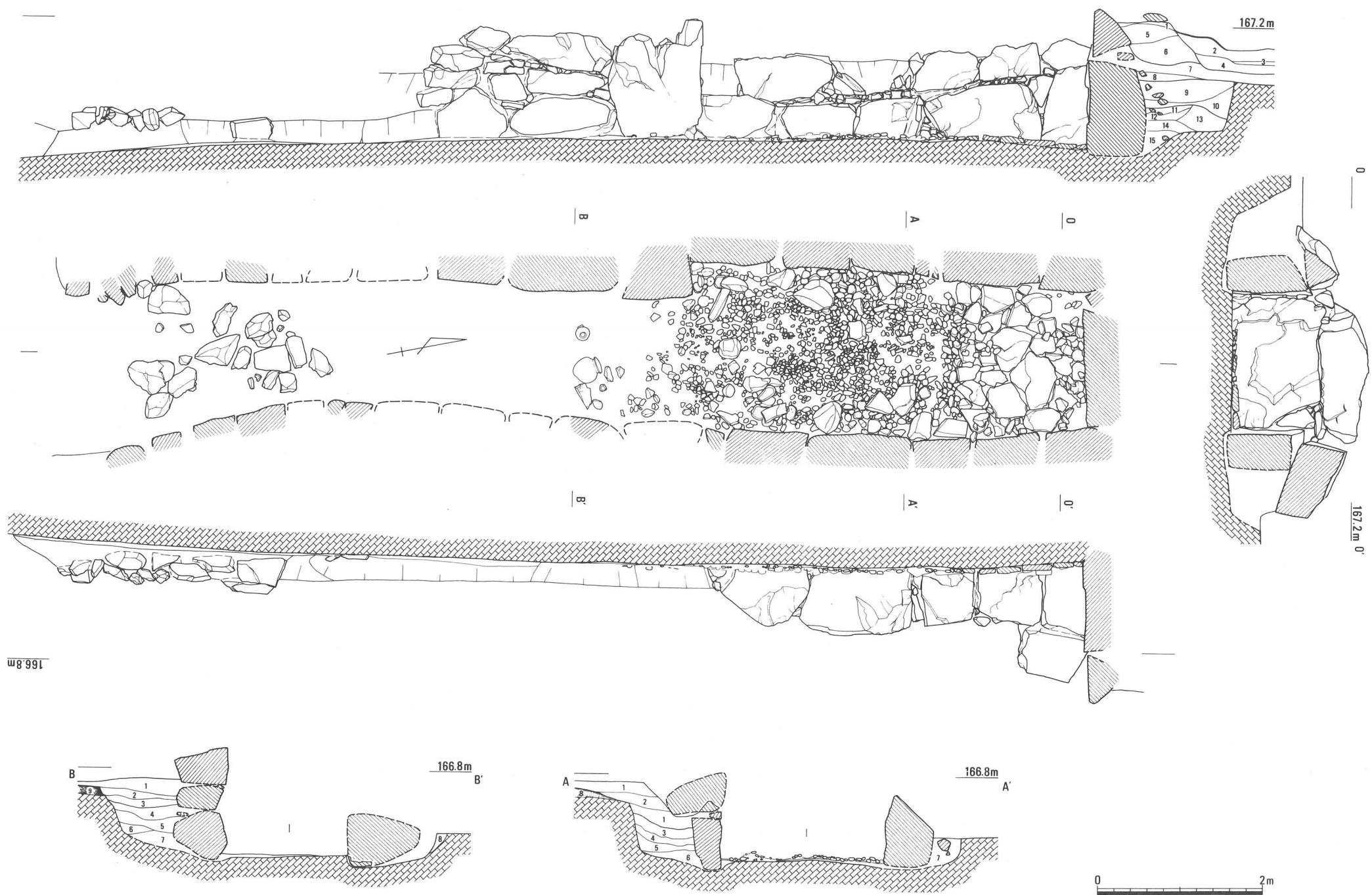
(5) 閉塞施設 (第16図、図版3)

羨道の入り口から外側にかけては角礫が多量に堆積していた。そのうち外側のもの(6~8層)は中世以降に堆積したものであるが、内側に散在していた角礫は外側のものよりもやや大きく、また、土層の関係から閉塞施設の一部と判断した。第17図平面にはそれらのみを示したが、入り口側のものはある程度動いていると思われる。

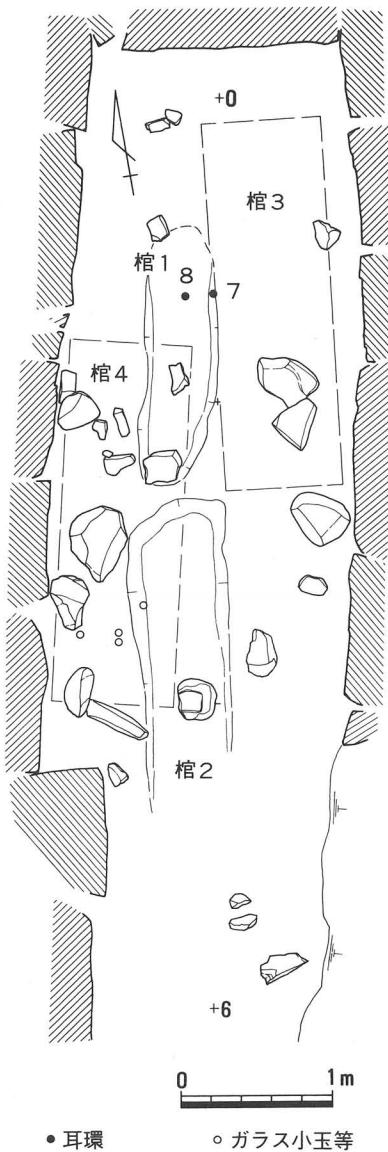
遺存状態は悪く、閉塞施設の位置を知ることができるのみで、土層についても16~18層と12、13層が別時期の閉塞になり、少なくとも2回の開閉があった可能性が考えられる程度である。

(6) 棺・棺施設 (第18図)

後述のように本墳では釘の出土は1点のみであり、埋葬に用いられたのは枘によって組まれ



第17図 2号墳石室 ($S=1/60$)



第18図 2号墳玄室床面の状況
(S=1/50)

これらの棺はその位置関係から、初葬、棺3、棺4、棺1、棺2の順であったと考えられ、耳環から推定される被葬者数と一致するが、棺2には耳環が伴っていないことからすれば、痕跡の残らなかった棺が初葬の他に少なくとも1基あると思われ、合計6棺以上となる。なお、この時期の横穴式石室では羨道にも追葬がなされる例がしばしば認められるが、羨道部には埋葬の痕跡は全く認められなかった。

た木棺ないし屍床であったと考えられる（ここでは両者を含めて棺と呼ぶ）。したがって、釘の出土状態から木棺を推定することはできず、また、棺材が粘土化した痕跡も認められなかった。

玄室床面の円礫上には10点ほどの亜角礫が散在していた。石材は長さ40cm、厚さ10cm前後大きさで、厚さは比較的そろっている。これらは棺台として用いられた石材と思われるが規則的な配置を示しておらず、早い段階の棺に用いられた台石が追葬の際に壁ぎわに動かされているとみられる。

一方、玄室中央やや西側の部分で円礫面が若干薄くなっている、幅50cm、長さ1.7mほどの浅いくぼみと幅70cm、長さ2.1m以上の浅いくぼみが南北に連なって所在すると観察された。両者とも深さは6cm程度の浅いもので形状もあまり明確でないが、北側のくぼみの北側部分から対になる耳環7・8が17cm離れて出土し、この部分が被葬者の頭部位置と判断できた。したがって、これらは棺の設置の際に浅く掘りくぼめられた部分であり、追葬の痕跡と思われる（棺1・2）。

玄室東奥側は大刀1を除いて副葬品が全く見られない。その範囲は長さ2.6m、幅1mを測り、木棺の設置の際に副葬品が除去された部分と思われる（棺3）。また、袖部付近にガラス小玉が集中しており、頭部を南に向けた埋葬があったことをうかがわせている（棺4）。初葬の棺の痕跡はこれら棺3、4の設置によって失われていると考えてよい。

(7) 遺物の出土状況（図版4～6・8）

出土遺物は須恵器、土師器、玉類、耳環、鉄製武器・武具・工具、鉄滓等からなり、その大部分が玄室～羨道奥側の板石・円礫床部分から出土した。

玄室（第19～21図）

60点の玄室出土の須恵器のうち杯1・4・7・13・15、高杯18～27、有蓋椀29～40、壺48・54、提瓶57の29点は北西隅に積み重ねられた状態であった。このうち杯蓋1はその破片が玄門付近からも出土しており、杯蓋13は半分がこの部分、残りが北東隅からの出土である。完形ないしこの部分で壊れたと思われるものが多いが、乱雑に積み重ねられたのか端部を欠損するものが目立つ。18・22・26・27などは破片の状態で出土した。器種の点では杯は少なく、おもに高杯と有蓋椀で構成されている。なお、有蓋椀30・37は合った状態で出土したが、製作時の組み合わせとは異なっている。

この集積の南側には壺52、椀44・46および杯身・蓋9点が散在していた。多くが完形であるが杯身10は破片が散在した状態であった。

また、北東隅には土師器甕80が口縁部を下にして置かれていたが、その部分のみ敷石が除去されていた。80の西側では杯蓋9が奥壁に立てかけられた状態で出土した。

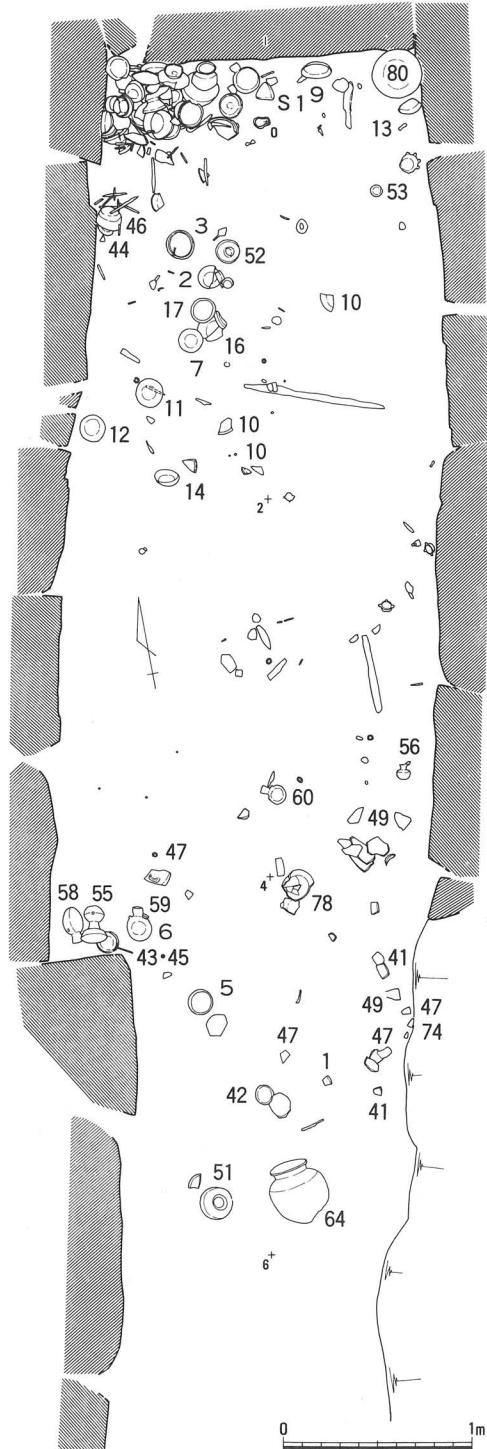
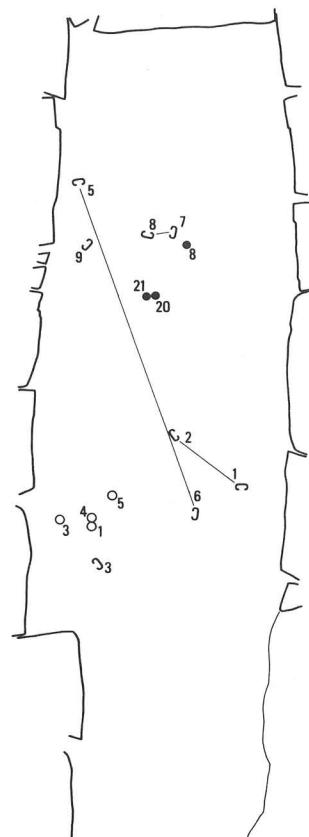
袖部には甕55、提瓶58・59、椀43・45が置かれており、43・45は重ねて置かれていた。それから少し離れた位置に把手付椀47があるが、これの破片は玄門東側の広い範囲に散在している。47以外に蓋41、壺49、土師器椀74も同様に玄門東側付近に破片が散布した状態であった。また土師器甕78はこれらに近接した位置からの出土であるが床面よりも約10cm高く、追葬の遺物かと思われる。

土師器椀は74以外に4個体が出土しているがいずれも玄室前側～羨道奥側にかけての出土である。なお、75は破片が閉塞部分からも出土した。

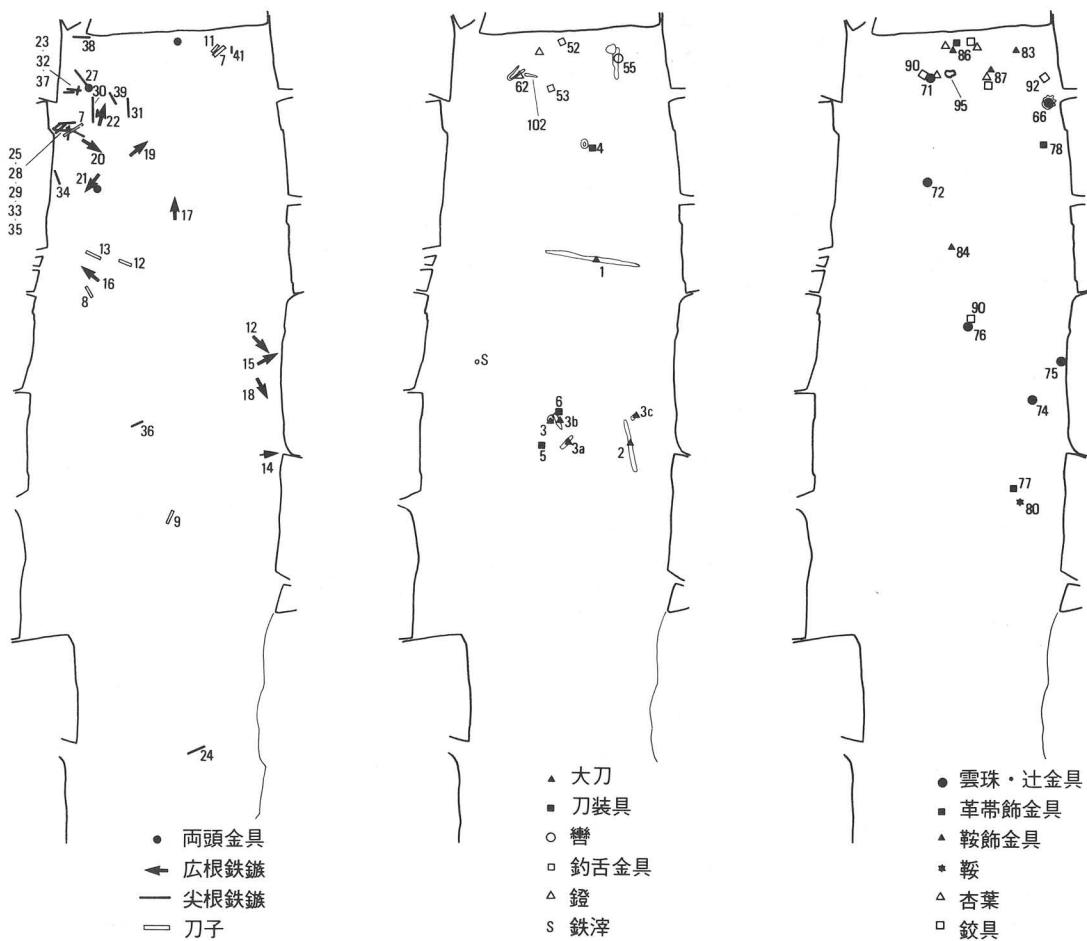
羨道の奥側、円礫敷きの手前部分には須恵器甕64と短頸壺51が置かれていた。このように羨道の奥側に須恵器甕を置いた例として備中こうもり塚古墳などがある。

耳環のうち中央付近から出土した7・8は近接した状態であり原位置をとどめるとみられるが、第20図に示すように他はかなり動かされている。玉類の多くは土の洗浄によって検出されたが、位置の判明しているものでは、ガラス小玉と水晶勾玉が袖部近くから、土製小玉は玄室中央からの出土であり、両者は別に用いられたものと思われる。

3本の大刀のうち、1は玄室奥側に東西向きに置かれていた。刀身には装具が付いておらず、これに伴う可能性のある鐔4は北側に離れた位置からの出土である。2は東側の棺台石の下になって出土した。3は中央付近に破片がまとまっており、刀装具5・6も近接して出土した。また、刀子は玄室の各所から出土しており特にまとまりは見られない。

第19図 2号墳石室内遺物出土状況（1）
(S=1/40)第20図 2号墳石室内遺物出土状況（2）
(玉・耳環) (S=1/60)

鉄鏃のうち尖根のものは玄室北西隅の須恵器の集積と南側の須恵器46・44の間の50cm四方ほどの範囲に集中して出土した。床面から15cmほど上方の位置で出土しはじめ、床面に接したものもあった。東西にむき、西側が少し高くなるのがかなり多く、須恵器とともに片付けられた際には矢柄が遺存しており、側壁に立てかけるように置かれた可能性が考えられる。なお、38は須恵器集積の下から、41は羨道中ほどから出土した。一方、広根の



第21図 2号墳石室内遺物出土状況（3）（鎌・大刀・馬具他）（S=1/60）

鎌のうち19～22は尖根鎌の南東側から、12・14・15・18は玄室中央の東壁に接して、16・17は中央やや西側から出土している。これらもある程度動かされていると思われるが、分布が尖根鎌のそれとは少しづれており、両者は取り扱いが異なっていた可能性が考えられる。

両頭金具は玄室北西隅から出土したがまとまった状況ではない。鉄鎌の分布と重なるようである。

馬具は玄室奥側から東半部にかけて出土したが、繩55から鐙62にかけての部分が中心となる。雲珠66は北東の側壁近くからの出土である。辻金具のうち4点と飾金具のいくつかは玄室中央から東側壁にかけての部分から出土しており、棺3の設置の際に動かされたものと思われる。

また、玄室西側床面から鉄滓1点が出土し、他に水洗によって2点検出した。石製品S1は奥壁の前側中央で出土した。

羨道

羨道の入り口付近では遺物はいずれも破片となっていた。器台61はおもに閉塞施設よりも内側から、高杯28、62は外側から出土した。なお、この部分からは大甕および甕の破片が出土した。いずれも胴部のみの破片であるため図示していないが、前者は65と同様の大きさとみられる。後者は玄門の杯蓋5に近接して出土した破片と接合し、その形状から64よりもやや大きなものになると思われる。

羨道入り口から前庭部にかけては、かき出された遺物や墓前祭祀の土器類がさらに所在した可能性が考えられるが、この部分の保存状態がよくないため、それらは流出したものと考えられる。

墳丘（第11図）

このほか石室外の遺物として大甕65がある。墳丘の南東隅が3号墳と浅い溝状をなす部分で、幅1.2m、長さ2.8mの帯状の破片の集積として検出した。その集積から離れた2号墳墳丘斜面上でも同一個体の数片が出土したため、この個体は2号墳の側から落下・堆積したものと判断した。破片の集積は地山面よりも5～8cm高い部分に形成されており、墳丘の築造後若干の時間をおいて堆積したものと思われる。なお、3号墳葺石の崩壊した石材を含む層はこの集積の上に形成されている。土師器甕79は小片の状態で65の破片に混じって出土した。

鉄滓・炉壁は65の集積部分に接した径1mほどの範囲に最も多く散布が見られたが、65の破片と混在した状態で出土したものも少なくない。この部分から出土した鉄滓の量は約97点、5.7kgである。どちらの古墳に伴うものか判断がむずかしいが、2号墳の石室内などからも鉄滓が出土しているため、ここでは2号墳の墳丘上から落下・堆積したものと考えた。

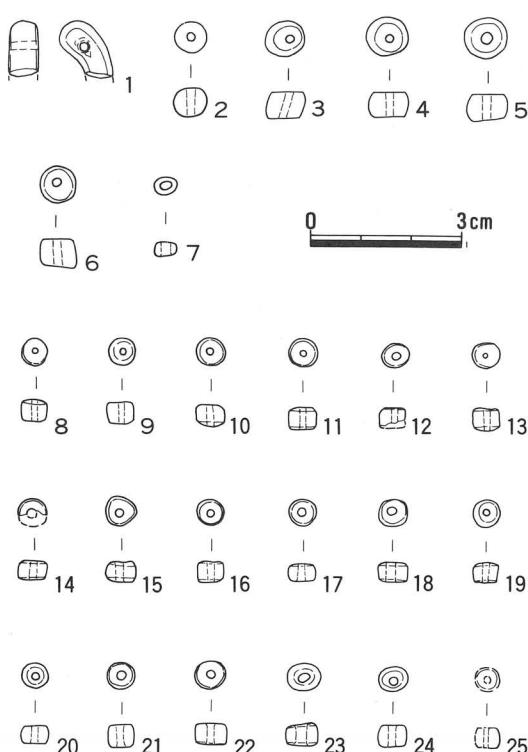
第3節 2号墳出土遺物

石室および墳丘からの出土遺物は須恵器・土師器および鉄器、玉類、耳環、鉄滓などである。須恵器は杯身・杯蓋、高杯、提瓶、壺、壺、器台など67点、土師器は甕、椀など8点、鉄器は大刀、鎌、馬具など103点からなる。石室床面は攪乱されておらず、石材の抜き取りの際に失われた遺物は少なかったと推定されるが、馬具等で欠失の見られるものもあり、一部の遺物が追葬時にかき出された可能性が考えられる。石室の入り口部分から前庭部にかけては保存状態がよくないため、かき出しの遺物等はその一部が遺存するにすぎないとみてよい。

(1) 装身具（図版12）

玉類（第22図）

玉類は28点出土した。水晶製勾玉1、メノウ製丸玉1、ガラス小玉5、土製小玉21点であり、土製小玉のうち3点は小片であるため図示できなかった。出土の状態からガラス小玉と土



第22図 2号墳出土玉類

葬時に動かされているようで、1・2が70cm、5・6は2.7m離れて出土した。一方、7・8は原位置をとどめていると判断され、最終段階に近い埋葬に伴うと考えられる。

9点はいずれも銀環で、確実に金箔が残るものは認められない。

1・2は径8mmの銅芯を曲げて短径2.6cmの円形としたものである。長径は2が2mm大きいが錆の状態などから対になると判断した。表面の銀箔は風化・剝離が著しく、破面の一部がわずかに銀色をとどめている。3・4は径4.5mmの銅芯を曲げて長径2.7cmの環にしたものである。保存状態は比較的良好で箔は銀色をとどめている。

5・6は中空の銀環で、管は縦6.5mm、横8mmの楕円形で、環の長径は3.2cmを測る。外面は現在暗褐色を呈し、部分的に銀色の光沢をとどめるにすぎない。5は調査中に一部欠損したため内面の状況を知ることができる。管の内面および破面は白銀色を呈しており、銀の薄板によって製作されている。岡山県下での中空耳環の出土例は本墳のほかに勝央町工業団地10号墳¹⁾、倉敷市琴海1号墳²⁾、山陽町岩田14号墳³⁾などである。中空耳環については群の中核をなす古墳からの出土が顕著であることが指摘されているが⁴⁾、その傾向は吉備においても同様である。

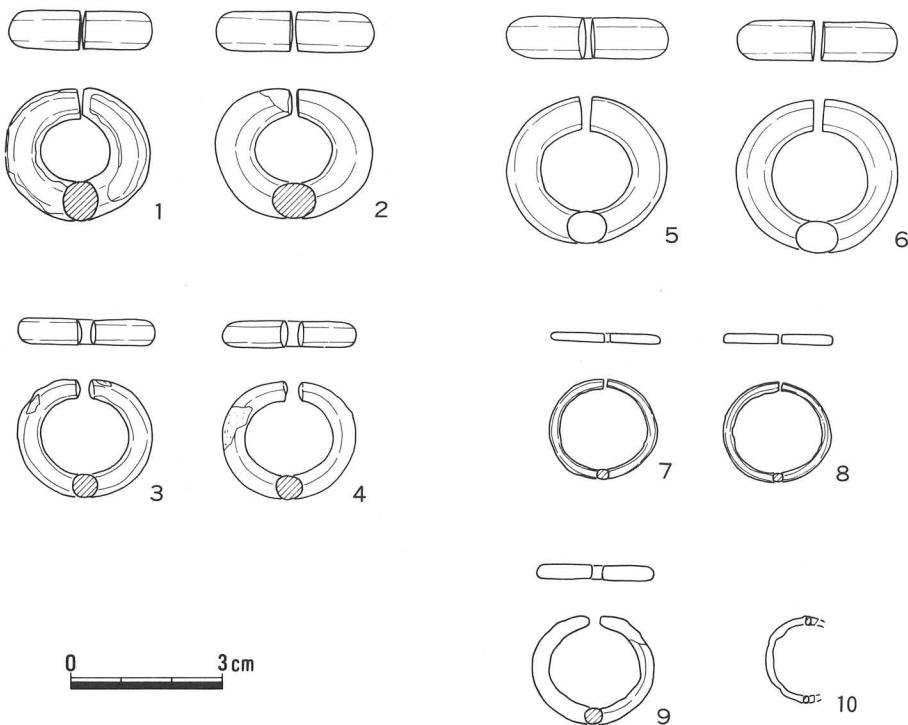
製小玉は別々に扱われたと思われる。

1は水晶製の勾玉である。下半は欠損しているがこれは使用中の欠損と思われる。頭部は細く、後期の勾玉としては小形である。2はメノウ製の丸玉で、ほぼ球形で径6.4mmを測る。3～6はガラス製小玉で径は8mm、高さ5mm前後で、暗紺色である。7は小形のもので径4.2mmを測り水色を呈する。

土製小玉は径6mm、高さ4.5mm前後で臼形を呈する。表面は黒褐色、破面は褐色である。

耳環（第23図）

9点出土した。いずれも玄室内からの出土である。1～8はそれぞれ対になるが、9は1点のみで対になるものが失われている。これらから被葬者数は少なくとも5人があったとみられる。多くが追



第23図 2号墳出土耳環

7・8は径2mmの銀線を曲げて長径2.2cmの円形にしたもので、表面は褐黒色を呈する。断面はやや角張った円形であるが、稜をもつと言えるほどではない。9は長径2.4cmを測るが保存状態は良くなく、銅芯、銀箔とともに風化・剝離が著しい。断面径3.5mmを測る。

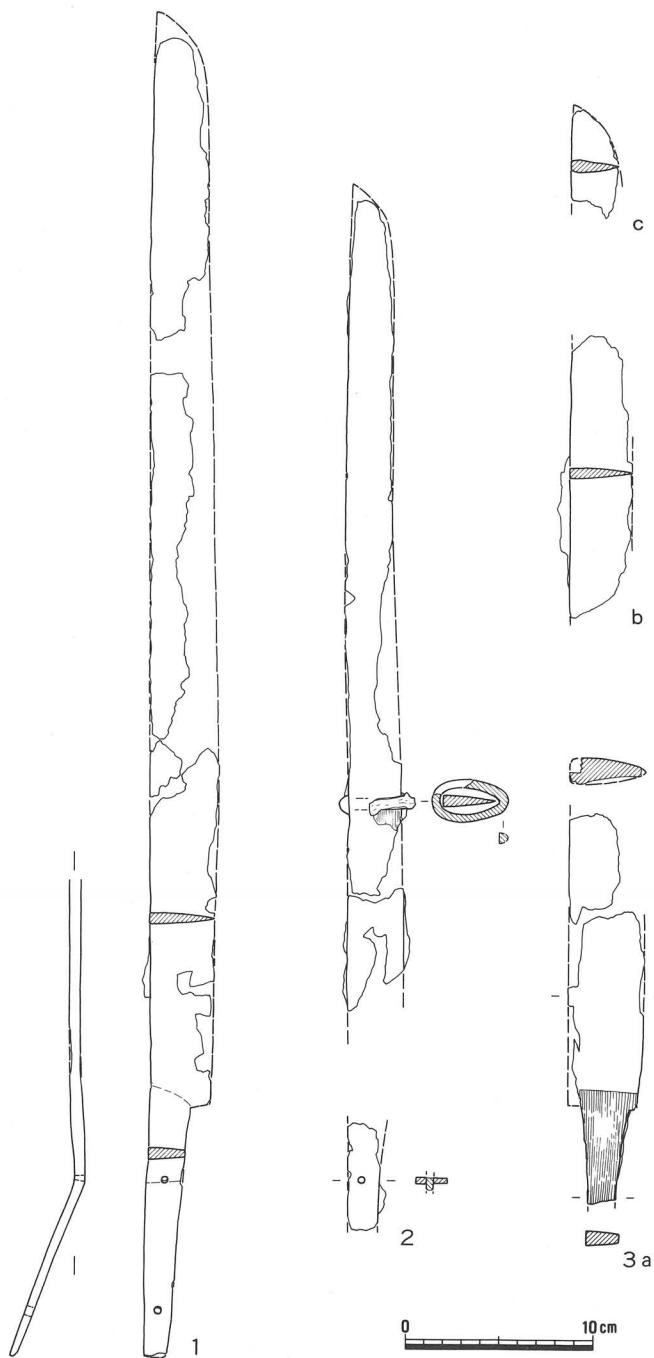
また、10は幅1.5mmの細い銅線を曲げて径1.7cmの円形にしたものである。錆がかなり進んでおり両端は欠損している。断面は径1.2mmの円形をなす。耳環とは考えられず、弓の飾金具の可能性も考えたが両頭金具の長さとも大きさが異なっており、ここでは不明装飾品として取り扱う。

(2) 武器

大刀、刀子、鎌、弓金具、馬具などの武器・武具が出土したが、石室床面が水田面下になっていたためか保存状態はあまり良くない。

大刀（第24・25図、図版12・13）

3点以上が出土した。いずれも平造りの直刀である。大刀1は玄室奥側から出土したもので、完存しているかと思われたが刀身のかなりの部分が錆と土に換わっていた。推定全長72cmで身幅は中央付近で最も広くなるようである。幅3.7cm、厚さ6mmを測る。茎は長く13.6cmで、棟側の厚さ6mm、刃側の厚さ4mmを測り、目釘孔2をもつ。関は刃側のみにつき、直角にちか

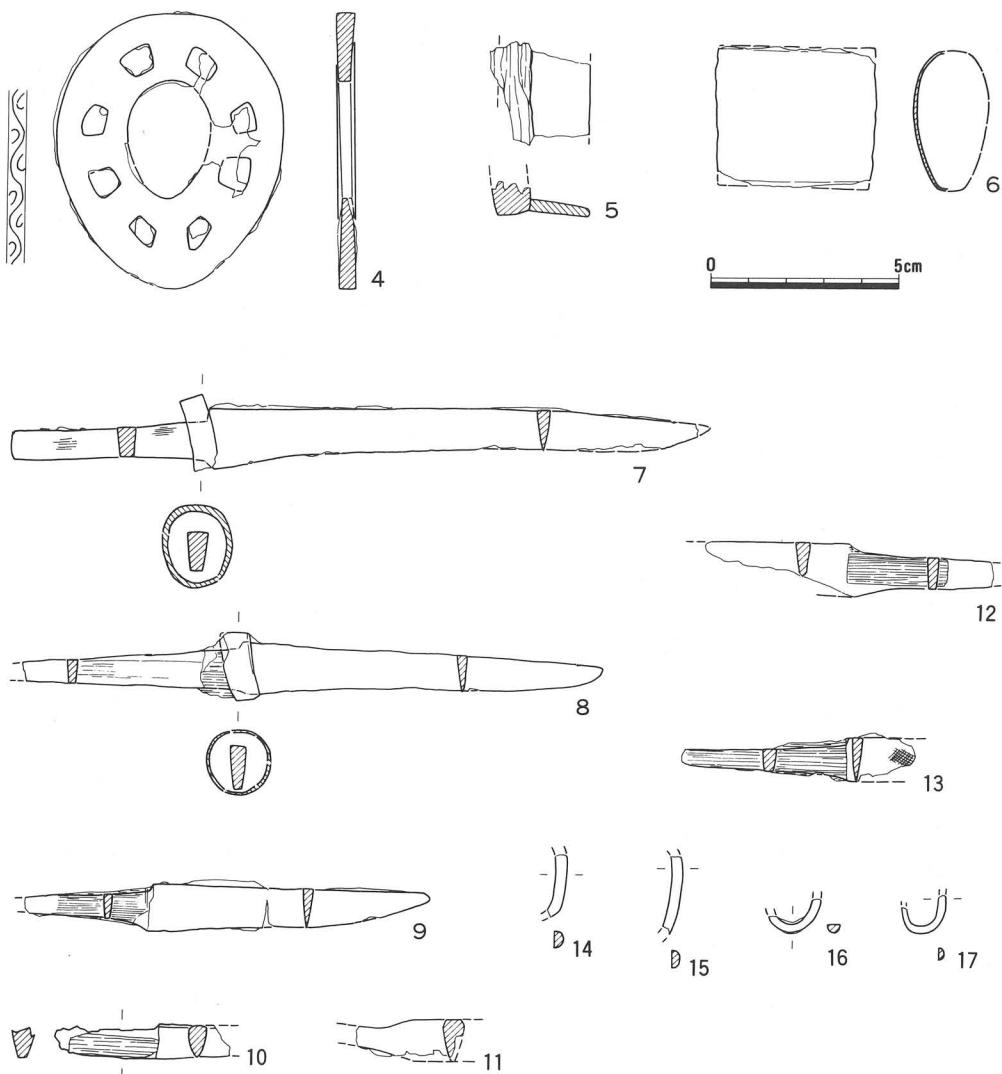


第24図 2号墳出土大刀 (S=1/4)

い角度をなす。この大刀は第24図に示すように上側の目釘孔のところで大きく折り曲げられており、関の上方まで湾曲が認められる。曲げられた時点では目釘は抜かれていたわけであり、外装をはずして曲げて副葬されたものと考えられる。

2は刀身下半が腐朽しており、全長は不明である。刀身は幅2.8cm、厚さ6mmとやや細身である。この個体と考えられる茎片には径3mmの目釘が遺存している。茎の断面は長方形にちかく、厚さは棟側で3.5mm、刃側で3mmを測る。切先から32cmの位置には鉄地銀張とみられる責金具が遺存している。錆による変形が著しいが長径41mm、短径22mmの楕円形をなしており、もとは鞘側の幅5mm、高さ5mm前後の半円形にちかい横断面を呈するものであったと思われる。

3は身幅が下端で4.0cm、厚さ14mmと最も大きいが、刀身の崩壊も著しい。棟側は剝離しているが棟・刃両側に直角に近い関をもつと思われる。茎の断面は台形をなし棟



第25図 2号墳出土刀装具・刀子

側で 8 mm、刃側で 4 mm を測る。茎から関の上方にかけて柄の木質が遺存している。なお c は a と同一個体とみられるが b は銹の状態がそれらと異なっており、別個体の可能性がある。

4 ~ 6 は刀装具でいずれも鉄製である。

4 は倒卵形八窓式の鎧で長径 7.3 cm、短径 6.1 cm、内孔の長径 3.1 cm を測る。外縁にむかって厚くなっている外縁面の幅 5 mm を測り、その部分には銀象嵌が認められる。象嵌は簡略化された波状唐草文で、主茎の左右に弧文が交互に配されている。この型式の鎧で銀象嵌をもつものとして、県内では岡山市平瀬 2 号墳⁵、同西山 2 号墳出土資料がある。

5 は鎧および鉢の破片である。鉢の長さ 1.6 cm を測り内面には木質が遺存している。鎧は銹

によって大きくふくらみ外面が破損しているが、内側で7mmほどとやや厚い。喰出鍔の可能性がある。

6は鞘口金具と思われるもので、長さ4.2cmを測り内面には木質が遺存している。推定断面形は長径3.7cm、短径2.0cm前後で、大刀2の装具かと思われる。外面に布痕跡が認められる破片もあり、布で巻かれていたようである。

刀子（第25図、図版13）

7点出土している。7は先端が一部欠損している他はほぼ完形である。残存全長18.0cm、推定刃部長13.2cmを測る大形のもので、内反りである。棟・刃の両側に閑がある。幅は関部が最も広くて1.6cm、厚さはその部分で4mmを測る。茎は断面が台形をなし棟側で5mmを測り、木質がわずかに遺存している。関部には幅が6mmの柄縁金具が遺存しており、長径2.2cm前後に復元される。

8は茎の先端を欠損する。全長15.4cmで、うち茎の長さ5.9cmを測る。関付近で刃部幅1.3cm、厚さ4mmを測り、茎の厚さは3mm前後である。7と同様、幅7mmの柄縁金具が遺存している。柄縁金具は片側しか遺存していないが径1.7cmほどの円形になる可能性が強い。

9も茎の先端がわずかに欠損している。全長10.7cm、刃部長さ7.3cmで、刃幅は中ほどで1cm、厚さ2.5mmを測る。茎には木質が良好に遺存している。関は棟側では小さな段をなすのに対し、刃側ではゆるやかなカーブを描いている。

10～13はいずれも刃部前半が欠損している。12は関で幅1.4cmとやや広いが、他は1.1cm前後である。10・12・13では木質が良く遺存している。12では木質は幅8mmの長方形を呈しており、柄が細い部材の組み合わせになっていた可能性がある。

14～17は長径3cm弱の橢円形をなすとみられる小破片で、横断面は幅4mm、高さ2mm前後のかまぼこ形をなしており、刀子の責金具と推定される。

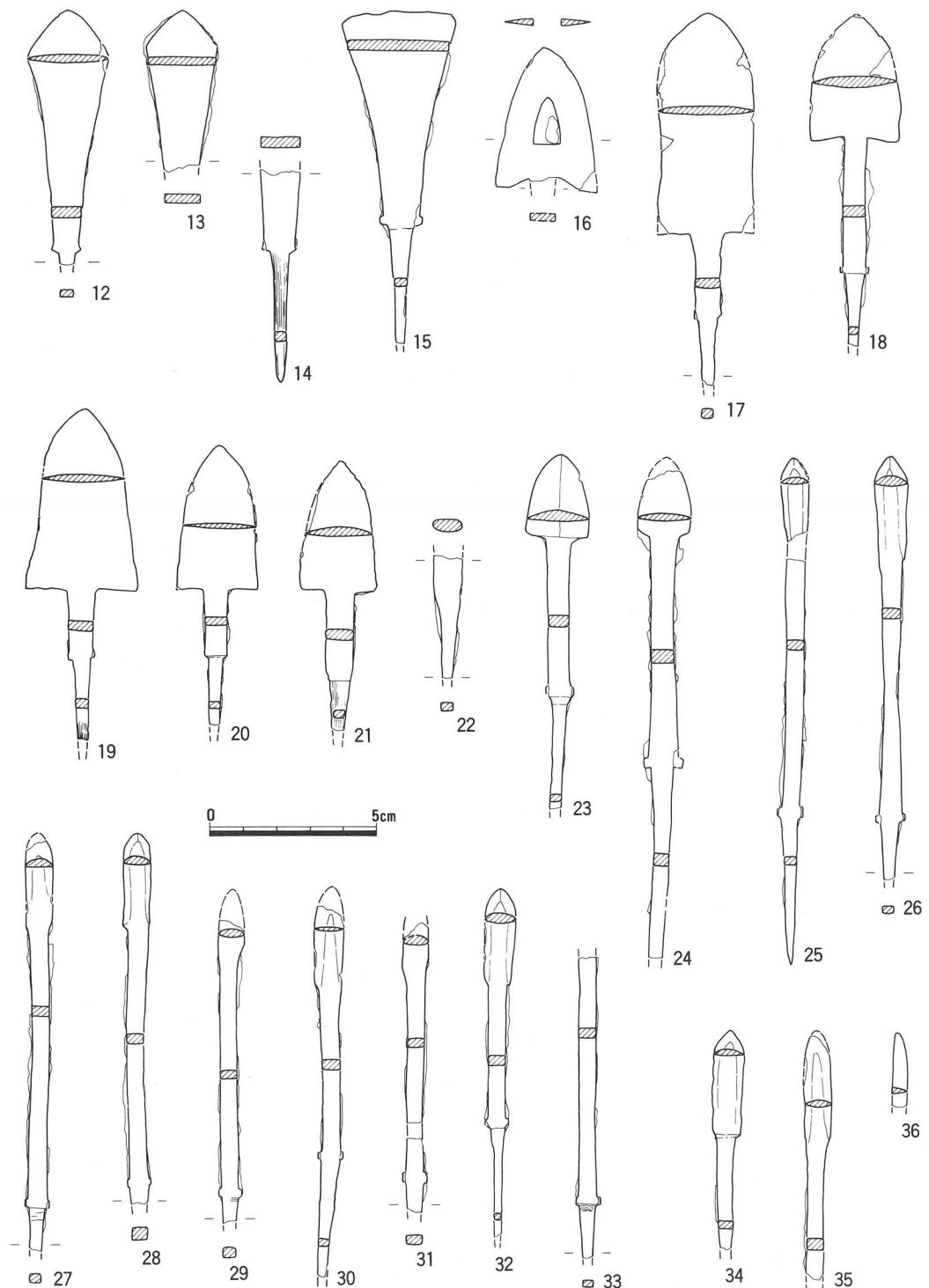
鎌（第26・27図、図版14）

鉄鎌は玄室北西部を中心に出土した。鎌身と頸部から算定した総数は27個体であり、34～36が37～41などと同一個体にならないとすれば、さらに数個体多くなる。これらのうち11個体が広根鎌であり、以下の6形態に区分することができる。

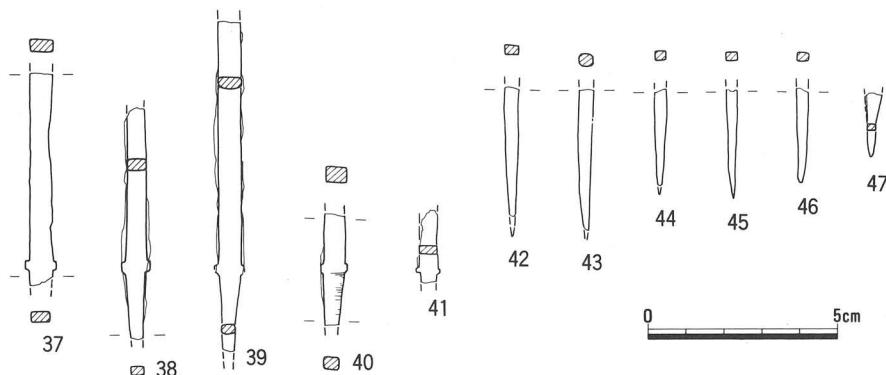
a（12～14）：切先は山形をなし、鎌身は長くのびる。鎌身関部は弱い突起状になる。14は鎌身上半が欠損しているが、その形状からこれに含まれると思われる。

b（15）：切先は直線に近く、鎌身は逆三角形をなす。鎌身関部は棘関をなし、小さな方形の突起をもつ。残存全長10.0cm、切先幅3.4cmを測る。

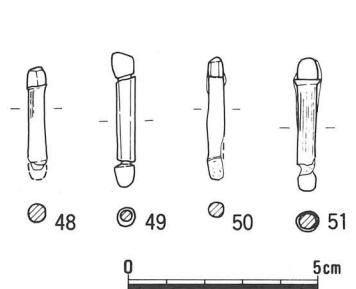
c（16）：鎌身は三角形をなし、中央には砲弾形の透かしが配される。頸部は欠損しているが厚さ2mmと薄く、短いものであろう。



第26図 2号墳出土鉄鎌〈1〉



第27図 2号墳出土鉄鎌〈2〉



第28図 2号墳出土両頭金具

d (17) : 大形の長三角形の鎌身で、関はほぼ直角である。鎌身下半が長く大形である。全長11.2cm、切先幅2.8cmを測る。明確な棘状突起は認められない。

e (18) : 鎌身は短い長三角形で、比較的長い頸部をもち、下端には棘状突起をもつ。全長9.9cm、鎌身幅2.7cmである。

f (19~22) : 鎌身は長三角形式で切先が尖っている。いずれも関は直角で頸部は短い。22は鎌身が失わ

れているが、頸部下端に明確な棘状突起をもたないことからこれに含めた。鎌身の長さは19で5.5cm、21で4.0cmを測る。

長頸鎌はいずれも頸部下端の関に棘状突起をもつ。これらは以下の3群に区分できる。

g (23・24) : 三角形の鎌身をもち、頸部はやや幅広で厚い。24では茎が幅7mm、厚さ4mmと太く、残存全長は14.7cmである。

h (25~35) : 柳葉形の鎌身をもつものである。頸部の長さは27が8.0cm、30が4.8cm、32が4.0cmを測り、かなりばらついている。鎌身は両側に刃をもっており、錆による変形が著しいが断面は半円ないし台形になるようである。26・28~31・35のように一方にのみ関をもつもの、27・32・34のように両方に小さな関をつものに区分できるが、それらにもかなりの差異が認められる。28で全長11.1cm、鎌身の長さ2.8cm、幅8mm、厚さ3mm、頸部の幅6mm、厚さ3mmを測る。

i (36) : 小形で一方にのみ刃をもつ片刃箭式の鎌身とみられる。幅4.5mm、厚さ2mmである。

37~47は頸部および茎の破片である。

両頭金具（第28図、図版13）

48～51は弓の両端、弭よりもやや内側の位置に装着されていたとみられる両頭金具で、出土の5点のうち4点を示した。遺存状態が良くなく両頭棒の一端が欠損していたり、筒部の縁が破損しているものが多い。49で全長3.5cm、筒部の太さ5mm、軸部の太さ3mmを測る。

(3) 馬具（第29～33図）

轡、鞍金具、雲珠、辻金具、鐙など馬具一式が出土した。

轡（55）（第29図、図版15）

玄室北東隅で出土したものであるが錆がかなり進んでおり腐朽・欠失している部分も多い。鉄製素環鏡板をもつものである。鏡板は長径8.2cmの楕円形の環に長さ2.2cm、幅3.2cm、厚さ3mmの長方形の立聞がついており、全高は8.5cmに復元される。立聞は上部がやや丸くなり、側辺はわずかに内湾している。衡は2本の金具によって構成され、左側のもので長さ8.2cmを測る。右側のものは中央が欠失しているが両端の環の向きが直角になるものと推定される。左側の金具を例にとれば外側の端環径1.9cm、内側のものが1.7cmで、内側の端環が小さくなっている。引手は欠損しているため全長が不明である。径2.4cmの引手壺が造られているが屈曲は示さない。

鏡板、衡、引手の連結には橋金具と呼ばれる遊環が用いられている。径5mmの鉄棒を曲げて径3.2cmの環を形成しているが、鉄棒の両端を合わせるのではなく重ねて収めている。なお、右側の橋金具は半分強が失われているが図では復元して示している。

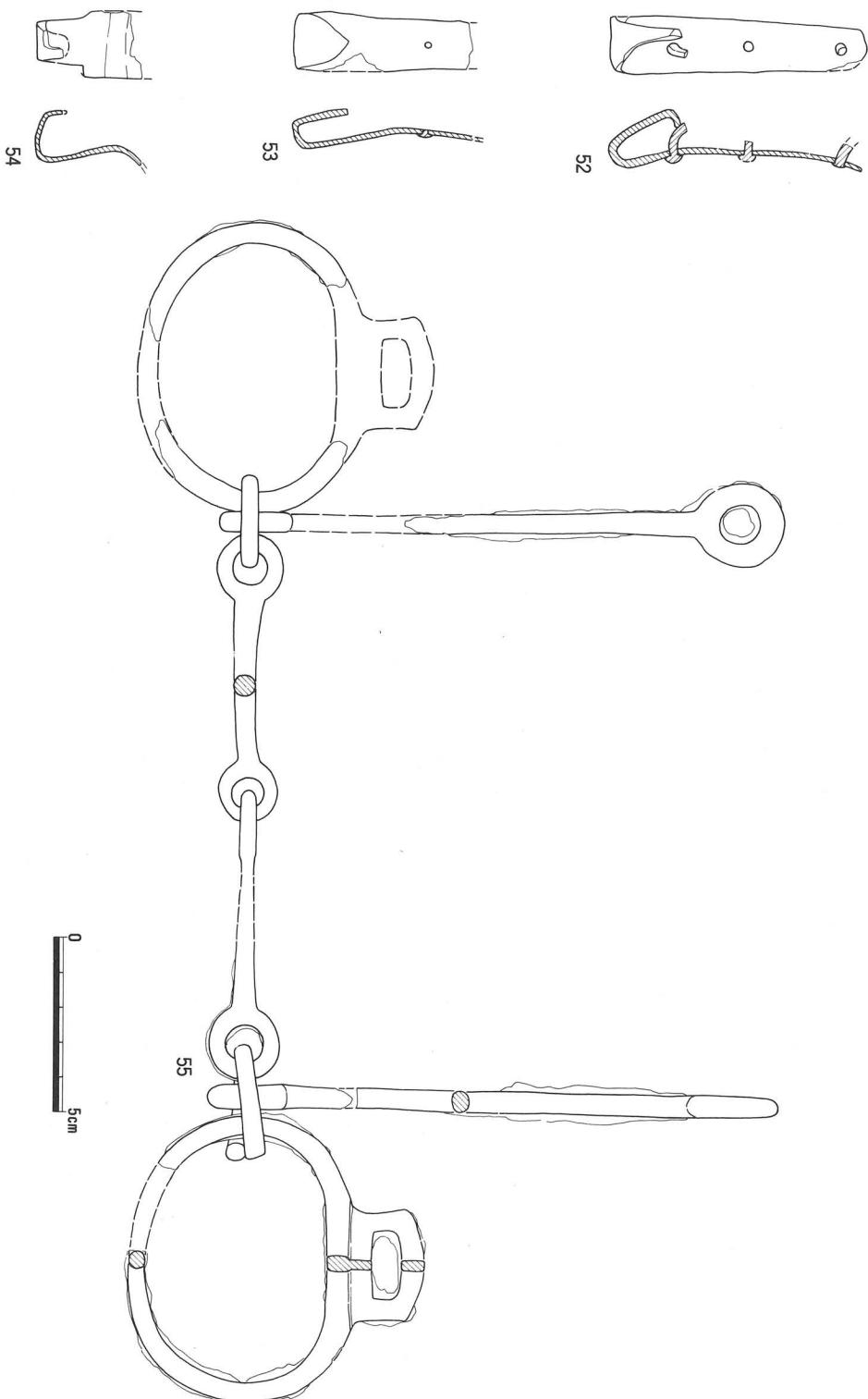
こうした橋金具を用いる連結法は6世紀中葉以前に盛行するもの⁶⁾、それ以降には少数の例しか認められなくなる。そうした資料である北房町赤茂1号⁷⁾や倉敷市赤井西4号墳⁸⁾などの例では鏡板は瓢形環状鏡板であり、本例とはやや異なっている。また、55の鏡板は環径が大きく古い様相を示すかに見えるが、立聞孔が鉄板の中央に穿たれていることから、6世紀後半に出現し以後鏡板の主流を占めるとされる回字形立聞⁹⁾に分類される。したがって、この轡はこの時期の型式変化に則してはいるものの、やや特異な点をもつと言えるようである。

釣舌金具（52～54）（第29図、図版15）

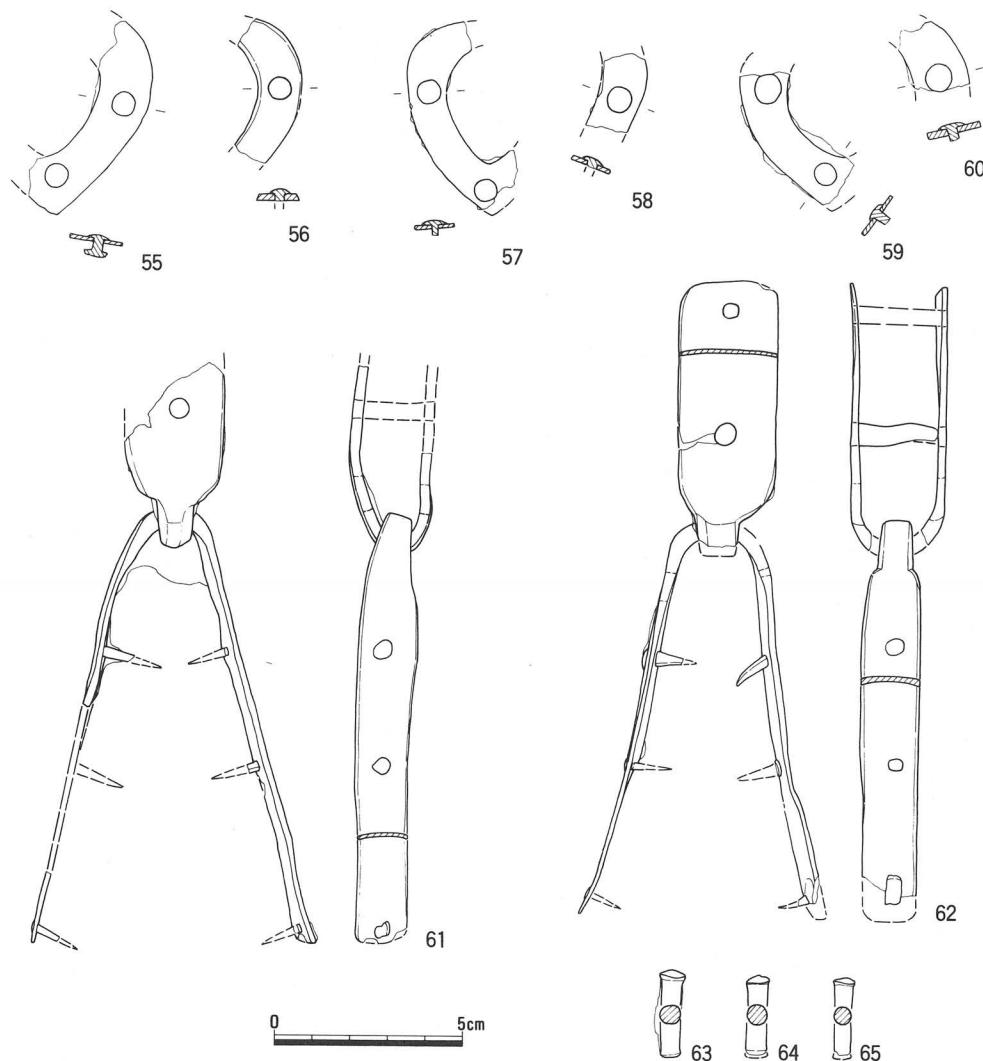
3点出土したが大きさ、形状はそれぞれ異なっている。いずれも鉄製で、53・54は上部が欠損している。52は幅1.7cm、長さ約9.5cmの鉄板の先を曲げたもので釣部は細くとがり、端部はさらに直角に曲げられている。本体には鉢3本が打ち込んであり、鉢脚の先端は上方に曲げられている。53は幅1.7cmで、三角形の釣部は本体と平行に曲げられており、本体上部には鉢が打たれている。54は幅1.8cmで、先端は段をなして細くなり釣部となる。全体の断面はS字形をなしている。

杏葉（55～60）（第30図、巻頭図版2）

破片6点が出土した。鉄製の小形の杏葉であるが、厚さ1mm前後と薄いためかなり破損して



第29図 2号墳出土馬具〈1〉



第30図 2号墳出土馬具〈2〉

いる。上部の破片が出土しなかったため懸垂部の形状は不明であるが、小型の鉤具90～92が組み合う可能性がある。縦に長い心葉形を呈し、内側に同形ないし杏仁形の透かしを配する。57から復元される外形寸法は幅5.4cm、長さ5.5cm、55はそれよりも若干小さいようである。

笠鉢が打たれており、破片から復元できるのは下側と左右の3ヶ所であるが、奈良県大和二塚古墳出土資料¹⁰⁾のように四方に配される可能性が考えられる。裏面は平坦で木質は見られず、また、57の鉢脚から地板の厚さが2.5mmであったと判断され、革に打ち付けられていた可能性が考えられる。少なくとも4個体はあったとみられる。

鐙（61～65）（第30図、図版15）

木製壺鎧の鉄製吊金具一对が出土した。鎧金具がU字形の鎧軛金具で吊り下げられる型式のものである。

鎧金具は鎧軛金具にかかる吊手部分と長い板金部分からなり、全体の形状はハ字形をなす。板金部分は遺存状態のよい61で長さ9.2cm、幅1.6cm、厚さ1mmを測り、先端は丸みをもった方形をなす。横断面は中央外側へわずかにふくらんだ曲面をなす。上方寄りに2本、下端に1本の鉄釘をやや下向きに打ち込んで木製壺鎧に固定するようになっているが、木質はあまり遺存していない。

鎧軛金具は61では上部が欠損しているが、62ではほぼ完全に遺存している。幅8~10mm、厚さ5mmの吊手部分の両端は長さ6.2cm、幅2.6cmの長方形板状をして上方にのび、上下2ヶ所で鉄鉢を打ち込んである。62では吊手は板状部分の中軸から少しづれており、61でも若干はずれるようである。

63~65は鉄鉢で、鎧軛金具用いられた可能性が考えられるためここに示した。63で長さ2.3cm、径6mmを測り、64、65は端部が欠損している。

通常、木製壺鎧は兵庫鎖によって懸垂されることが多く、こうしたU字形の鎧軛金具を用いるのは本例のほかに京都府湯舟坂2号墳¹¹⁾、福岡市片江8号墳¹²⁾などの資料が知られる程度であるが、それらでは厚さ7mmほどの厚い鉄板が使用されている。それに対し、本例では鉄板の厚さは2mm前後と薄く、内面には木質は遺存していないが、木材が挟まれてそれが革帶を受ける可能性が考えられる。

鎧軛金具・鎧金具を合わせた全長は17cmになると推定される。

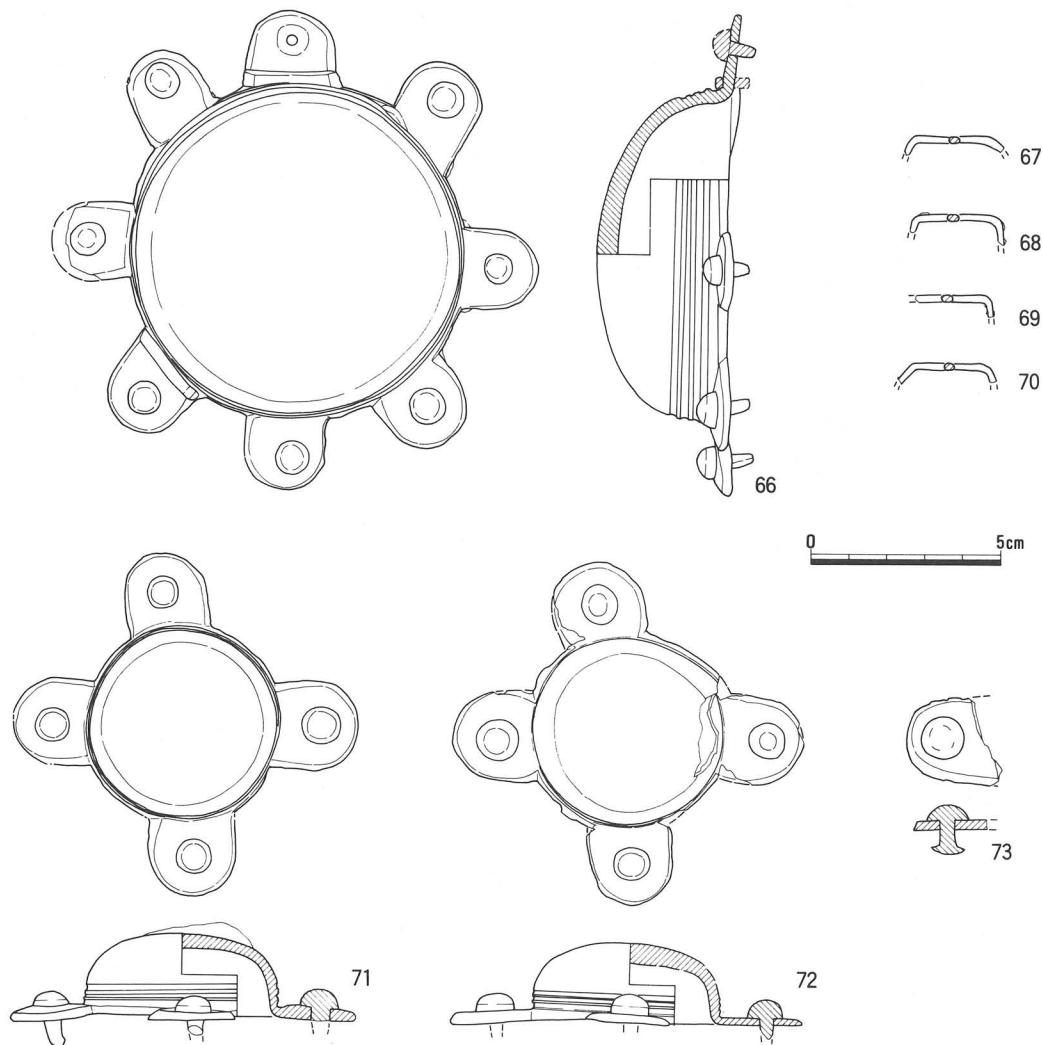
雲珠・責金具(66~70)(第31図、巻頭図版2)

玄室北東隅から出土した。本体および鉢頭は鉄地金銅張である。半球状の鉢部と8本の脚からなり、鉢部側面には幅の広い4条の沈線を段状にめぐらせていている。鉢部の径8.9cm、高さ3.5cmで、脚を含めた径は12.7cmである。脚は2.1cm前後と幅広で丸みをもち、うち2箇所には幅3mmの責金具が遺存していた。鉢は頭部径8.5mm、全長1.5cmで、脚の下半はいずれもやや内側に曲げられている。

67~70は遊離して出土した責金具である。このうち67は辻金具76に近接して出土したがそれに用いられたものとは考えにくい。長さからみて雲珠あるいは辻金具71、72からはずれたものと思われる。いずれも鉄地金銅張で、下部が欠損する。断面は幅3mm、厚さ2mmの隅丸方形をなす。

辻金具(71~76)(第31・32図、巻頭図版2・図版16)

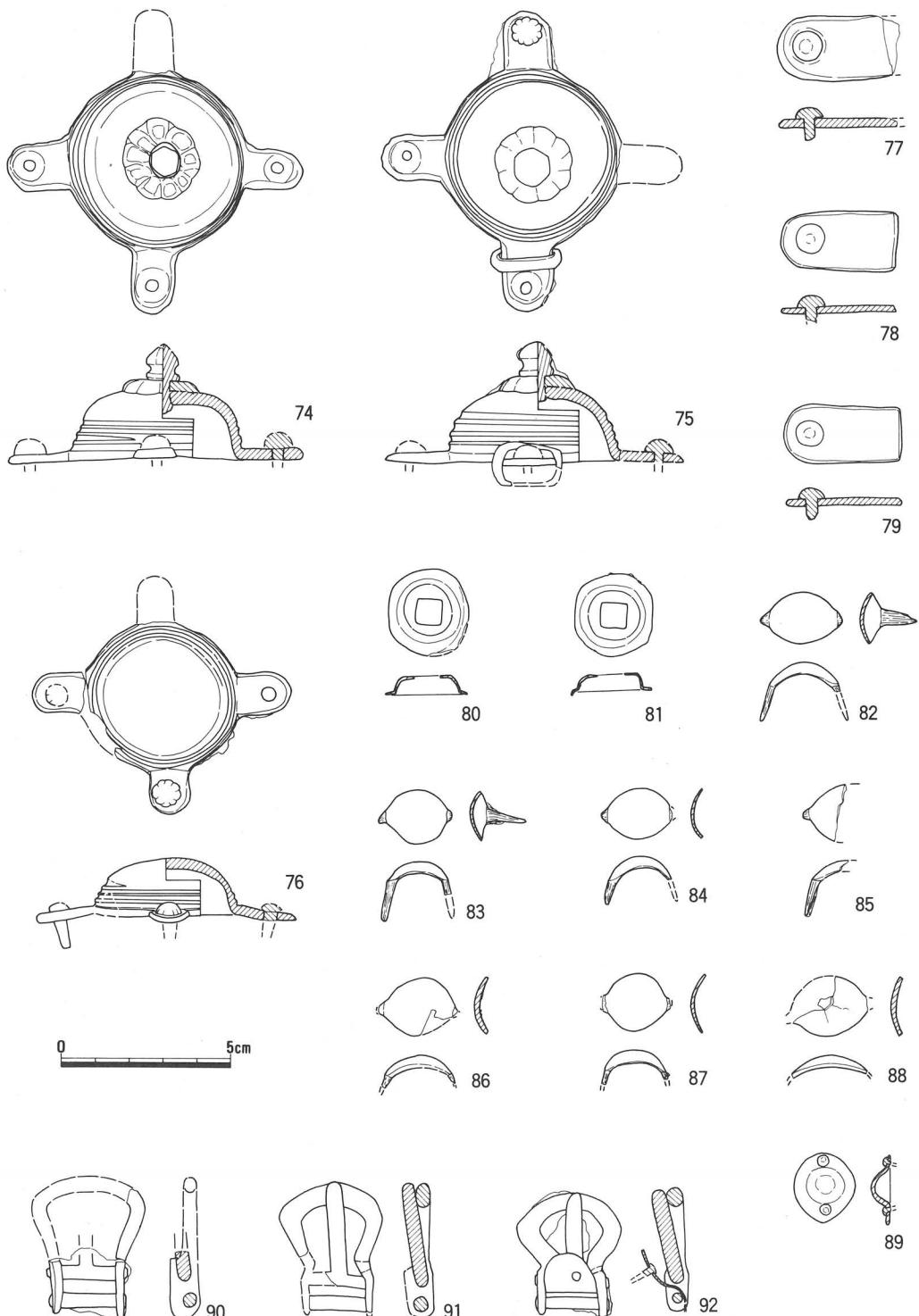
ほぼ完形のもの5点と破片1点が出土した。いずれも鉄地金銅張で、鉢部は半球状である。脚部および鉢部の形状からa、bの2群に区分できる。



第31図 2号墳出土馬具〈3〉

a (71~73) : 肩が張って丸みの強い鉢部と円形ぎみの大きな脚をもつ。71と72はほぼ同じ寸法・形状で、71で鉢部の直径5.3cm、高さ2.1cm、脚部は長さ2.1cm、幅2.3cm前後を測り、渡金もよく残っている。鉢部の側面にはやや段状の沈線3条が彫り込まれている。鉢の大きさ・長さは雲珠66のものとほぼ同じであり、鉢部や脚部の形状も雲珠66と同様の特徴を示している。貴金属は認められないが、上記のように伴う可能性がある。脚の配置は直角とならず、軸線の狭角は83°をなす。

73は脚の破片である。残存部の長さ2.5cm、復元幅2.4cmを測り、71・72よりも大きな脚になるようである。鉢頭も径10.5mmと大きく、脚端がつぶしてある点も異なっている。鉢端の稜か



第32図 2号墳出土馬具〈4〉

ら脚部裏面までの幅は4.5mmである。

b (74~76) : 鉢部はややなで肩で、細長い脚をもつ。74・75はほぼ同じ大きさで、鉢部には花形座と宝珠飾をもつ。74で鉢部の径5.2cm、宝珠飾までの高さ3.3cm、脚部は長さ1.8cm、幅1.4cm前後を測る。鉢部側面には沈線3~4条が配される。花形座は74では9弁、75は銹による変形が著しいが10弁になるようである。また、宝珠飾は鉄地銀張で上部はふくらみをもつ6角形になるようである。脚の鉢は多くが失われているが75に1点遺存している。鉢頭には細かい刻みが施され10弁の花形になる。75では責金具も遺存している。

69は67・68と同様の細い脚をもつが、鉢部の径4.5cm、高さ1.7cmとやや低く小形である。他と同様、鉢部の側面には沈線3条が配されている。脚の鉢の頭部は75と同様の花形になっている。

革帶端金具 (77~79) (第32図、巻頭図版2)

3点出土した。本体および鉢頭は鉄地金銅張である。長方形の一端が丸くなっている、その部分に鉢が打たれている。79で長さ3.4cm、幅1.7cmを測り鉢頭の径は8mmである。77は78、79よりもやや大きく鉢頭の径もわずかに大きくなっている。

鞍金具 (80・81) (第32図)

座金具2点が出土している。径2.5cm、高さ5~6mmの円形で、1辺8mmの方孔をもつ。保存状態が良くないが鉄地金銅張である。

鞍飾金具 (82~89) (第32図、図版16)

7点出土した。鉄地金銅張で平面は杏仁形をなし断面は浅い笠形で、両端は長さ1cm前後の釘になっており、それを下方に向けるため本体側面はゆるやかな弧を描いている。82で体部の長さ2.0cm、幅1.5cm、全高1.7cmを測る。比較的厚さのある木材に打ち込まれており、釘と木目の方向は平行するようである。

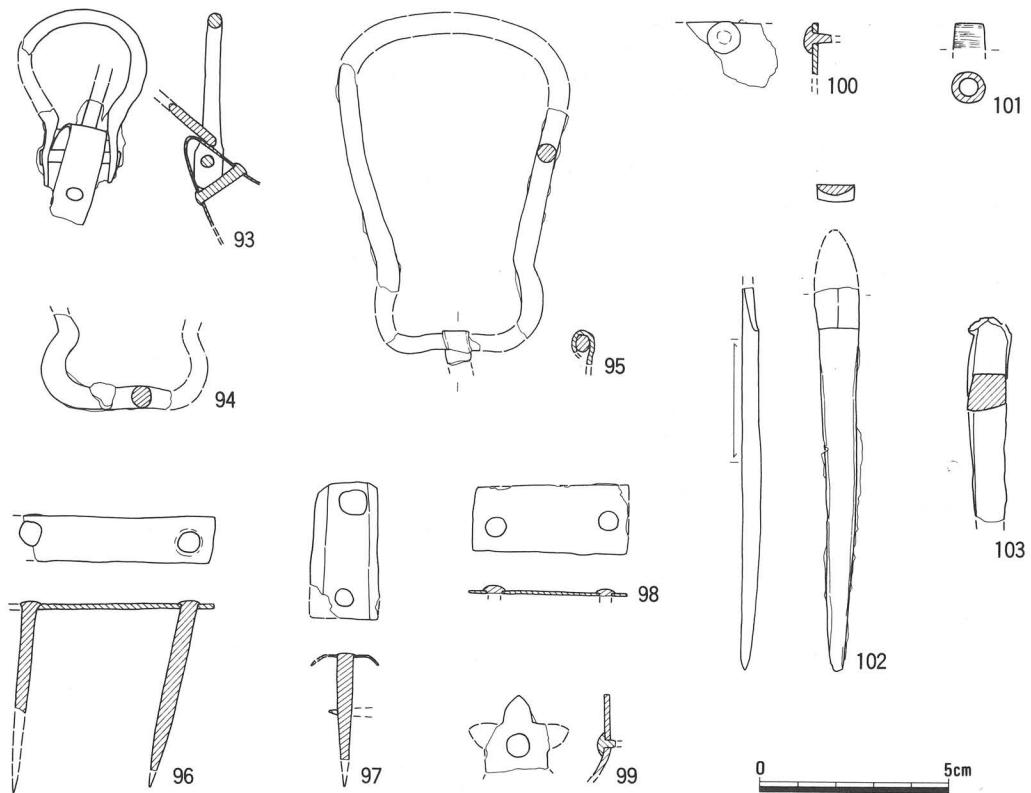
鞍の覆輪に付けられた飾金具と推定され、釘の位置は異なるものの同様に杏仁形を呈する飾金具の例として京都府物集女車塚古墳出土資料¹³⁾があり、また、本例とほぼ同様の形状を示すものに総社市福井大塚2号墳出土資料(青銅製)がある¹⁴⁾。

89は長さ2.1cmで心葉形を呈する鉄地金銅張の飾金具である。中央を径11mm、高さ5mmの円形に打ち出しており、両端に笠鉢を打つ。

鉸具 (90~95) (第32・33図、図版16)

いずれも鉄製で6点出土しており、小形で刺金をもつ90~93と、大形で刺金のない94・95があるが、細部の形状はそれぞれ異なっている。いずれも銹によってかなり破損している。

90は91と同様の大きさ、形状の破片である。基部と輪金の破片を合わせて示したが出土位置がやや離れており、別個体になる可能性がある。91は長さ3.8cm、幅3.1cmを測る。輪金はやや



第33図 2号墳出土馬具（5）

角張り、基部は薄くなつて幅広になり輪金部分と段差をもつ。刺金と基部の鉄棒は輪金基部を貫通するようである。92はやや小形で、輪金は側面に少し広がり基部は90・91と同様に段をもつて広くなる。全長3.6cm、幅3.1cmを測る。基部の鉄棒に幅の広い鉄板をからませており、その端部には固定のための鉢が打たれている。

93はC字形に丸くなる輪金をもつもので輪金の一部と刺金の前半を欠損している。基部の鉄棒に細い鉄板を通して曲げ、鉢で開きを止めないようにしており、おそらくこの先端を固定して装着するものと考えられる。全長5.7cm、推定幅3.4cmを測る。

95は検出時には完形かと見えたが、かなり傷んでおり輪金の大部分が土に換わっていた。径5mmの鉄棒を曲げて造られた大形の銃具で全長8.5cm前後である。基部近くに屈曲をもち、上方にひろがっている。基部には装着のための鉄板の断片が付着している。94も同様のものの基部である。鞍の輪金の可能性もある。

縁金具ほか（96～101）（第33図）

96～100は幅1.2～1.8cmの薄い鉄板を鉄釘で打ち付けたものである。長さは97が3.6cm、98は4.1cm、96は一端が欠損している。また、96・98は板状であるが97は両側を内側に折り曲げて

ある。98では釘は頭部しか遺存していないが96では長さ4.6cm以上、97で推定3.7cmと長い。また、97では直角方向から打ち込まれた釘の先端が銹着している。これらの使用部位は不明であるが、かなりの厚さをもつ板材に打ち込まれているようで、壺鑑の縁金具の可能性が考えられる。96・98は出土位置からもその可能性が強いが、97は羨道奥側の須恵器甕64の下からの出土であり、別の器種に付く可能性もある。

99は奥壁の前側から出土した小破片で、先端は3方に分かれて花弁状になると思われ、中央には鉢が打たれている。出土位置から馬具の金具の一部と思われる。

100は鉄板に鉢を打った破片である。101は径8.5mmの管状の破片で外面には木質が残っている。

(4) その他の鉄器（第33図）

刃部先端を欠損しているが102は鉗と思われ、残存全長10.1cmを測る。玄室奥の須恵器集積部からの出土である。柄の断面は厚さ5mmの長方形で、下面の一部には木質が遺存している。

103は鉄釘であるが、鉄釘の出土はこの1点のみである。残存長さ5.3cm、幅1.05cmを測り、頭部はやや丸くつぶれている。木棺に使用されていた可能性もあるが、1点のみであることを重視すれば木棺以外のものに使用されていた可能性も考えられる。

(5) 須恵器・土師器（第34～40図、図版17～26）

杯（1～14）（第34図、図版17・18）

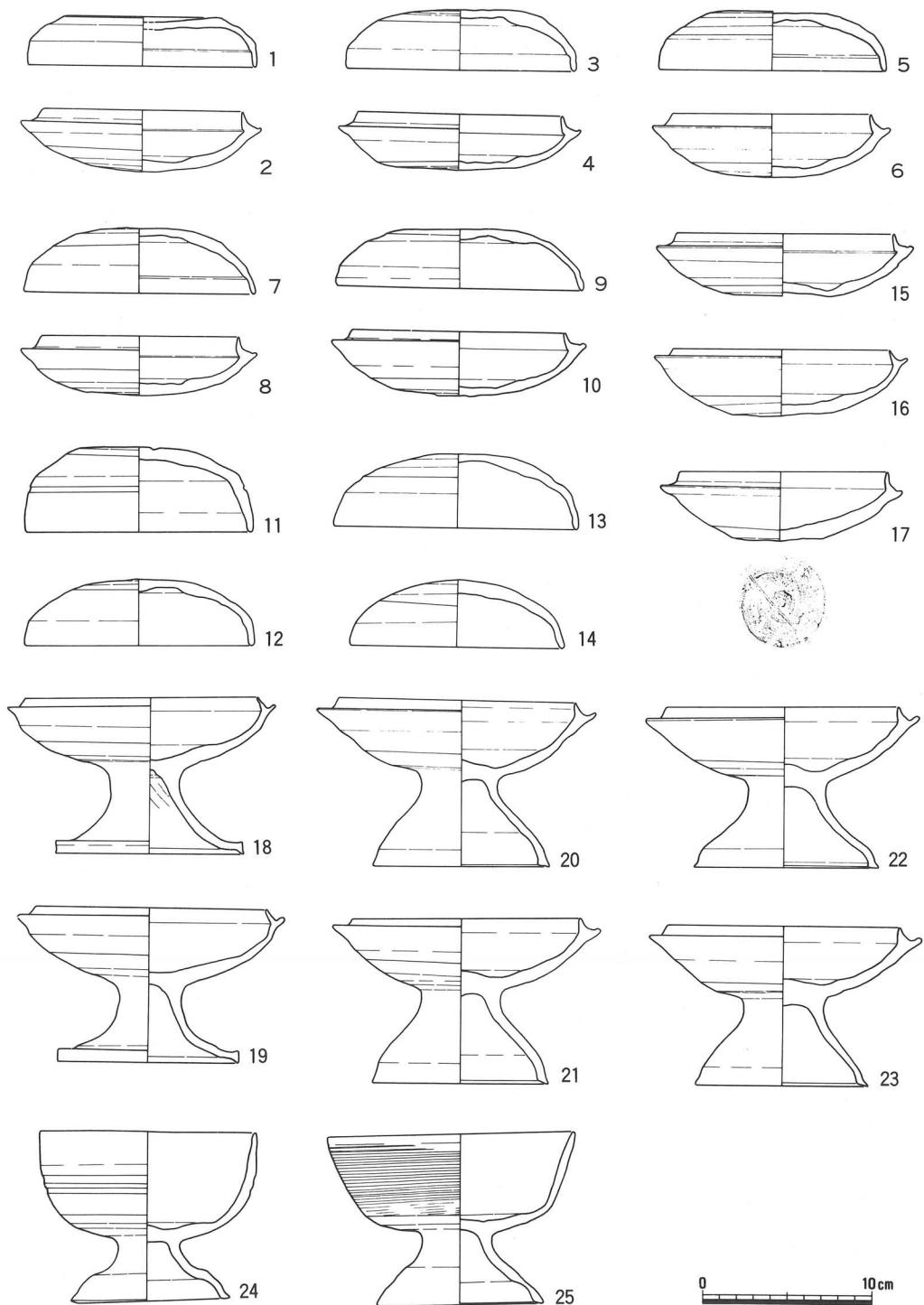
杯蓋9点、杯身8点が出土した。このうち1・2、3・4、5・6の6点は焼成や色調からみてセットになると判断できる。また、9・10は色調等からは確定できないが、口径が合い、ともに外面に赤色顔料（ベンガラ）が付着していることからセットとして使用された可能性が考えられる。7・8は口径からセットになる可能性が考えられるものである。

杯蓋は形態や調整から以下の5群に区分できる。

a（1・3・5・7）：口径13.2～13.4cm、器高3.5cm前後と偏平で、体部下半に稜をもち、そこから下方は垂直に近い角度で下がって口縁にいたる。口縁部内面は段差をもって薄くなる。天井部には器径の2/3～1/2の範囲にヘラケズリが施される。なお1・5・6・8では内面の一部に同心円当具圧痕が浅く認められる。

b（12・13）：形状はa類似するが、口縁部内面に段をもたず、全体に丸みをおびる。天井部には1/2ほどの範囲にヘラケズリが施されるが粗く、頂部ではヘラ切りの痕を十分に削り取っていない。13で口径14.4cm、高さ4.4cmを測る。

c（14）：口径12.7cm、器高4.0cmを測る。天井部は丸みをもち、ゆるやかに口縁端部に移行する。天井部には1/2の範囲にヘラケズリが施される。焼成が良くななく明黄褐色を呈し軟質である。天井部に17と同様の沈線1本のヘラ記号が施されている。



第34図 2号墳出土須恵器（1）

d (9) : 口径14.4cm、器高3.5cmを測る。天井部はヘラ切り未調整である。

e (11) : 口径13.2cm、器高5.0cmを測る。肩部に沈線が施され、一見、古い様相をとどめるかのようにも見えるが、天井部はヘラ切り未調整である。

杯身も以下の4群に分類できる。

a (2・4・6・8) : 口径11.6~12.0cm、器高3.3~3.7cmを測り、全体に偏平である。受け部は肥厚して面をもち、そこから立ち上がり部が斜めにのびている。底部は2/3~1/2の範囲にヘラケズリが施される。

b (16) : 口径12.8cm、器高4.0cmを測り、器形はやや丸みをもつ。受け部は肥厚せず、また、立ち上がり部の内面も内側への肥厚は見られない。底部には2/3の範囲にヘラケズリが施される。

c (17) : 口径12.6cm、器高4.1cmを測る。立ち上がり部の形状はa類と同様である。ヘラケズリの範囲は狭く、また、その部分にヘラ記号が認められる。

d (10, 15) : 10で口径12.5cm、器高3.8cmを測る。器形や口縁の形状はa類とほとんど差はないが、底部の調整がヘラ切りののち縁辺へのヘラケズリとなる点が異なっている。

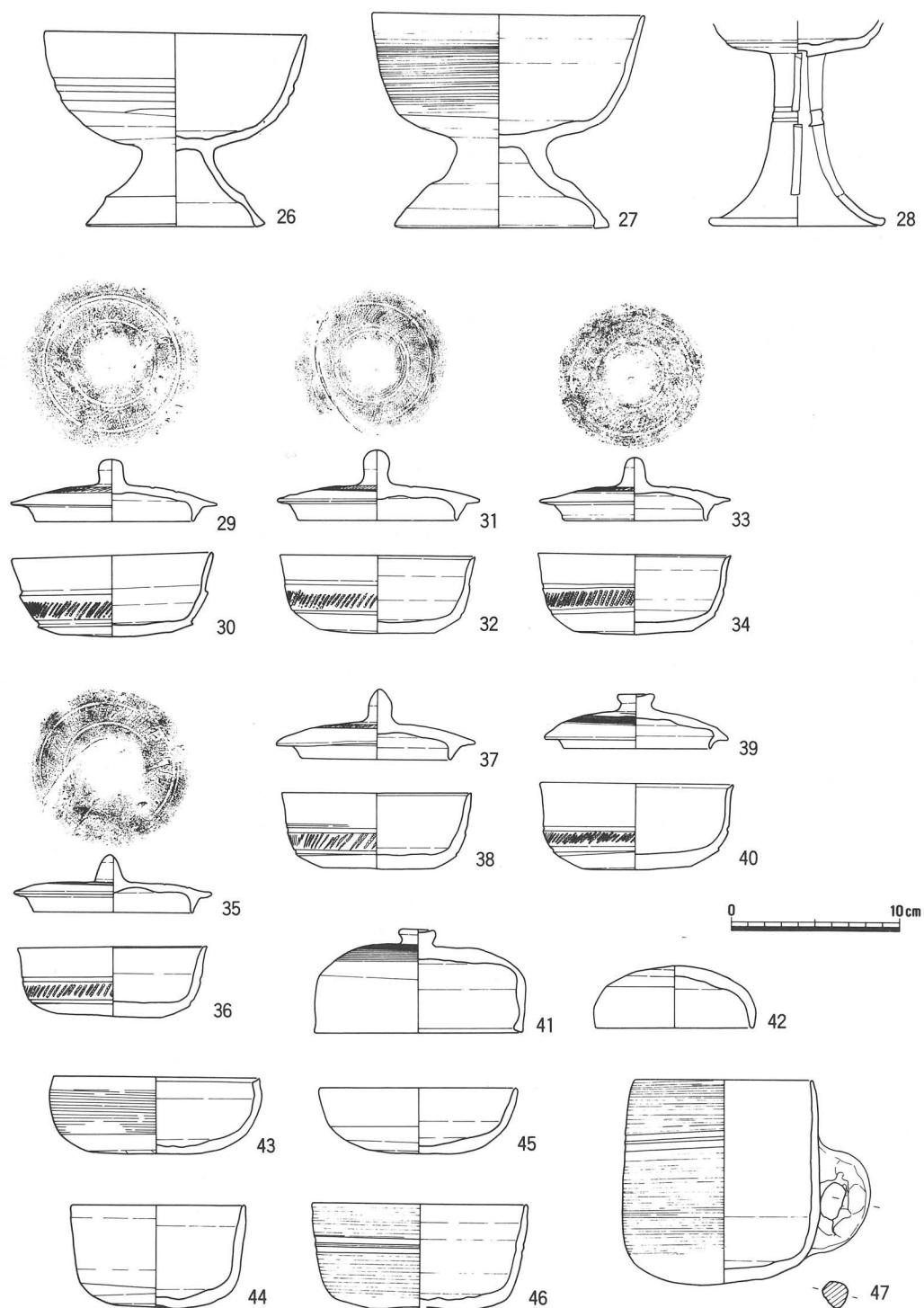
ヘラケズリの省略という点からみればa類が古くd類が最も新しいことになるが、口径や受け部の形状にほとんど差はない。口径の縮小という点でc類が最も新しいものとみられるが、なおヘラケズリが施されている。c類以外はおおむねTK209型式におさまると考えられ、追葬期間はそれほど長くなかったものと思われる。

高杯 (18~28) (第34・35図、図版18~20)

13点出土しているが、そのうちの1点は小片で図示できなかった。62・63は大形の製品であるため後述する。それ以外の11点のうち6点が有蓋高杯であるが、セットになる蓋は出土しなかった。高杯18・19は外側にひらく短い脚をもつもので、両者は焼成、色調ともよく似ている。体部は丸みをもち、立ち上がり部が薄くなるなど、杯身16と同様の形状を示し色調も類似している。この形態の高杯については大谷晃二、伊藤聖浩両氏によって検討が加えられ、吉備北部を中心に分布することが指摘されているが¹⁵⁾、本例もそれに該当するものと言える。

一方、20~23は内湾してふんばる脚部をもつもので、口径13.4~13.9cm、器高9.4~10.9cm、いずれも明黄褐色を呈し焼成は不良・軟質である。全般に器壁が厚いが、特に立ち上がり部は基部が厚く、その断面は三角形に近い。この形態の高杯も吉備に点在的な分布をしており、津山市カキ谷B1号墳¹⁶⁾などから出土しているが、本墳の資料は脚が器高の半ば以上を占めており、他の資料にくらべて脚が長い点が特徴的である。

無蓋高杯は5点出土しているが、そのうちの24~27は深い杯部と中ほどに弱い稜のある短い脚部をもつもので、脚付椀としたほうがよいかもしれない。2形態のものが大小2個あり、丸



第35図 2号墳出土須恵器（2）

みをもつ杯部に2本の凹線を施す24・26と、杯部の底面が広く外面にカキメを施す25・27がある。このうち25は壺48の蓋になった状態で出土した。28は長脚の高杯で羨道入り口部分から出土した。二段の透かしを二方に配しており、脚端は丸くおさめている。この破片の近くからは図示できなかった別個体小片が出土しており、また、後述の67もほとんど転磨を受けていないことから本墳に伴う可能性が考えられ、少なくとも3個体の長脚の無蓋高杯があったとみられる。

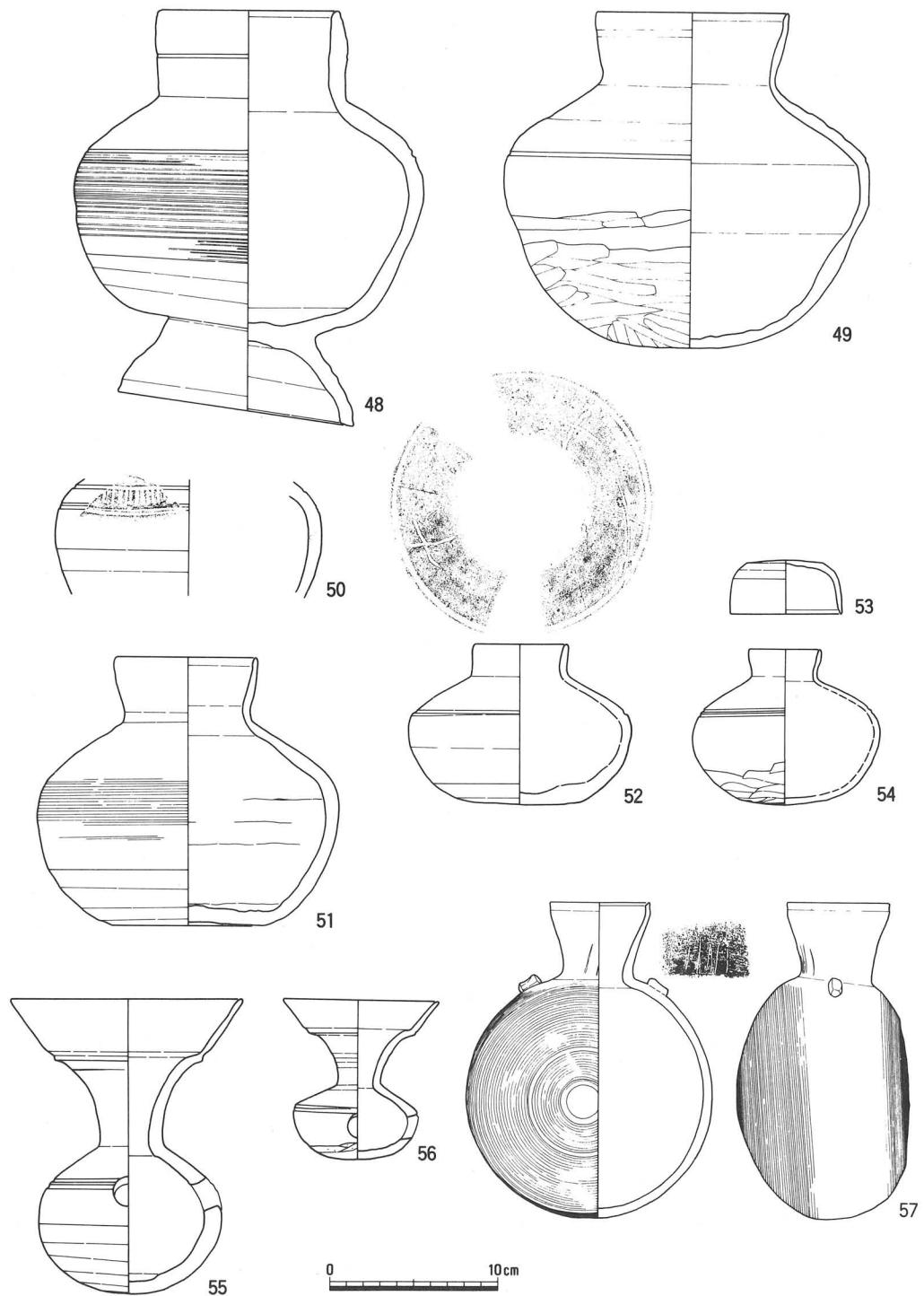
椀・蓋（29～47）（第35図、図版18～21）

有蓋椀は5組出土した。このうち39は40とは大きさが合わないが、落とし蓋とすれば40の口径に収まることや焼成・色調が似ることなどから、壺の蓋を椀蓋に転用したものと考えた。他は端部の融着や自然釉の状況などから焼成時からセットになっていたと判断できる。いずれも焼成は良好で自然釉が濃くかかっている。39以外の蓋は高さ3.4～4.2cm、下端の径8.5～9.4cmを測り、体部は円盤状である。上面には2本の圈線をめぐらせてその間に板状工具による列点文を施している。なお、31・35および39では焼成時に上面に別個体、おそらく同型の椀身が置かれていた痕跡が残っており、蓋と身を別に置いて焼成された個体もあったことを示している。内面の返りは断面が三角形に近く、内側がやや内湾するものが多い。つまみは29・31・33では丸みをもって上方にのびており、35・37は丸みをもった三角錐状になっている。一方、39は下端径8.7cm、高さ3.3cmと小さく体部は丸みをもつ。つまみは低く上面がくぼんでおり、返りはゆるやかな外反を示している。

椀30～40は口径11.2～11.7cm、高さ4.2～5.2cmを測り、一見、無蓋高杯の杯部を思わせるものである。30は外面に二段の稜をつくり出すが、32～40では2本の沈線をめぐらせており、その間に板状工具による列点文を施している。いずれの個体も底面には同心円状にヘラケズリが施されており、他のヘラケズリとは異なっている。34では外面の一部に赤色顔料の付着が認められる。

これら以外に蓋および椀として41～46がある。蓋41は径12.2cm、器高6.1cmを測る大形のものであるが、対になるべき器種は認められなかった。39と同様のつまみをもち、上面にカキメを施す点も共通する。42は口径9.2cmの小形の器種で蓋あるいは椀になるものである。椀43の底部は回転ヘラケズリのうち手持ちケズリが施されている。45は杯蓋に含まれるとも思われるが、器壁のバランスが椀に似るためここでは椀に含めた。口径11.6cm、器高3.9cmを測り、底部にはヘラケズリが施される。44の底部調整はヘラケズリ、46ではヘラ切りである。44は色調が杯a類に類似しており、46は高杯25・27に似ている。

把手付き椀47は口径10.5cm、器高12.6cmの深い椀形の器形に把手を付けたものでショッキ形を呈する。外面にはカキメが施され、やや上方の部分には2本の凹線が施されている。底部の



第36図 2号墳出土須恵器〈3〉

調整はナデである。

壺（48～54）（第36図、図版22）

壺は大小あわせて6個体が出土している。48は脚付きの直口壺で、全体に器壁が厚い。自然釉が顕著にかかり、胴部下端はかなりゆがみを生じている。胴部外面にはカキメを施し、頸部と肩部に沈線を施す。49は玄門付近に破片となって散在していたものである。胴部下半には手持ちヘラケズリが施されている。50は羨道入り口部分から出土した壺の破片で、肩部には2本の沈線を施し、その間に板状工具による列点文を配している。51は羨道奥側に甕64とともに置かれていたもので、底部は平たい。置かれた状態で出土したが底部のみが破片となって体部の横から出土しており、底部穿孔がなされて底部が大きく割り取られたものと思われる。52・54は小形の直口壺である。52では肩部に沈線を施しその上方に×形のヘラ記号3個を描いている。53・54はセットになるとみられるもので、54の底部調整は手持ちヘラケズリである。

甕・提瓶（55～60）（第36・37図、図版23・24）

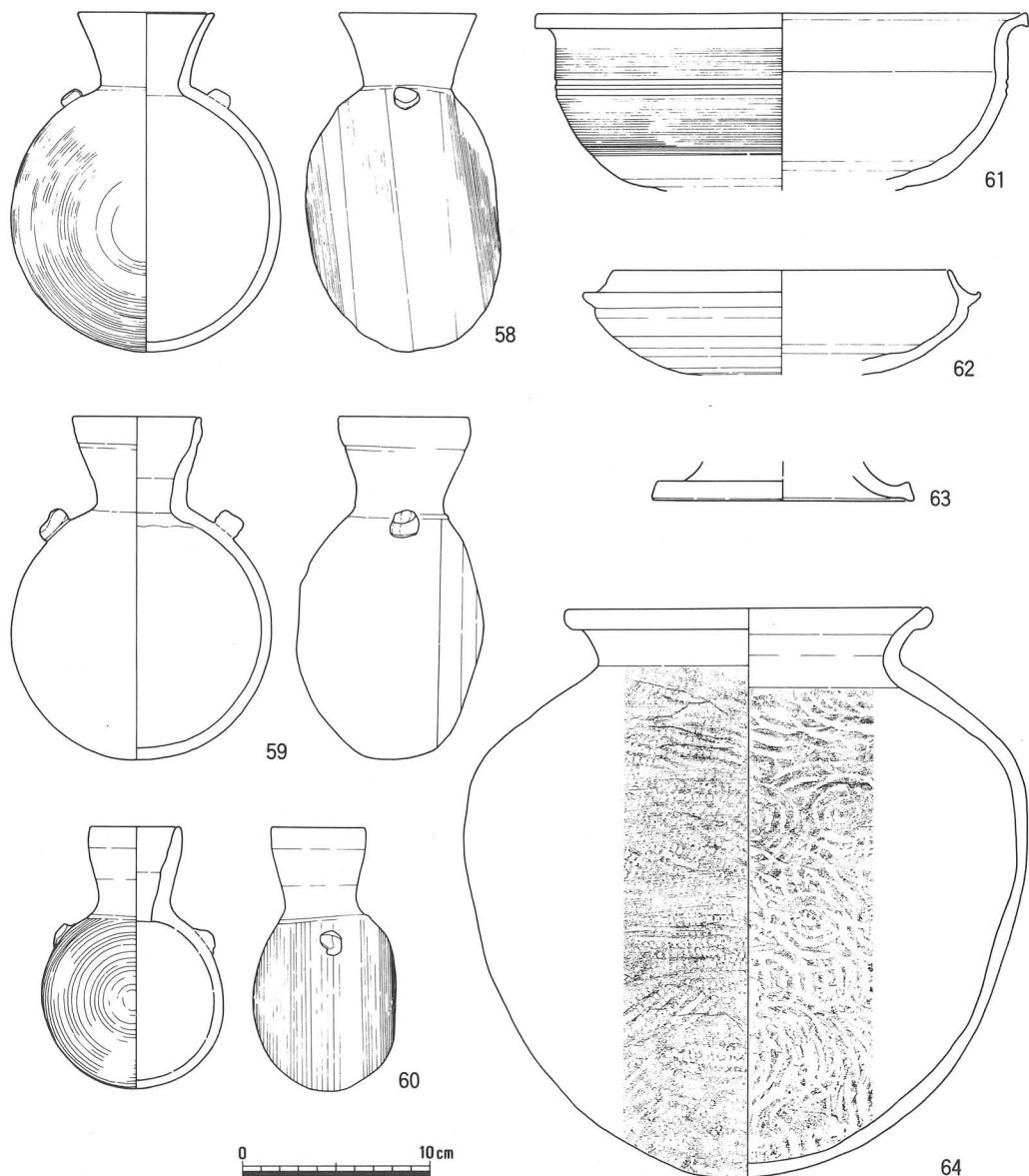
甕は2点出土しており、55の器高は17.5cm、56では9.4cmを測る。55は球形に近い体部をもち、肩部に2本の沈線を施す。焼成は良くなく灰白色でやや軟質である。また、56はやや偏平な体部をもち、底部調整は手持ちケズリである。頸部には浅い凹線2本を配している。

提瓶は4点出土している。器高は57が18.7cm、58が18.0cm、59が18.2cm、60が14cmで、いずれも肩部の把手は小粘土塊の貼り付けによって形成されている。57は胴部にカキメを施すもので、口縁部は直線的に開いて端部近くでやや内湾し、端部は狭い平坦面をもつ。頸部には沈線7本が刻まれている。58は口縁部が外反ぎみに開いており、端部は水平な面をなす。胴部の調整はおなじくカキメである。59は胴部の片面の調整がヘラケズリで他の部分はナデである。口縁部はやや内傾しており端部は丸くおさめる。60は小形の製品で、胴部の調整は粗いカキメである。

器台・甕ほか（61～65）（第37・38図、図版24～26）

61～62は羨道入り口から閉塞施設付近にかけて出土したものである。61は器台の鉢部で、閉塞施設内側から出土した。口径25.9cmを測り、鉢部は深く、外反する端部は短い。外面にはカキメを施し、2本の沈線を配している。62は杯身のような形状をもつが口径17.8cmと大形である。底部外面の調整はヘラケズリで、下端に脚接合部の一部がわずかに認められる。63は脚の破片であるが器壁がかなり厚く大形の器種とみられ、62と同様な杯部をもつ可能性も考えられる。焼成は不良で赤褐色を呈する。

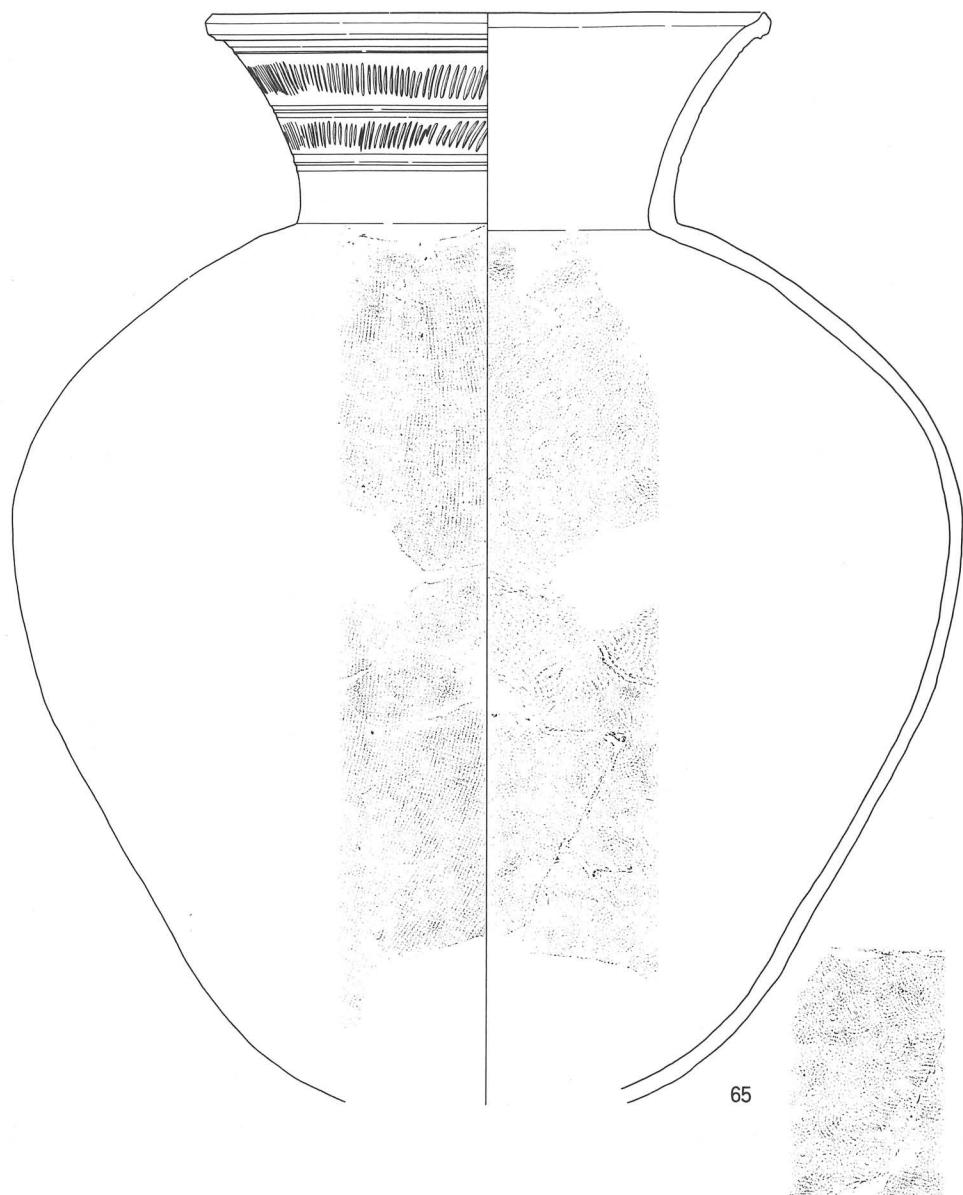
64は直口壺51とともに羨道奥側に置かれていた甕で、口径19.1cm、器高30.3cmを測る。ほぼ完形で斜めに置かれていたが、胴下半の一部が大きく欠損しており、破片は玄室内から出土した。51とともに底部穿孔を行ったのち、玄室の前方に置かれたものと考えられる。



第37図 2号墳出土須恵器（4）

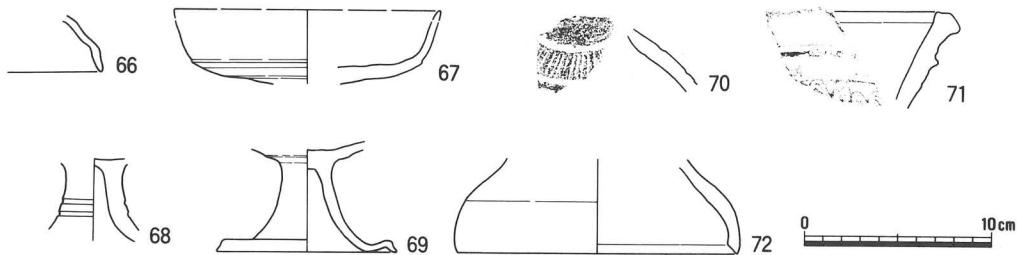
なお、64よりもやや奥側の杯5、42付近からは須恵器甕破片が出土し、それは羨道入り口付近出土の破片と接合した。口縁部が出土しておらず図示できなかったが64よりもやや大きな甕になると思われる。

65は墳丘南西裾が3号墳に近接して浅い溝状になる部分に破片がまとまって堆積していたものである。破片は長さ20~10cm程度のものが多いが、数cmの大きさで薄く剝離した破片も認め



第38図 2号墳出土須恵器〈5〉

られる。墳丘上に置いてあったものが崩壊したのか人為的に割られたのか判断しがたいが、極端に小さい破片がみられることから、後者の可能性が強いと思われる。なお、1点のみこの個体の破片が閉塞部堆積層11層から出土しており、西裾に堆積する以前は破片が南側へも落下しうる位置にあったことを示すものであるかもしれません。



第39図 2号墳堆積土出土須恵器

い。

口径43.6cm、最大径75.0cmを測り、器高は90cm弱とみられる。口縁部は大きく外反し外面は沈線で2段に区画してヘラ描き列点文を施している。胴部はタタキ成形であるが、底部近くでは内外面ともタタキのちカキメが施されている。また、内面の同心円当具は肩部付近においてのみ圈線が広い別のものが使用されている。

個体の全破片が出土したわけではないため確実ではないが、底部の破片が認められず欠損部が径28cmの円形を描いていることから、底部穿孔がなされたと推定される。

また、この個体以外に前庭部から大甕の破片が出土しており、ある程度接合できたが口縁部がないため図示していない。器壁の厚さから65と同様の大きさと推定され、大甕は少なくとも2個体あったとみられる。

周辺出土の須恵器（66～72）（第39図）

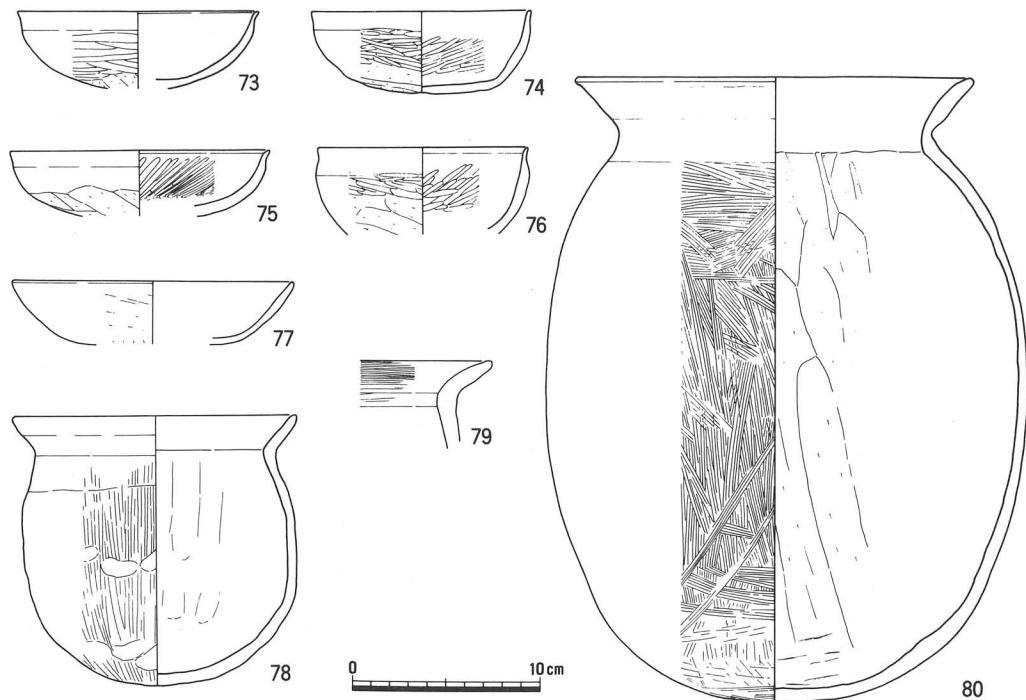
66～72は2号墳の周辺、おもに墳丘東側の堆積土中から古代・中世の遺物とともに出土したもので、3号墳および調査区外から流入した遺物を含むと考えられる。これら以外に須恵器甕、壺の胴部破片がかなりあるが、古墳時代のものか古代のものか判断できないため図示していない。

66は杯蓋の破片、67は高杯の破片で胎土・色調は28に類似する。68・69は短脚の高杯の破片で白灰色を呈する。70は肩部に沈線を施し、その間に列点文を施した壺の破片、72は壺につく脚の破片と思われる。71は甕の口縁部で櫛描きの太い波状文が施されている。これらのうち67・70・72は2号墳に伴うとみても問題ないように思われる。また、66・68・69はTK217型式に位置付けられるが、3号墳の追葬遺物等であるのか別の遺構からの遺物であるか判断しかねる。

土師器椀・甕（73～80）（第40図、図版24・25）

土師器は8点が出土した。椀が5点、甕が3点である。

椀のうち73・74・76は玄室から、75が羨道前半から閉塞施設にかけて、77が羨道からの出土



第40図 2号墳出土土師器

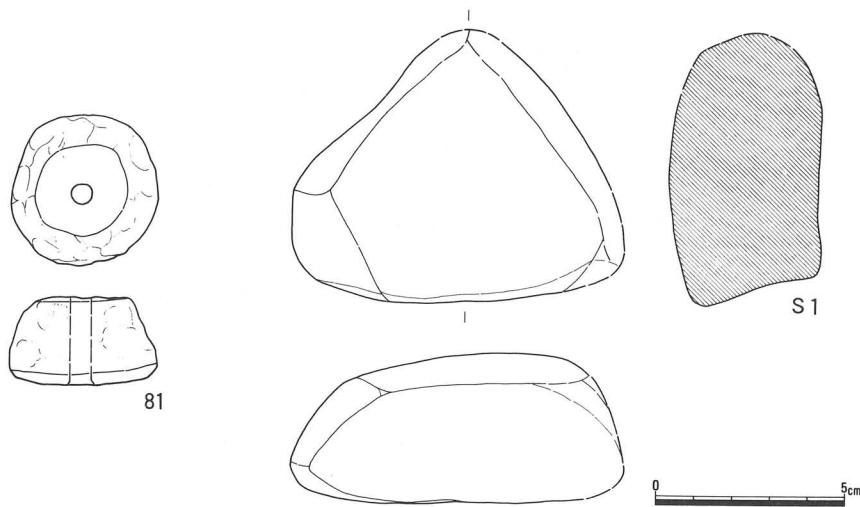
である。73～76は口径11.2～12.8cmで端部はわずかに外反する。ヘラケズリによって外面が整えられたのち、体部中ほどを中心にヘラミガキが施されるが、底部はヘラケズリが残っている。内面調整は斜めのヘラミガキで、75では長く施されている。77は口径が14.8cmとやや大きい。器表の剥落が著しく、外面にわずかにヘラケズリを認めることができる。

甕79は墳丘南西裾に形成された須恵器甕65の破片の堆積の間から出土したもので、接合できなかつたが胴部破片も出土している。78は玄室前半で検出したもので、付近の遺物よりも若干高い位置から出土した。口径15.1cm、器高14.4cmを測る。80は玄室東隅に伏せて置かれていたもので、亀裂が生じていたが完形である。口径27.5cm、器高33.2cmを測り、外面はハケ、内面調整はタテのヘラケズリである。

(6) 土製品・石製品（第41図、図版26）

81は2号墳排土から出土した土製紡錘車で径3.9cm、高さ2.3cmを測り、中央に径5.5mmの孔が設けられている。成形、調整は簡略で斜面部には指頭圧痕が見られる。器形の特徴からこの時期の滑石製紡錘車を模したものと思われる。

S1は玄室奥側から出土した軽石製品で長さ8.8cm、厚さ4.0cmを測り黄褐色を呈する。検出時に破損したため正確な重量は不明であるが55g前後になるようである。表面全体を加工して



第41図 2号墳出土土製品・石製品

三角形に成形している。発泡痕が顯著な軽石であるため水には浮かず、網の浮き等ではない。用途は不明であるが馬具の破片がまとまっている部分からの出土であり、馬具の一部に用いられたものであるかもしれない。軽石はこの地域からは産出しない石材であり、鳥取県の大山あるいは九州からもたらされたものと思われる。

(7) 鉄滓（図版26）

鉄滓・炉壁は玄室内および墳丘西裾から出土した。玄室内から出土したものは3点で、1点が床面、他は水洗によって検出した。総重量は24.1gである。いずれも長さ3cm前後の小片で、特別な取り扱いがなされた状況は認められなかった。

墳丘西裾から出土したものは約97点で5.7kg、コンテナ約1/3の量であり、図版26に示したものはその一部である。形状等から製鍊滓と推定される。流出滓が主体をなすが、鉄を斑状に含むものも認められた。長さ4cm、50g前後のものが多いが、最も大きいものは長さ10cm、586gを測る。また、鉄滓に混じってフイゴの羽口片6点が出土した。いずれも5cm前後の小破片のため図化できなかったが、内径3cm、外径7cm程度の大きさとみられ、先端は溶融している。胎土中にはワラと思われる圧痕が顯著に見られ、糞痕の可能性があるものも認められた¹⁷⁾。羽口が鉄滓・炉壁とともに出土した例としては久米町稼山4号墳¹⁸⁾、奈良県石峯2号墳¹⁹⁾、福岡県金武古墳群吉武L6号墳²⁰⁾などが知られており、それらに共伴する鉄滓は鍛冶滓である。また、この時期の製鉄遺跡においても羽口の出土は報じられていない。したがって本墳の例では製鍊滓以外に少量の鍛冶滓が含まれており、それに羽口が伴う可能性が考えられるが、確実にそれとみられる鉄滓がないことから羽口を使用する製鍊炉がこの地域に所在する可

表1 2号墳出土土器観測表

須恵器

番号	器種	口径	器高	調整・備考	焼成	色調
1	杯蓋	13.2	2.9	天井部一へラケズリ。	良好	灰色
2	杯身	11.7	3.6	底部一へラケズリ。内面に当具圧痕。	良好	灰色
3	杯蓋	13.3	2.6	天井部一へラケズリ。	良好	青灰色
4	杯身	12.0	3.3	底部一へラケズリ。	良好	青灰色
5	杯蓋	13.3	2.5	天井部一へラケズリ。内面に当具圧痕。	良好	明青灰色
6	杯身	11.6	3.7	底部一へラケズリ。	良好	青灰色
7	杯蓋	13.4	3.8	天井部一へラケズリ。	良好	灰色
8	杯身	11.6	3.5	底部一へラケズリ。内面に当具圧痕。	良好	青灰色
9	杯蓋	14.3	3.5	天井部一へラ切りの後ナデ。	良	灰白色
10	杯身	12.5	3.8	内面に赤色顔料付着。底部はへラ切りの後、側縁にへラケズリ。	良好	灰白色
11	杯蓋	13.2	5.0	天井部一へラ切りの後ナデ。	良好	青灰色
12	杯蓋	13.2	4.0	天井部一へラケズリ。	良好	灰白色
13	杯蓋	14.2	4.4	天井部一へラケズリ。	不良	灰白色
14	杯蓋	12.7	4.0	天井部一へラケズリ。	不良	淡灰色
15	杯身	12.7	3.7	底部一へラ切りの後部分的にへラケズリ。	良好	灰白色
16	杯身	12.8	4.0	底部一へラケズリ。	良好	灰色
17	杯身	12.6	4.1	底部一へラケズリ。へラ記号がある。	良好	明灰色
18	高杯	13.6	10.9	杯部外下半一へラケズリ。	良好	灰白色
19	高杯	13.9	9.9	杯部外底面はへラケズリと思われる。	不良	淡褐灰色
20	高杯	13.6	10.9	杯部外底面一へラケズリ。	不良	淡褐灰色
21	高杯	13.5	9.1	内面に赤色顔料付着。杯部外下半一へラケズリ。	良好	灰白色
22	高杯	13.4	10.3	器表が荒れ、調整がわかりにくい。	不良	灰黄色
23	高杯	13.7	9.4	器表が荒れ、調整がわかりにくい。	不良	淡褐灰色
24	高杯	12.7	9.2	脚部内面に窓壁小片が付着。杯外底面一へラケズリ。	良好	灰色
25	高杯	14.4	10.3	杯部外面一カキメ、底部一へラケズリ。	良好	明青灰色
26	高杯	15.4	12.5	杯部下半一へラケズリ。	良好	灰色
27	高杯	15.9	12.8	杯部外面一カキメ、底部一へラケズリ。		暗灰色
28	高杯		12.1	透かし孔は2方、杯部下半一へラケズリ。	良好	暗灰色
29	蓋	9.4	3.7	2本の囲線をめぐらせ、その間に列点文を施す。	良好	灰色
30	椀	11.7	5.0	板状工具による列点文。底面一へラケズリ。	良好	灰色
31	蓋	9.2	4.2	2本の囲線をめぐらせ、その間に列点文を施す。	良好	灰色
32	椀	11.4	4.6	板状工具による列点文。底面一へラケズリ。	良好	灰色
33	蓋	8.5	3.8	上面に囲線2本をめぐらせ列点文を施すが、自然釉のため不明瞭。	良好	明灰色
34	椀	11.4	4.8	板状工具による列点文。底面一へラケズリ。	良好	灰白色
35	蓋	9.4	3.4	2本の囲線をめぐらせ、その間に列点文を施す。	良好	灰色
36	椀	11.1	4.2	板状工具による列点文。底面一へラケズリ。	良好	灰色
37	蓋	8.7	4.2	自然釉のため上面の調整は不明。	良好	青灰色
38	椀	11.2	4.6	板状工具による列点文。底面一へラケズリ。自然釉濃くかかる。	良好	灰色

第3章 川戸古墳群の調査

番号	器種	口径	器高	調整備考	焼成	色調
39	蓋	8.7	3.3	上面にカキメ。	良好	灰色
40	椀	11.4	5.2	板状工具による列点文。底面一へラケズリ。	良好	灰色
41	蓋	12.2	6.1	上面にカキメ。	良好	灰色
42	蓋	9.4	3.7	天井部一へラケズリ。	良好	灰色
43	椀	12.1	4.6	外面にカキメ。底部一回転へラケズリの後、手持ちケズリ。	良好	灰色
44	椀	10.0	6.1	ややゆがみが生じている。底面一へラ切り。	良好	灰色
45	椀	11.6	3.9	天底部一へラケズリ。	良好	灰色
46	椀	12.6	6.4	外面一カキメ。底部一へラ切り。	良好	灰色
47	把手付き椀	10.5	12.6	外面にカキメ。底面一ナデ。	良好	明灰色
48	脚付き短頸壺	10.7	24.5	胴部一カキメ、下半一へラケズリ。自然釉が顯著。	良好	灰色
49	直口壺	11.4	19.8	胴部外面一粗い手持ちケズリ。内底一ナデ。	やや軟質	灰白色
50	壺			肩部に列点文。		
51	短頸壺	8.2	15.9	胴部外面一粗い手持ちケズリ。内底一ナデ。底部穿孔。	良好	灰色
52	短頸壺	5.4	9.5	肩部にへラ記号。底部一へラケズリ。	良好	赤灰色
53	蓋	6.6	3.2	上面一へラケズリ。	良好	灰白色
54	短頸壺	4.2	9.3	底部一手持ちケズリ。肩部に自然釉。	良好	灰白色
55	はそう	13.6	17.5	胴部外面一へラケズリ。	軟質	灰白色
56	はそう	9.2	9.4	底部一へラケズリののちナデ。	良好	灰色
57	提瓶	5.9	18.7	外面一カキメ。頸部外面にへラ記号。	良好	灰色
58	提瓶	7.1	18.0	外面一カキメ。自然釉かかる。	良好	灰白色～灰色
59	提瓶	6.9	18.2	右側面一へラケズリ。自然釉がよくかかる。	良好	灰色
60	提瓶	4.6	14.0	外面一カキメ。自然釉薄くかかる。	良好	灰色
61	器台	25.9		外面下半一へラケズリ。内底一仕上げナデ。	良	灰褐色～橙色
62	大形高杯	17.8		外面下半一へラケズリ。内底一ロクロナデのち仕上げナデ。	良好	灰色
63	脚部	13.7			不良	橙色
64	壺	19.1	30.3	肩部にわずかにカキメが認められる。自然釉が厚くかかる。	良好	灰色
65	甕	43.8	88.0	へラ状工具による列点文を二段に施す。	良好	灰色～暗灰色

土師器

73	椀	12.8		外面一ケズリののちへラミガキ。	良好	赤褐色
74	椀	11.7	4.3	外面一ケズリののちへラミガキ。内面一へラミガキ。	良好	明黄赤褐色
75	椀	12.7		外面一ケズリののちへラミガキ、内面一放射状のへラミガキ。	良好	明黄赤褐色
76	椀	11.2		外面一ケズリののちへラミガキ、内面へラミガキ。	良好	赤褐色
77	椀	14.8		器表剥落、外面はへラケズリらしい。	良好	黄赤褐色
78	甕	15.1	14.4	外面一押圧のちタテハケ。内面一ナデ。	良好	灰赤褐色
79	甕			胴部外面一タテハケ、内面一ナデ。	良好	明赤褐色
80	甕	27.5	33.2	外面一ハケメ。内面一縦のへラケズリ。	良好	褐色

能性も考えられ、今後さらに検討する必要がある。

これ以外に鉄滓は石室掘り方検出中に1点、墳丘東裾の包含層中から1点出土したが、前者は墳丘が削平されているため本来その位置にあったものかどうか明確でない。これらも古墳に伴う鉄滓の可能性が強いと思われ、出土鉄滓の総重量は6.9kgとなる。

(8) 小結

2号墳出土の須恵器のうち約半数は玄室北西隅に集積されていた。これらはその位置からみて棺1～3に先だって取り片付けられたものと考えられる。杯はややばらつくものの、それ以外の器種は法量・形態がよくそろい、焼成・色調も器種ごとに共通することから、この一群の須恵器は大部分が初葬に副葬されたものと考えられる。

この須恵器集積に含まれる杯は、5類に分けたうちの蓋・身a、蓋b、身d類である。a類は個体数が最も多く蓋・身もそろっており、初葬に用いられたものとみてよいであろう。杯蓋の径13.3cm前後、身の口径11.6cm前後であり、稼山1式の新しい段階、TK209型式に併行すると思われる。また、b、d類も口径や立ち上がり部の形状に大きな差はなく、a類と同時あるいは続く時期の埋葬に伴うものと思われる。

c類は杯身、蓋ともに小形化しており他のものよりも後出的で、TK217型式に下がると思われる。

椀、壺、提瓶、甌等の器種は多くが玄室の前半から出土した。これらのうち、出土位置から追葬に伴う可能性が考えられるのは甌56、提瓶60、椀42、土師器甕78などである。甌56に類似した資料は北房町土井2号墳²¹⁾から、提瓶60のように体部が小さくなったものは津山市クズレ塚古墳²²⁾から出土しており、これらはTK217型式の古段階に位置付けられるようであるが、須恵器に平瓶が含まれていないことからみて、その時期の追葬は少数であったものと思われる。

また、袖部に置かれた甌55などは玄室奥側にない器種であり初葬に伴うものと思われる。

以上のように2号墳出土土器の大部分は初葬に伴うものと考えられる。また、馬具や武器類など須恵器・土師器以外の副葬品も棺3の設置以前に副葬された状況であり、これらも基本的に初葬に伴うものと考えられ、初葬とそれ以降の埋葬では副葬品に極端な差があったようである。

須恵器の型式からみて本墳の築造は西暦600年前後と推定され、追葬の期間は比較的短かく7世紀前半には終了したとみられる。

第4節 3号墳

(1) 位置と墳丘（第42図、図版8・9）

2号墳の西側に近接して所在する小規模な円墳で、両墳の墳端間の距離は2.5mを測る。

墳丘は水田の造成によって完全に削られており、盛土は全く遺存していない。墳丘径9.8mを測り、残存する高さは南東の周溝底から74cm、北西の墳端からは14cmを測る。

墳丘斜面には葺石がなされており、墳端付近には崩落した石材が幅2m前後の帶状に堆積していた。葺石は墳丘の東側から北中央までの範囲になされ、北西側には見られない。この部分は墳端が高くなっているため墳丘のほとんどが失われており、葺石も削平を受けたと考えることもできるが、崩落した石材は南東側に最も多く北にむかっては急速に量が減り、北西部では石材か転石か判断できない石材が少量あるだけであることからみて、葺石は南側を中心としたもので北西部には少量配される程度であったと思われる。また、遺存した葺石も南東側では石材が密に配され石垣状をなすが、北東側では斜面に石を据え置いたような配置となっている。

現位置を保つ葺石は2段程度で長さ40cm前後の角礫が使用されているが、南東側では崩落した石材の量が多く、少なくともさらに数段積まれていたと考えられる。葺石の下端は墳端線よりも25~8cm高い位置にあり、墳端が南に下降するのに対して葺石の下端はほぼ水平を保っている。主体部攪乱壙底の高さからみて、この高さで石室の入り口に接続すると思われる。

墳丘の南西側では墳端から40cm離れて幅1.5m、深さ17cmの土壙状のくぼみを検出した。調査区外にのびるため不明な部分が多いがここでは周溝と呼ぶ。須恵器2~5はこの部分から角礫とともに出土したが、底面よりも10cm高い位置に破片が集中した状態であった。本墳の他の部分、北側や東側は土層断面図にも示すように周溝はなく、ゆるやかに北に向かって上がっていている。

(2) 主体部(図版9)

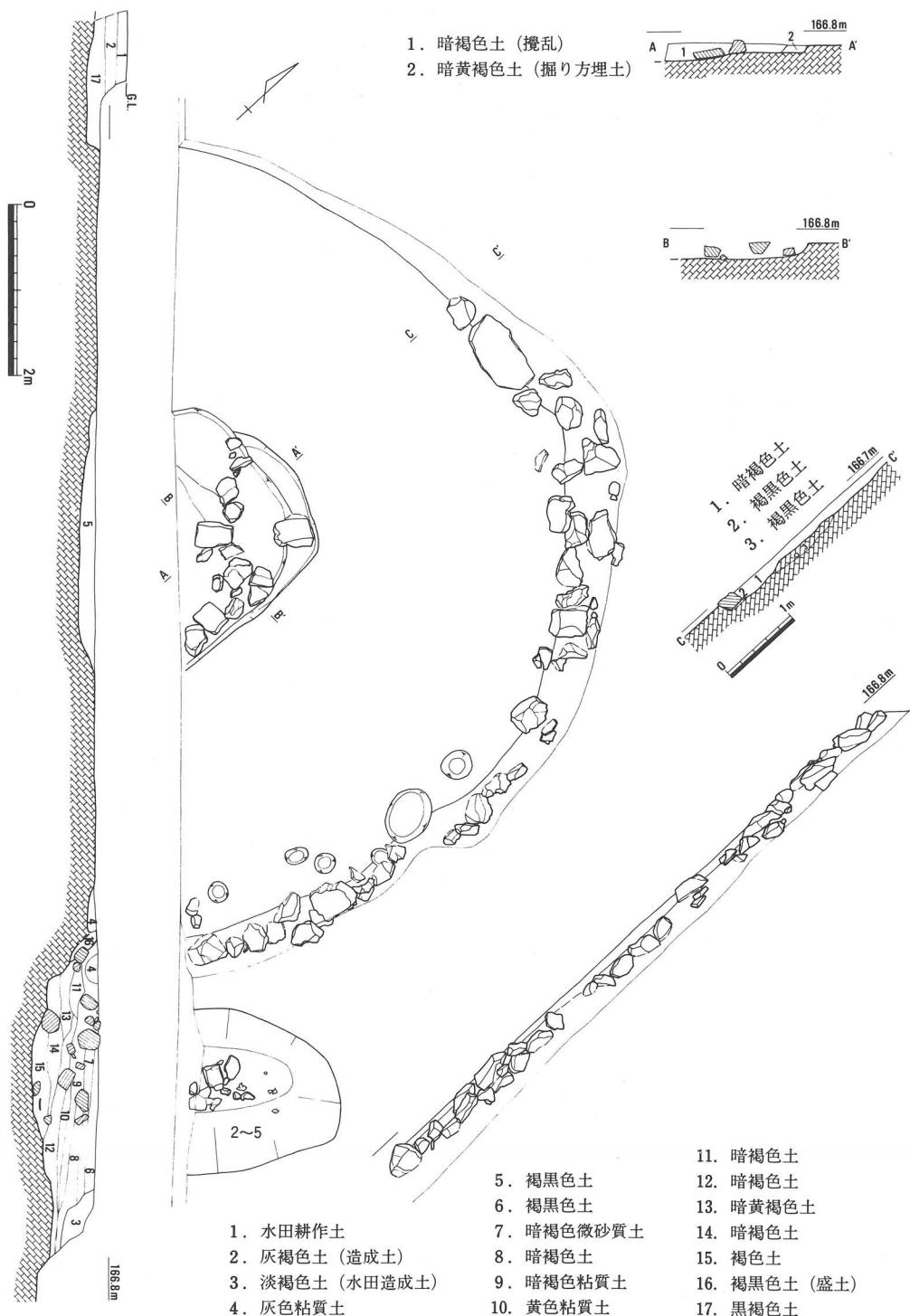
墳丘の中央部には石室の掘り方と見られる復元幅1.8mの掘り込みと、それを切る推定幅2.4mの攪乱壙が重複して認められたが、それらの深さも10~20cmにすぎず、ほぼすべての石材が抜かれ、動かされていた。攪乱壙に所在した石材の大きさは長さ30~40cm、厚さ15cm前後の大さであり、石室石材としては小さいほうである。なお、これらの石材のうち南端の2石は並んだ状態であり、現位置を保っている可能性がある。

こうした状況からこの部分に横穴式石室が構築されていたと考えられるが、その規模は掘り方の復元幅等からみて幅約1m、長さは5.5m前後ではなかったかと思われる。遺物は攪乱壙検出時に出土した須恵器杯蓋1のみである。

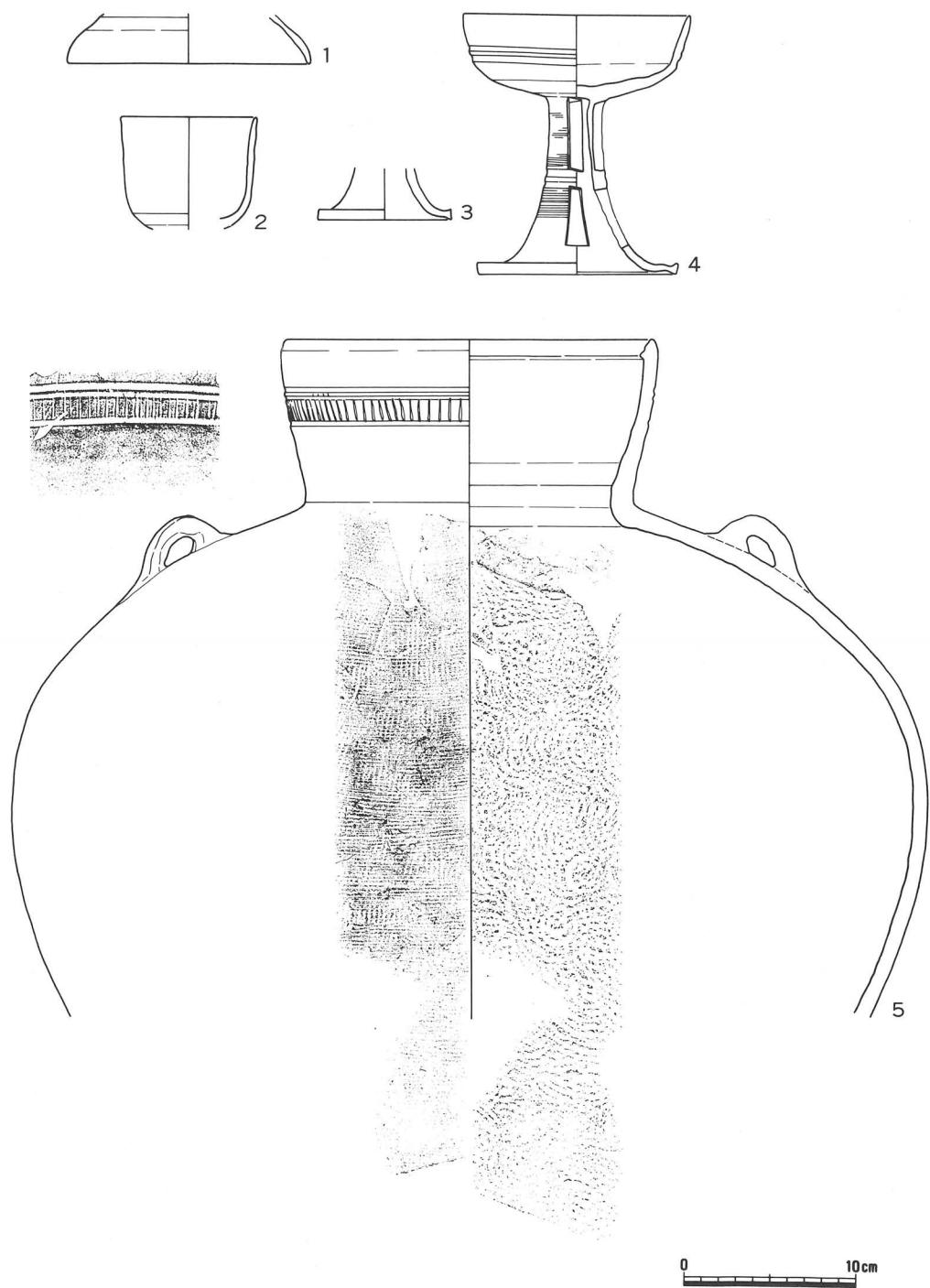
(3) 出土遺物(第43図、図版26)

3号墳に伴う遺物は須恵器5点で、そのうち杯蓋1は主体部内堆積土から、他は南側の周溝底からの出土である

1は復元径13.8cmの杯蓋で、口縁端から天井部にむかって斜めに立ち上がる。保存状態が良くないが破片上端にヘラケズリとみられる砂粒の動きが見られる。焼成は良くなく白色を呈す



第42図 3号墳墳丘・石室 (S=1/80)



第43図 3号墳出土遺物

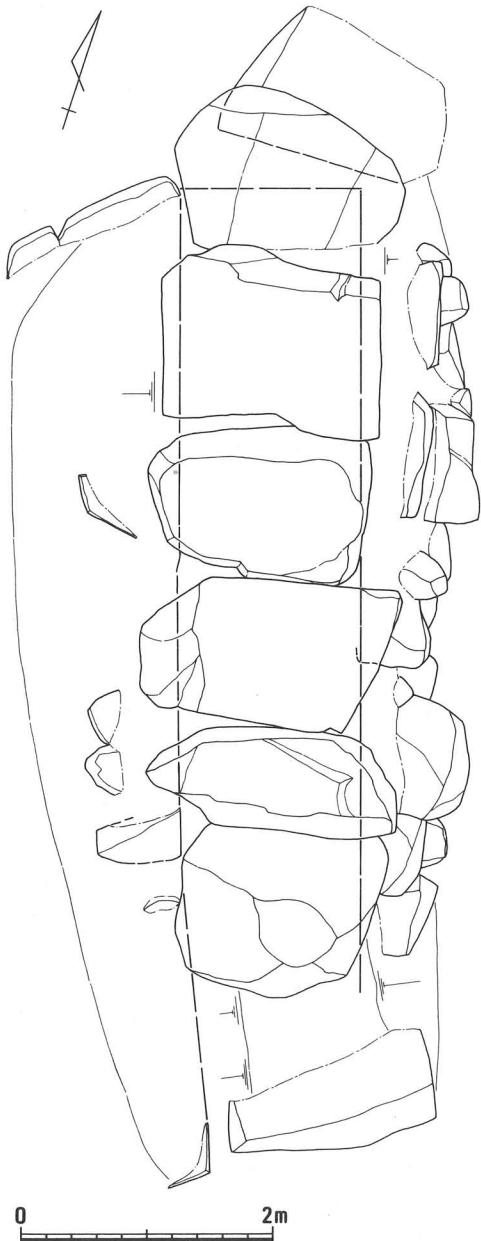
る。

2は口径7.8cmの椀で底部にはヘラケズリが施される。3は短脚の高杯の破片で、脚部径は7.7cm前後と推定される。4は口径13.1cm、器高15.1cmを測る長脚の高杯で、杯部には2状の沈線が施され、脚部には幅の広い二段の透かしが2方向に施されている。5は肩に耳をもつ大

形の壺で、口縁部は直立する。口径21.7cm、胴部径53.2cmを測る。頸部は沈線によって区画し、その間にヘラ状工具による列点を施している。なお、5の口縁部破片が1点ではあるが2号墳羨道埋土中から出土しており、2～5が2号墳からもたらされた可能性もあるが、位置関係からすればこの位置から転落した可能性が強く、2号墳の追葬期間中に3号墳も機能していたものと思われる。

高杯4は杯部の段が失われて丸みをもち、2本の沈線が施されており2号墳の高杯よりも後出すると思われる。

遺物の出土量が少ないため詳細な検討を行いがたいものの、これらはTK209型式からTK217形式に位置付けられ、3号墳は2号墳より後に築かれたと推定される。

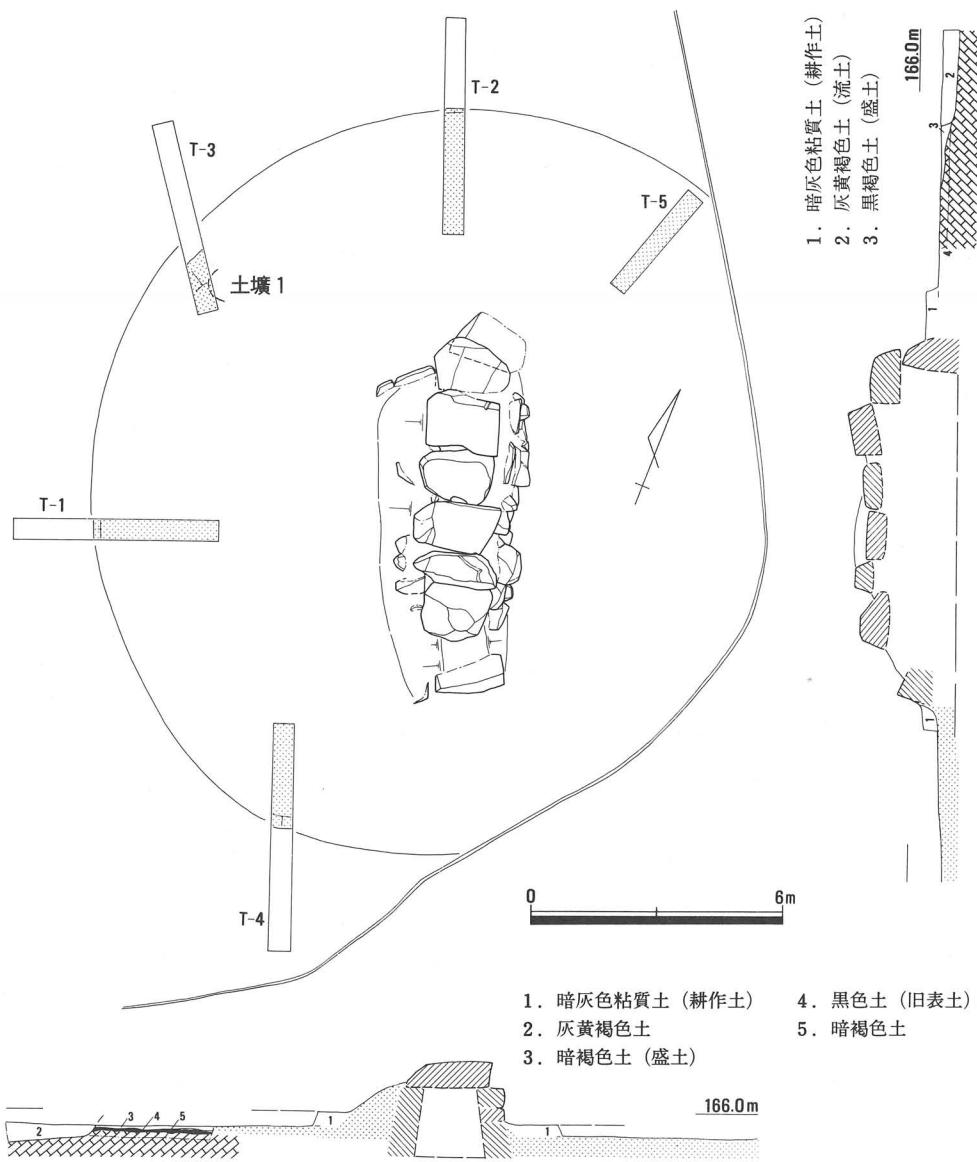


第44図 1号墳石室 (S=1/60)

第5節 1号墳

(1) 位置と墳丘 (第45・46図、図版10)

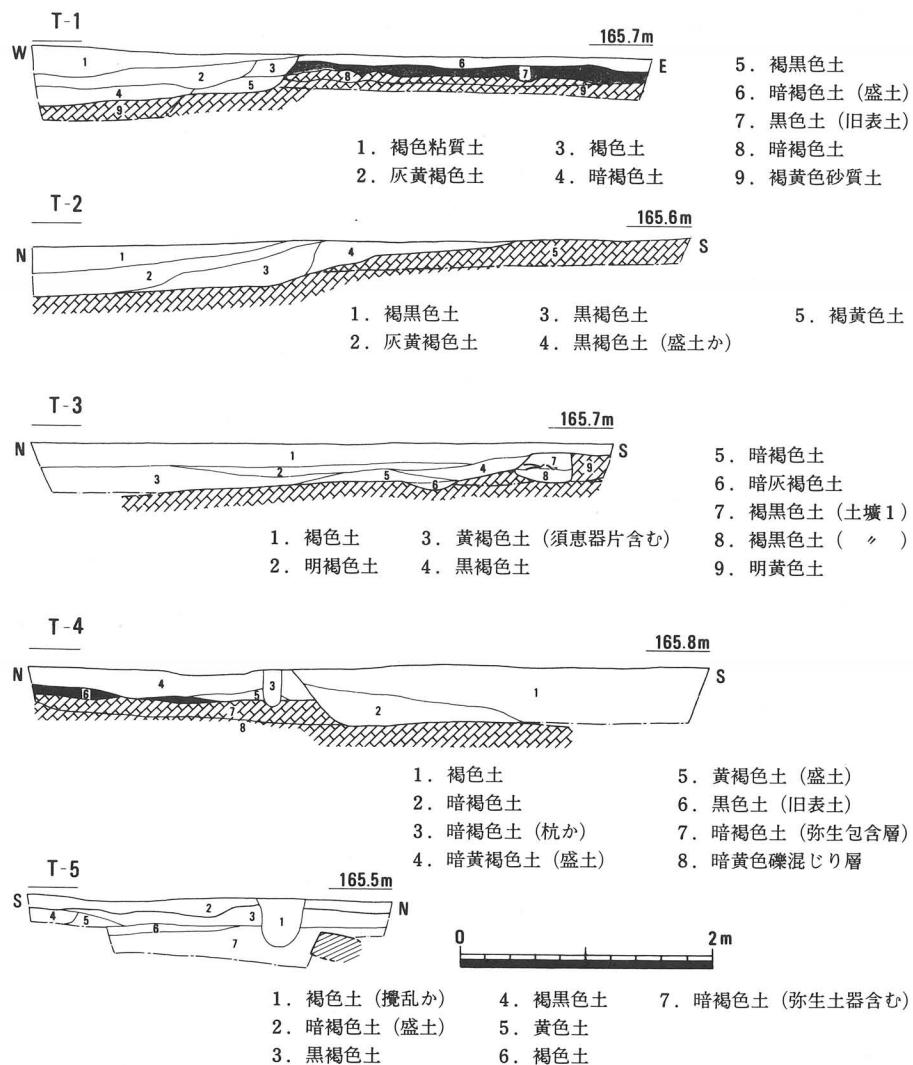
1号墳は2号墳の北東48mに所在しており墳丘下の旧表土の高さで1.1m低い位置にある。墳丘が削平され、石室の石組みのみが水田中に残された状態であり、水田の東側から南側にかけては水路、農道が設けられている。5本のトレンチを設定して墳形の確認を行ったが、石室内については、保存することで協議が整っており、さらに調査には石室の解体が必要となるとみられたことなどから調



第45図 1号墳墳丘 ($S=1/180$)

査を行っていない。

トレンチ調査の結果、本墳は径18mの円墳であることが判明した。盛土は部分的に10～20cm残っているのみで墳丘の残存高さは45～30cmにすぎないが、このことは墳丘の大部分が盛土によって形成されたことを示しており、この時期の古墳としては希な例と思われる。T-1の7層、T-4の6層、T-5の3層が旧表土で、T-2、3ではそれが見られないことから、北西から南東に向かって下降する舌状の小微高地の上に築かれていると推定される。また、い



第46図 1号墳トレンチ土層断面 (S=1/60)

これらのトレンチにおいても外側の地山が上がっておらず、2号墳、3号墳と同様に、後方に明確な周溝を配していないと判断される。

出土遺物については後述するがT-3の7、8層は古墳時代中期の土壌であり、T-5の4層も弥生ないし古墳時代の遺構の可能性がある。T-4の7層やT-5の7層は弥生時代中期から後期にかけての包含層であり、弥生時代中期以降の集落遺跡がこの付近まで広がることが判明した。

(2) 石室（第44図）

7枚の天井石が露出しており、最大のもので長さ1.7m、幅1.1m、厚さ60cmを測る。奥壁は

若干動かされて西側壁との間に隙間を生じている。内部には礫が投げ込まれているため規模は詳細に計測できなかったが、石室上端で幅1.45m、長さ7.8mを測り、壁の傾斜を考慮に入れれば幅は1.6m以上、長さも10m以上になると推定される。

(3) 出土遺物（第47図）

1は石室入り口付近の耕作土を除去した際に出土した須恵器甕の口縁部～頸部の破片で、焼成や色調から同一個体と思われる。頸部の上端で段をなし、口縁端は上方に立ち上がっている。口縁部および頸部は沈線で区画されており、カキメのうちにヘラ描きの列点文が3段配されるようである。2号墳大甕65の型式の甕の口縁端部を拡張し、文様帶としたものとみられる。類似した形態の資料が倉敷市大池上2号墳²³⁾などから出土しておりTK217型式に位置付けられよう。

他に別個体の須恵器甕胴部片を探集している。また、現存しないが、かつて石室奥側から鉄刀？が出土したと伝えられる。



第47図 1号墳出土遺物

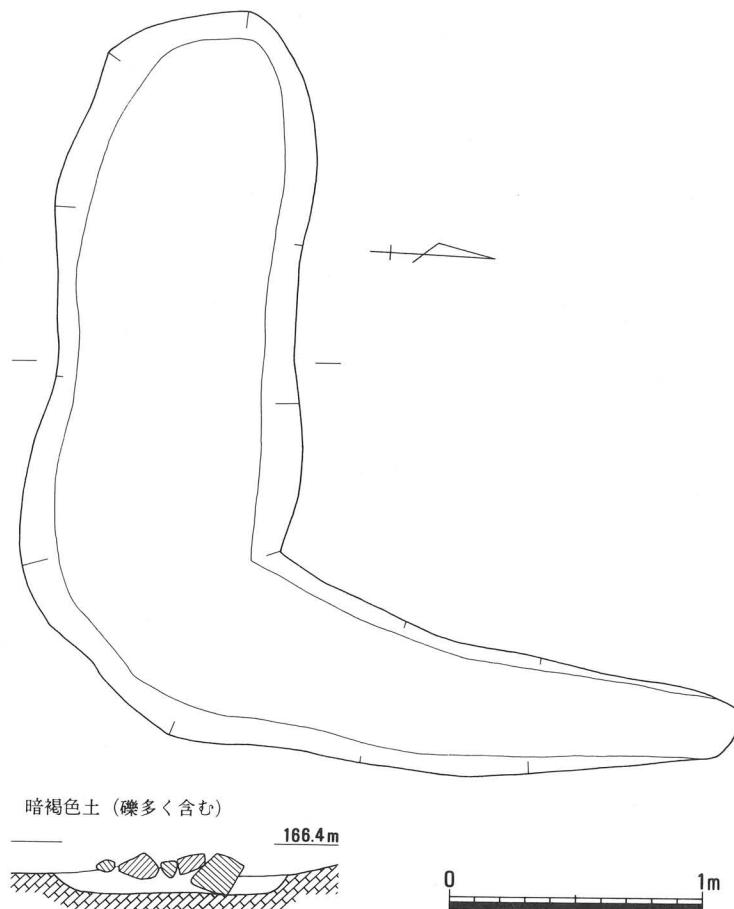
第6節 その他の遺構

溝1（第48図）

3号墳の墳丘北東側の地山面で検出した浅い溝で、延長5m、最大幅105cm、深さ8cmを測り、中央でほぼ直角に曲がっている。3号墳の葺石がやや崩れているため遺構の切り合いは明確でないが、埋土は礫を多く含む暗褐色土で、須恵器壺破片および甕65の小片を含んでいることから3号墳よりも後に掘削されたものと考えられる。ここでは古墳時代の遺構に含めたが、古代に下る可能性もあり、その性格も明確でない。

註

- 1) 山磨康平ほか『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』勝央町教育委員会 1976年
- 2) 山磨康平ほか「琴海1号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』36 岡山県教育委員会 1980年



第48図 溝1 (S=1/30)

- 3) 神原英朗「岩田古墳群」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』6 山陽町教育委員会 1976年
- 4) 小池 寛「中空耳環について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 5) 葛原克人「平瀬古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83 岡山県教育委員会 1993年
- 6) 岡安光彦「いわゆる「素環の巻」について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 1984年
- 7) 森田友子「赤茂1号墳」『谷尻遺跡赤茂地区』北房町埋蔵文化財発掘調査報告4 北房町教育委員会 1986年
- 8) 山本雅靖・間壁葭子「赤井西古墳群4号」『王墓山遺跡群』倉敷考古館研究集報10 倉敷考古館 1974年
- 9) 注(1)文献

第3章 川戸古墳群の調査

- 10) 上田宏範ほか「大和二塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21冊 奈良県教育委員会
1962年
- 11) 岩村清一郎ほか「湯舟坂2号墳」『京都府久美浜町文化財調査報告』第7集 久美浜町教育委員会
1983年
- 12) 柳田純孝・柳沢一男「片江8号墳」『福岡市 片江古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告
第24集 福岡市教育委員会 1973年
- 13) 秋山浩三ほか「物集女車塚古墳」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第23集 向日市教育委員会 1988年
- 14) 谷山雅彦「福井地内の山土採取事業および分譲宅地造成事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査
年報』4 総社市教育委員会 1994年
- 15) 大谷晃二・伊藤聖浩「須恵器」『美作 塚ヶ成古墳』美作村教育委員会 1994年
- 16) 平井泰男『カキ谷B古墳群1号墳』 カキ谷B古墳群1号墳埋蔵文化財発掘調査委員会 1987年
- 17) 古墳時代後期の羽口でモミ痕が多量に認められるものとして岡山市百聞川原尾島遺跡出土資料があ
る。
- 宇垣匡雅ほか「百聞川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会
1994年
- 18) 村上幸雄「稼山遺跡群Ⅱ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』2 久米開発事業に伴う文
化財調査委員会 1980年
- 19) 泉森 皎ほか「天理市石上・豊田古墳群Ⅰ」『奈良県文化財調査報告書』第20集 奈良県教育委員会
1975年
- 20) 大澤正己「金武古墳群吉武I群1~8号墳、乙石H群1号墳出土鉄滓の調査」『四箇周辺遺跡調査報告
書』3 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告第15集 福岡市教育委員会 1980年
- 21) 平井 勝「土井2号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』29 岡山県教育委員会 1979年
- 22) 小郷利幸「崩レ塚古墳群 クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第31集 津山市教育委員
会 1990年
- 23) 竹田勝・小野一臣・間壁葭子「大池上古墳群2号」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館
1974年

第4章 古墳築造前・後の遺構と遺物

第1節 繩文・弥生時代～古墳時代中期

(1) 遺構

古墳の墳丘および地山下の掘り下げ等を行っていないため、確認できた古墳時代後期以前の確実な遺構は土壙1のみである。

1号墳T-3で検出した土壙1（第45・46図）はトレンチが土壙の端にかかったものであり、径は45cmよりも大きくなる。深さ24cmを測り断面の形状から袋状の貯蔵穴になる可能性がある。出土した土器86は口径17.4cm、高さ28.5cm、球形の胴部に直立する口縁部がつく甕で外面にはタテハケのちヨコハケが施されるが器表にかなり凹凸が残っている。古墳時代中期である。

(2) 土器（第49～57図、図版27・29）

弥生時代中期を中心に多量の土器が出土した。2号墳墳丘確認トレンチによって掘り下げた包含層から出土したものが多いが（15・28・31・39・41・63～65・72）、流土中、石室内などからもかなりの量が出土している。

縄文時代 1～5は縄文時代晩期の突帯文をもつ深鉢で、4・5は頸部に鋭利なヘラ状工具によって平行沈線を刻んでいる。6はわずかに条痕の認められる口縁部片で、縄文時代後期の可能性が強い。

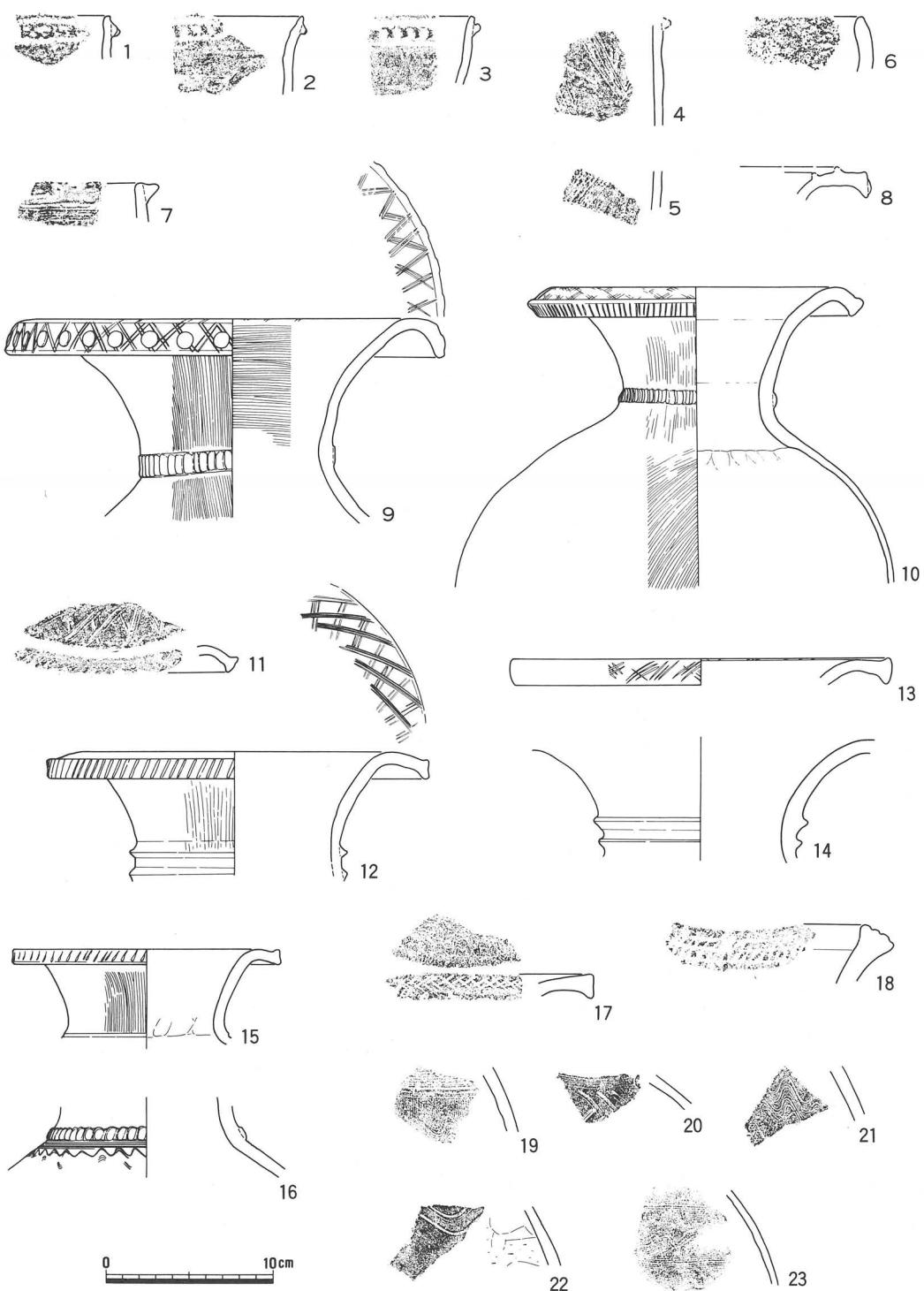
弥生時代中期 7は突帯を貼り付けて逆L字形の口縁を形成し、下方に櫛条工具による平行沈線を施すもので弥生時代中期初頭に位置付けられる。端面には刻みは施されない。

壺9～25・27・28には、9・10・16のように頸部に突帯を貼り付け、ヘラ状工具による押圧を加えるものと、12・14のように断面三角形に仕上げるものとがある。口縁端面は若干拡張して刻目文を施すものが多いが、口縁部を大きく垂下させて斜格子文を施し、さらに円形浮文を加える9や、口縁部上面に2条の突帯を貼り付け8などもある。また、9～12では口縁部上面に斜格子文を施している。

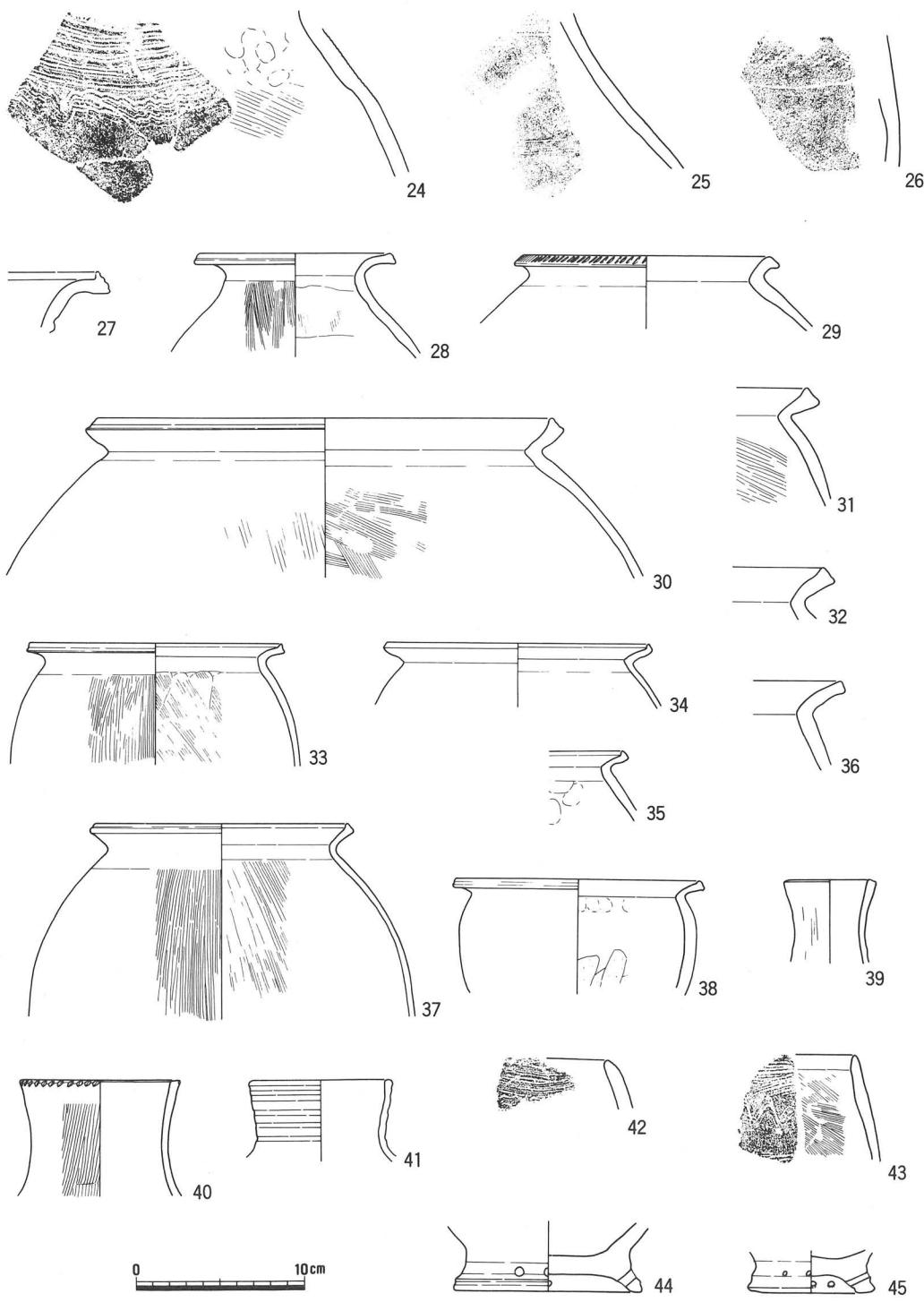
胴部の良好な破片は少ないが、櫛描きの平行沈線と波条文を交互に配するものが多く、20は斜格子文である。

27・28は口縁端部に凹線文を施すもので、27では口縁端に3条、頸部にも幅の広い凹線をもつ。

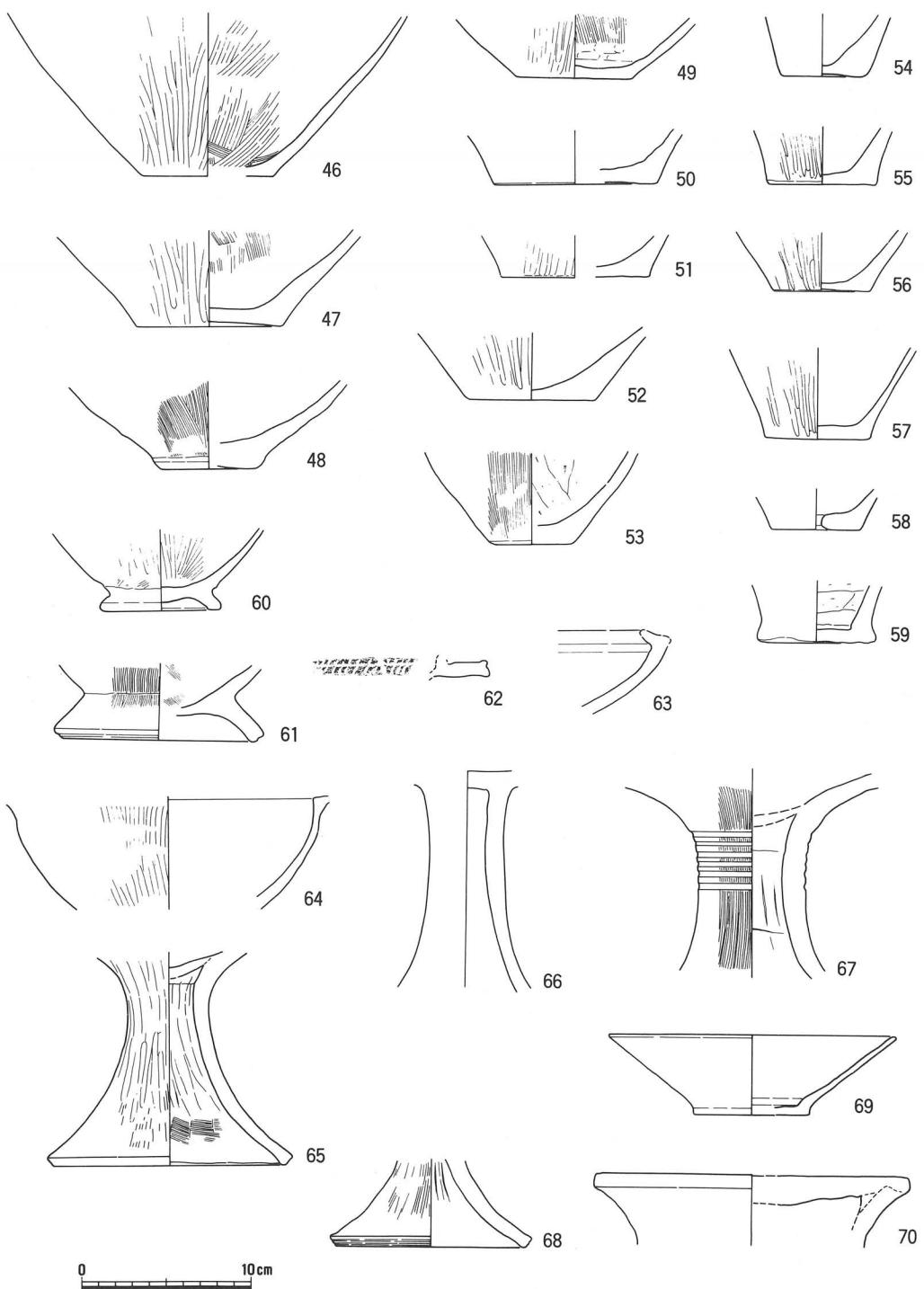
外面調整はタテハケ、内面調整はナデないしハケメである。



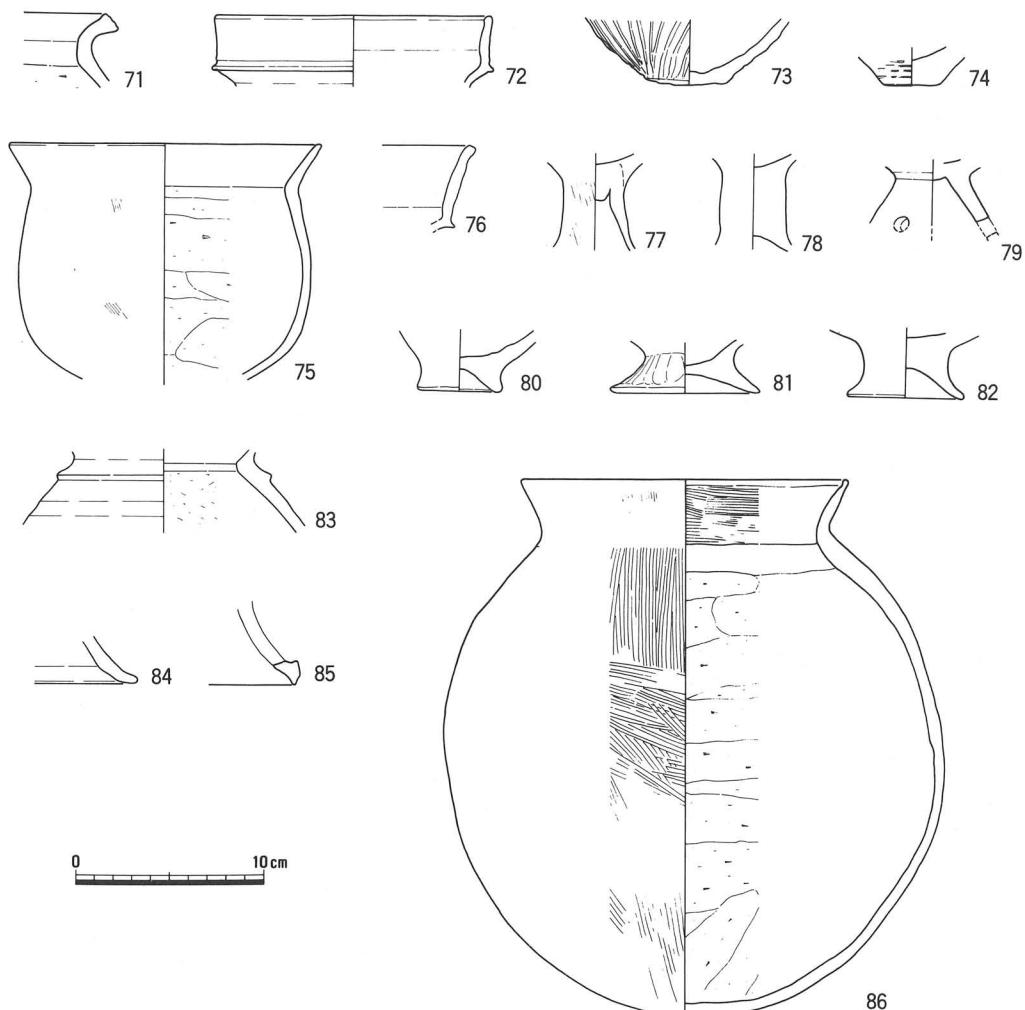
第49図 縄文土器・弥生土器（1）



第50図 弥生土器（2）



第51図 弥生土器〈3〉



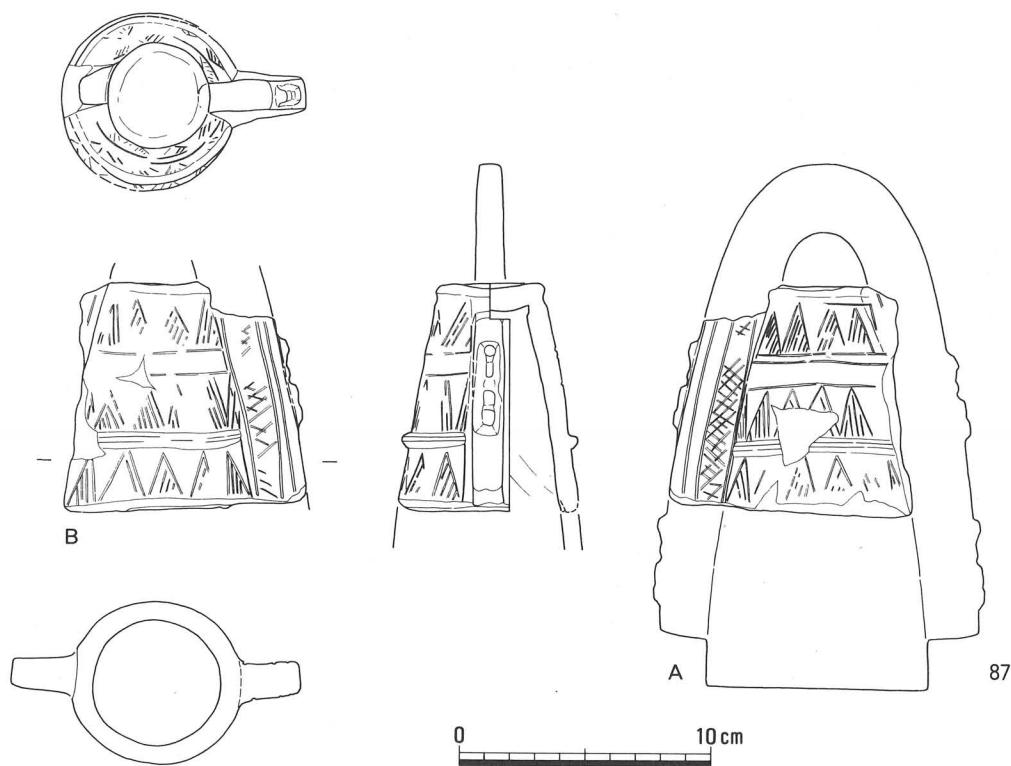
第52図 弥生土器〈4〉・土師器等

甕26・29～38では口縁端部に刻目を施す29以外は無文で、端部をわずかに上方に拡張するものが主体を占める。26は大形の甕の胴部かと思われ、板状工具の刺突文が施される。内外面の調整は壺と同様であるが、38では内面下半にヘラケズリが施されている。

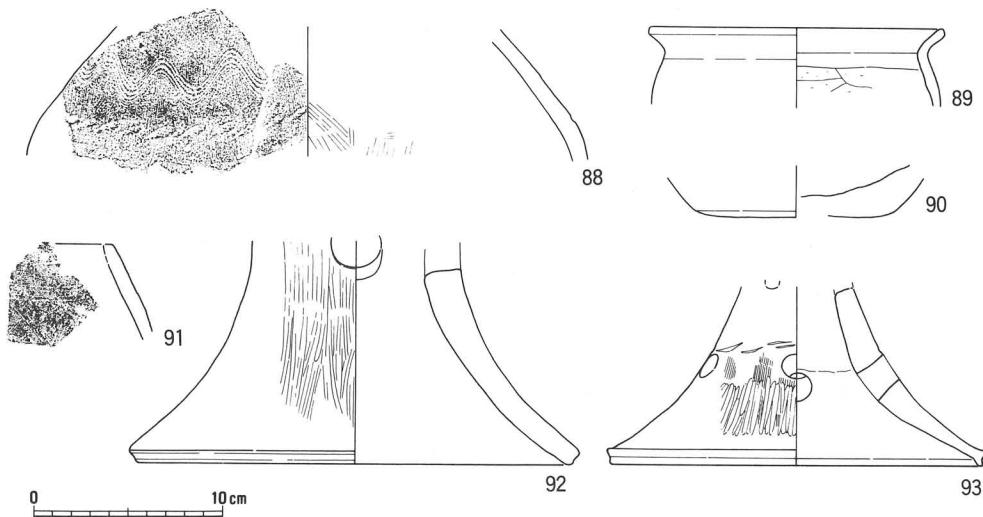
39は細頸壺、40・41は水差形土器の口縁部、42・43は無頸壺で櫛描文が施される。44・45は小形の鉢の脚台部とみられ、2孔1対の円孔が配される。

46～59は壺および甕の底部で、外面ヘラミガキ、内面タテハケの個体が多いが、59の内面はヘラケズリである。58は底部を穿孔して甕としている。60は鉢の脚台部である。なお、48・53・61および68は後期の項で取り扱う。

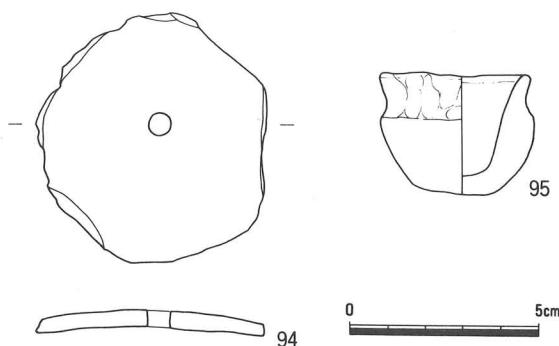
62～67は高杯で、62は杯部の周囲に突帯をめぐらせその外側に水平な面を形成するもの、



第53図 銅鐸形土製品 ($S=1/3$)



第54図 1号墳トレンチ出土遺物



第55図 土製品

63は端部がく字形に屈曲し、杯部が深い鉢形をなすものである。64、65は同一個体の可能性がある。口縁端は水平気味の短い面をなすと思われる。69は小形の鉢、70は器台である。

弥生土器の主体を占めるのはここに示した中期の土器である。多くが小破片であるため詳細な分析は行いがたいが、27・28・38・41・59・67など凹線を多

用し内面のヘラケズリが胴部下半に施されるものは中期後半（IV期）に位置付けられ、それ以外は中期中葉（III期）とみてよい。

後期～古墳時代 71は後期前半の甕で底部48・53・61、脚部68もこれに近い時期であろう。

72～84は後期末から古墳時代初頭にかけてのものである。73では粗いタタキが斜めに、74では細かいタタキが施されている。83・84は鼓形器台である。

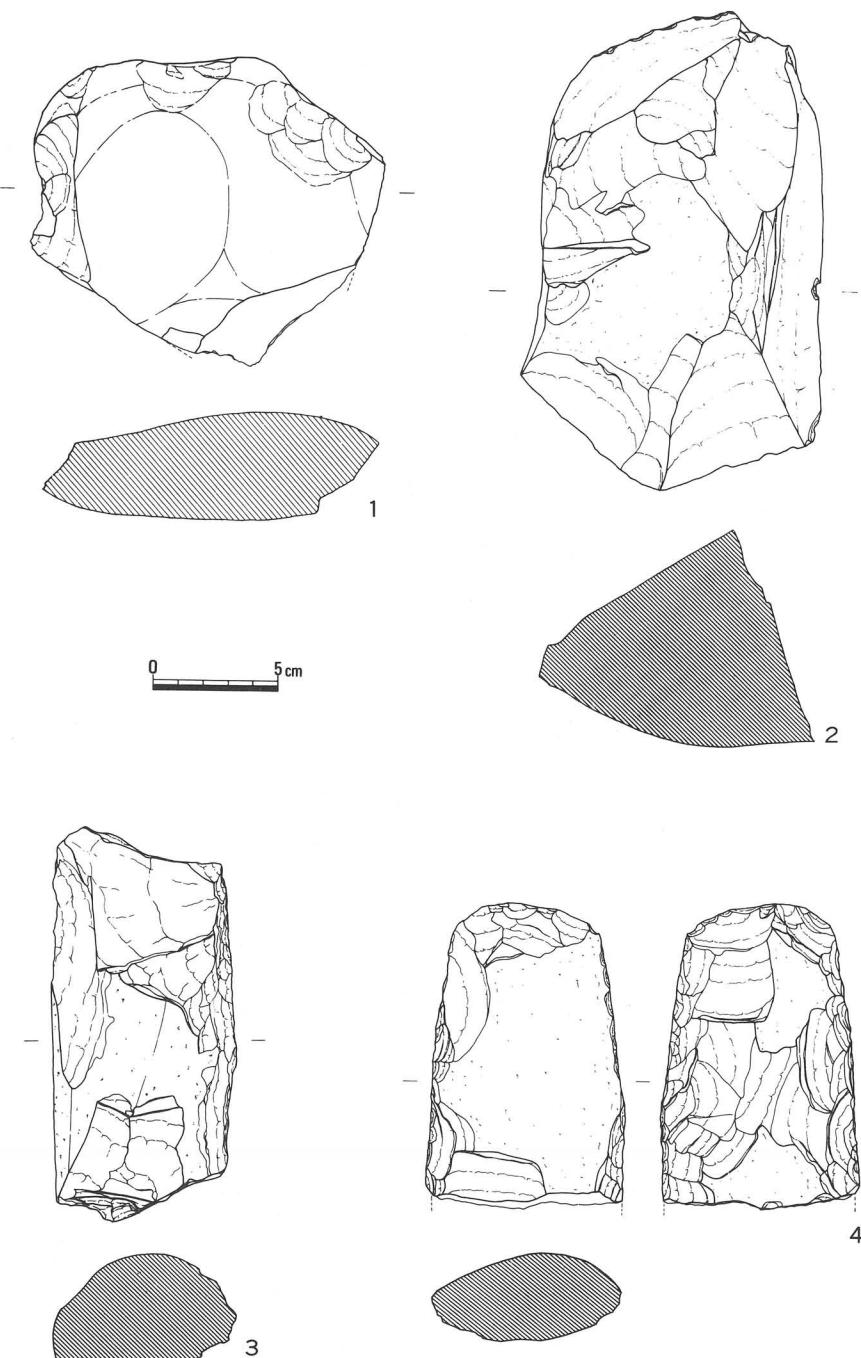
85はそれよりも時期が下がり、5世紀末ごろの須恵器高杯の脚である。

(3) 銅鐸形土製品ほか（第53・55図、図版27）

87は1号墳確認トレンチのT-4、2層から出土したものである。調査時に破損したが、破面の状況からこの形状で埋没していたと判断できる。鐸身部は円錐台形をなし、飾耳のつく大きな鰭が片側に遺存している。残存高さ9.2cm、同幅9.6cm、舞の径4.2cmを測り、器壁は鐸身で7mm、鰭で14mmである。身部は突帶と沈線によって4段に区画され、鋸歯文帯3段、狭い無文帯1段となる。無文帯の上側はA面では2本の沈線になっており、これらと無文帯とで横帯を表現している可能性がある。また、身部下端は鰭の接合部付近で若干外反を示しており、この位置にも突帶が施されているとみられる。鰭は外側に2本の沈線が、内側に斜格文が施されている。

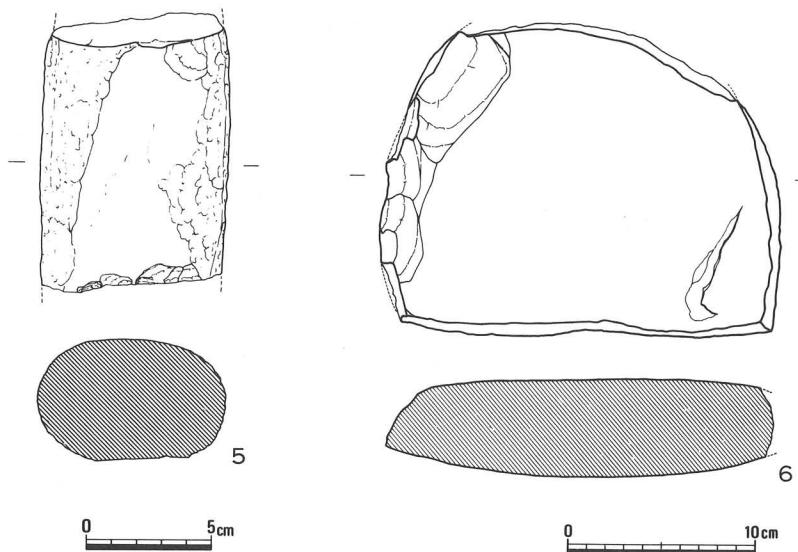
下端の破面は粘土の接合痕で剥脱した状態を示しており、本来の高さは20cm前後になると推定され、銅鐸形土製品のなかでも最大級の大きさになる。

鐸身の断面形が円形をなし、飾耳のある大きな鰭をもつこと、鐸身に突帶を表現することなどからみて銅鐸のなかでも最も新しい段階、突線鉢ⅣないしⅤ式を模倣して製作されたものと思われ、大形化した銅鐸を模したため土製品もこうした大きさになったと考えられる。銅鐸では鰭に施される鋸歯文が身部に、また、身部の文様帯に入る斜格文が鰭に施されて文様が逆になっているなど、銅鐸の忠実な模倣には至っていないが、よく銅鐸の特徴をとらえていると言えよう。美作ではその段階の銅鐸の出土は知られていないが、兵庫県西部の千種町岩野辺、三



第56図 石斧未製品 (S=1/3)

日月町下本郷では突線鋸式銅鐸が出土しており¹⁹、それらとの関連で理解すべきかと思われる。この資料が出土した2層は古墳の墳端に形成された堆積層であり、墳丘あるいは墳丘下の包



第57図 石斧未製品・台石 (S=1/3・1/4)

含層から流出したものと考えられる。第54図には1号墳トレンチの出土遺物を示しており、88~90がT-4、91~93がT-5からの出土である。このうち88、91が中期中葉、他は後期前半とみられる資料であり、後期の土器の出土量がやや多いように思われる。土師器甕86の出土からこの地点には古墳時代まで継続して集落が営まれたと考えることができ、銅鐸形土製品は後期末ごろに集落内で使用されたものと考えて特に支障ないと思われる。

94は土器片で製作された紡錘車で、縁辺を打ち欠いてほぼ円形に仕上げている。径約6cm、円孔の径6mmを測る。2号墳東トレンチの包含層から出土した。95は口径4.0cm、高さ3.2cmのミニチュア土器で口縁部外面には指頭圧痕が残る。3号墳墳裾の堆積土からの出土である。

(4) 石器 (第56・57図、図版28)

石斧未製品1~5、台石6が出土した。6は弥生中期の包含層からの出土であるが、1~5は2号墳周辺の堆積土中からの出土である。1は円礫の一部に剝離を加えたもの、2、3は大型の円礫を割り取って周囲から荒い剝離を加えたものである。4は偏平な円礫を使用し縁辺を中心にして剝離整形を行ったもので上端にむかって薄くなることから刃側と考えられる。また、図版28にその一部を示したが、同石材の剝片も出土している。5は側縁を中心に敲打が加えられた円筒形の破片である。これらのうち3~5は長さは折損していることもあって異なるものの、幅はほぼ7.5cmと共通する。厚さは3が4.6cm、4が3.5cm、5が4.9cmである。

6は長さ21.3cm、厚さ5.7cmの台石で、上下両面は使用によって平滑に摩滅している。

1~4の石材は無斑晶の安山岩で表面は灰色、破面は黒色を呈する。同じ石材は基盤層中に

も長径10cm弱の円礫の状態で含まれているがこの大きさのものは認められず、谷の上流で採集されたものと思われる。また、5、6も安山岩であるがやや斑晶が入り、表面淡緑色、破面が黒色を呈するものである。

1～5は太形蛤刃石斧の製作の各段階の資料であり、この遺跡で製作が行われていたと考えられる。素材はいずれも円礫であるが、大きな剝片を割り取ってそれに剥離を加えるもの、適当な大きさの円礫を加工するものなど素材の選択と成形はかなり多様である。こうした石斧の生産が自給的なものであるのか他地域にも搬出されているのか不明であるが、県南部の遺跡においても1～4と同様の石材で製作された石斧が見られることがあり、今後検討する必要がある。なお、これら以外にサヌカイト、安山岩の剝片が出土したが、石鏃等の石器は認められ

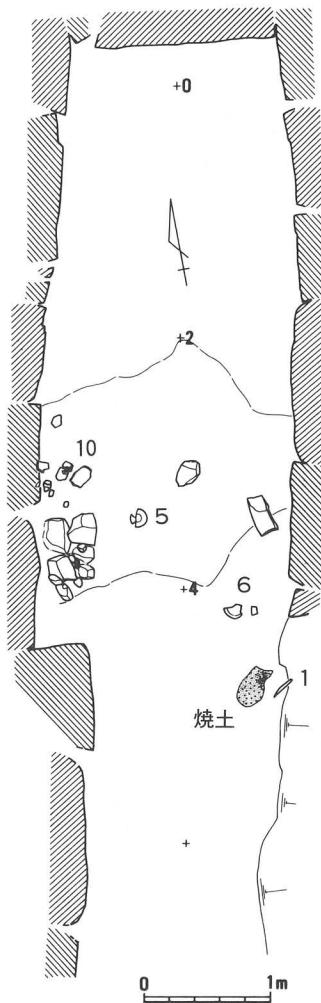
なかった。また、1号墳付近でメノウの小片を採集したが製品ではなく、石器石材の可能性がある。

第2節 古代・中世

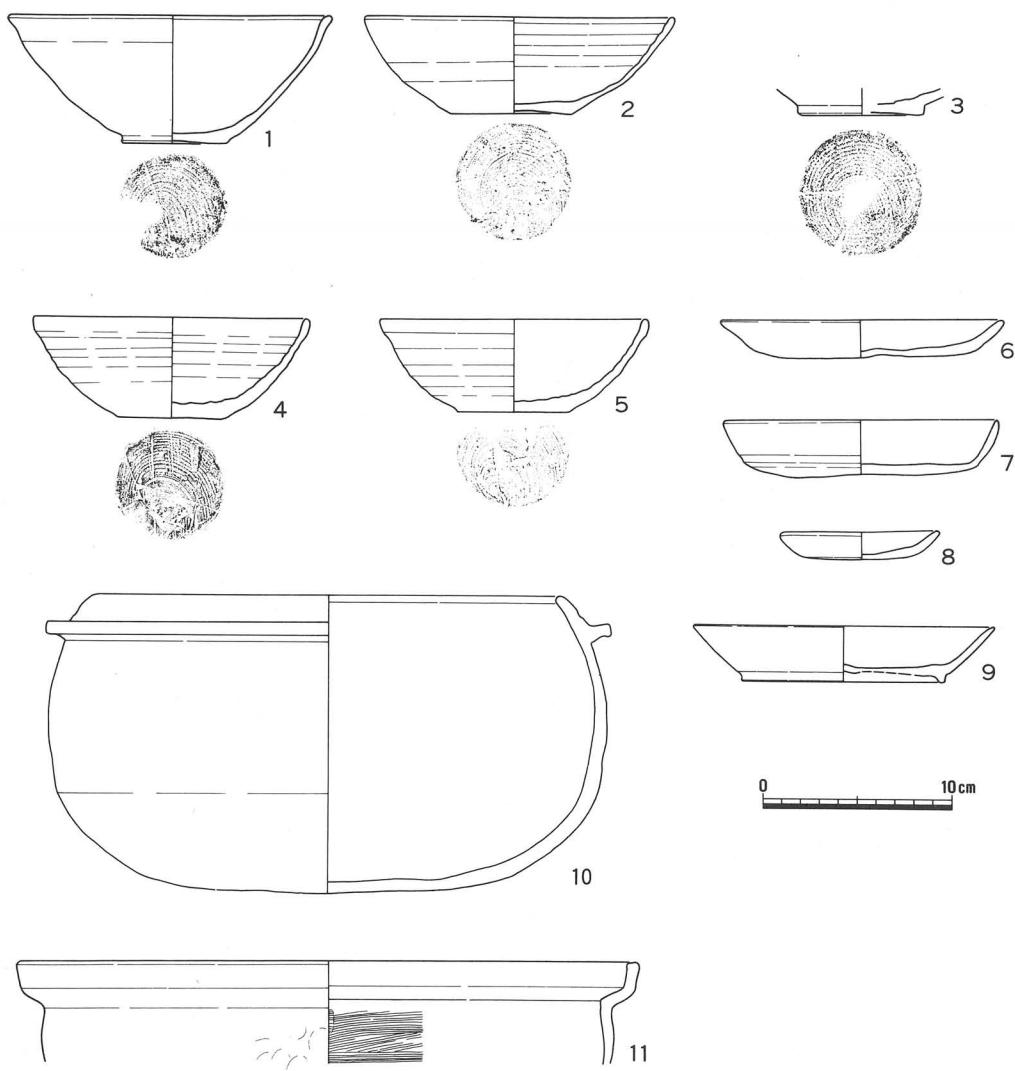
2号墳の石室はかなり早い段階で開口したようであり、玄室内を中心に中世の遺物がまとまって出土した。そのほか2号墳の東～南側の裾を埋める堆積土中から古代、中世の遺物が出土しており、特に東側では遺物の包含量が多くかった。また、1号墳周辺の水田床土等にも中世の遺物がかなりの量含まれていた。

こうした遺物のありかたからみて、古墳群が所在する扇状地上に古代～中世の集落が所在していたと考えられるものの、調査区内からは確実なその時期の遺構は検出されず、近世にこの部分が水田化された際に大部分が削平されたものと思われる。

なお、2号墳墳丘の西～南側には亜角礫が広い範囲にわたって堆積していたが（第63図）、この礫層および下の堆積層には古代から13世紀代までの遺物が含まれ、礫層の上面からはそれらおよび14世紀以降の遺物が出土している。礫層上部が水田で削られているため明確でないが、礫層は14世紀前後の時期に生じた谷川の氾濫によって形成された



第58図 2号墳玄室内の遺物出土
状況 (S=1/60)

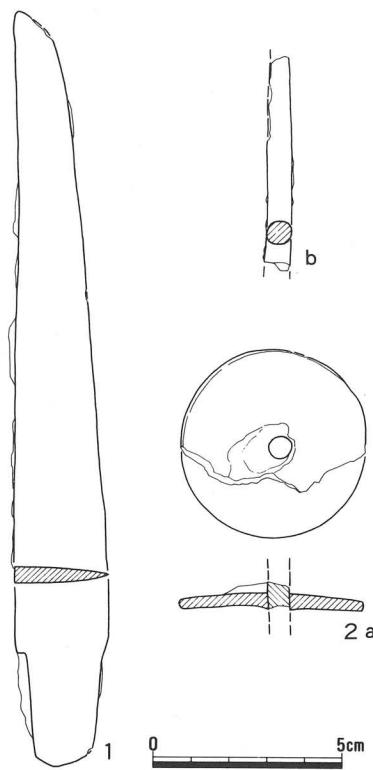


第59図 2号墳石室内出土土器

(1) 2号墳石室の再利用 (第58~60図、図版29・30)

古代末には石室が開口したようであり、石室内からは再利用に伴う遺物が出土した。遺物は玄室の前半部分に集中しており、羽釜10は西側壁に近い部分に破片が散在した状態で、椀5、皿6は置かれた状態で出土したが、他はまとまった出土状態ではなく破片が玄室前半から羨道にかけて散在していた。また、羨道奥東側には長さ32cm、幅20cmの焼土面があり、短刀1はその横から、鉄製紡錘車2は玄室中央付近から出土した。

1~5は勝間田焼の椀である。1は復元径17.2cm、高さ6.8cmと大きく、口縁部はわずかに肥厚して外反する。3は底部のみの破片であるが底径は大きく、段をなして体部に続く。2は口



第60図 2号墳石室内出土鉄器

径16.5cm、高さ5.1cm、4と5はよく似た形状で口径は14.5cm前後、高さは4が5.4cm、5が4.9cmである。いずれも底部は回転糸切りであるが4ではさらに板目圧痕が認められる。6～8は土師質の皿である。6は径15.0cm、高さ2.0cmと浅く、成形は粗雑である。7の底部調整は指頭押圧のちナデと思われ、8には板の圧痕が残る。9は玄室内から出土した須恵器杯で体部は直線的に斜めに開く。

10は口径24.4cm、高さ15.9cmを測る瓦質の羽釜、11は屈曲して上方にのびる口縁をもつ鍋である。

短刀1は平造りで全長20.1cm、身幅2.5cmを測る。切先は小さく、わずかに反りをもつ。栗尻の茎は2.9cmと短く目釘孔はない。棟区が深いのに対し刃区は明瞭でない。

2は鉄製紡錘車であるが、軸部を欠損している。玄室中央のやや奥側、床面より約30cm高い位置から出土しており、中世の遺物と推定される。径4.8cm、厚さ4mmの鉄製円盤の中央に径5mmの鉄棒を装着したものである。軸部は遺存状態がよくないが bはその破片である。出土

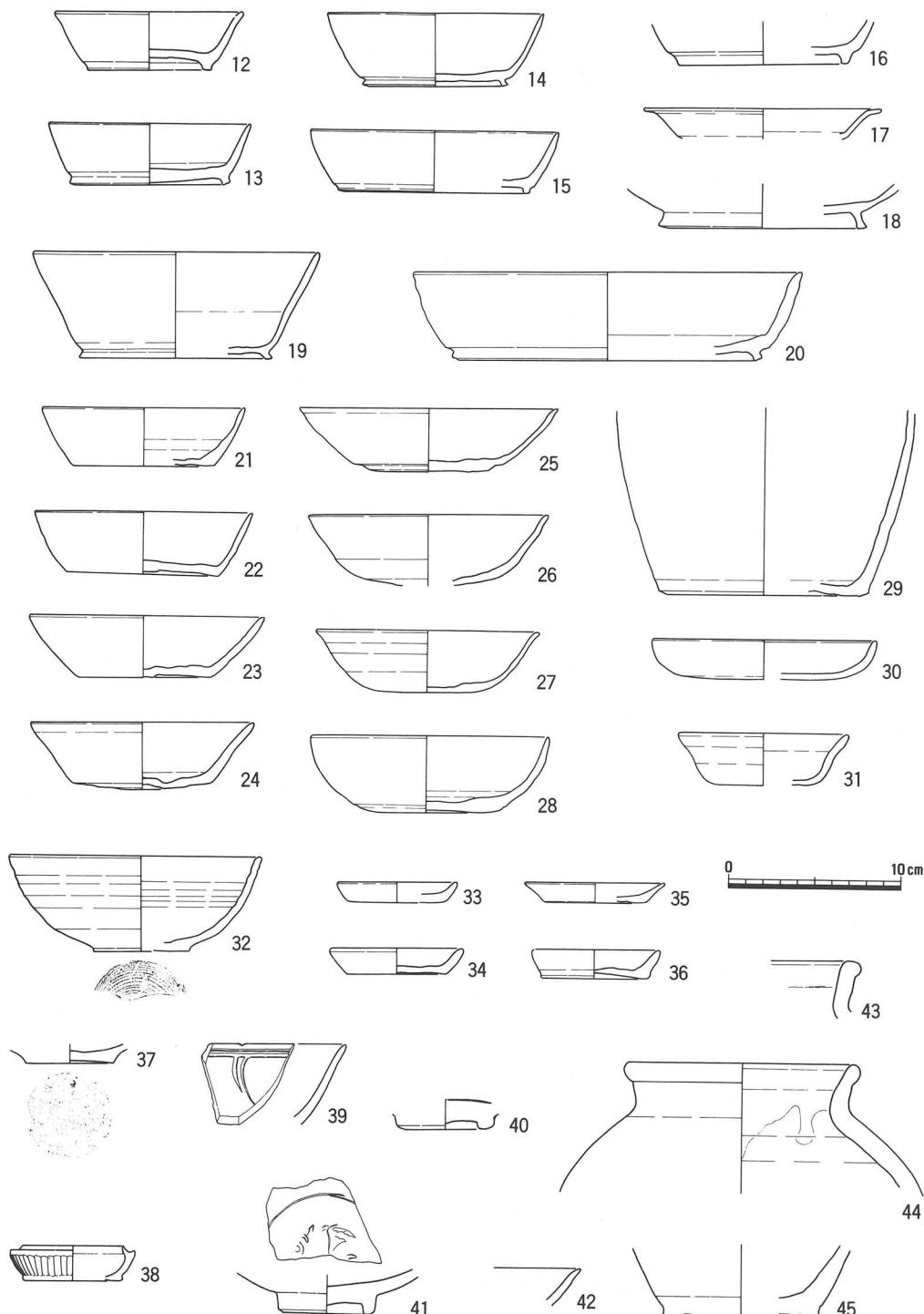
土器のうち9は平安時代・9世紀と思われ、6・7も同じ時期と推定される。また、1・3は12世紀前半、4・5は12世紀後半、2はそれらの間に位置付けられ²⁾、8・10・11も12世紀代のものとみてよいであろう。

これらの土器から、石室は9世紀ごろに開口したものと思われ、その段階の土器は杯、皿であることから祭祀がなされた可能性も考えられる。一方、12世紀代の遺物にはある程度の時期幅がみられることや、羽釜、鍋といった器種が含まれていることからみて、祭祀というよりも石室空間の利用がなされ、その際にこれらの遺物が持ち込まれた可能性が強い。

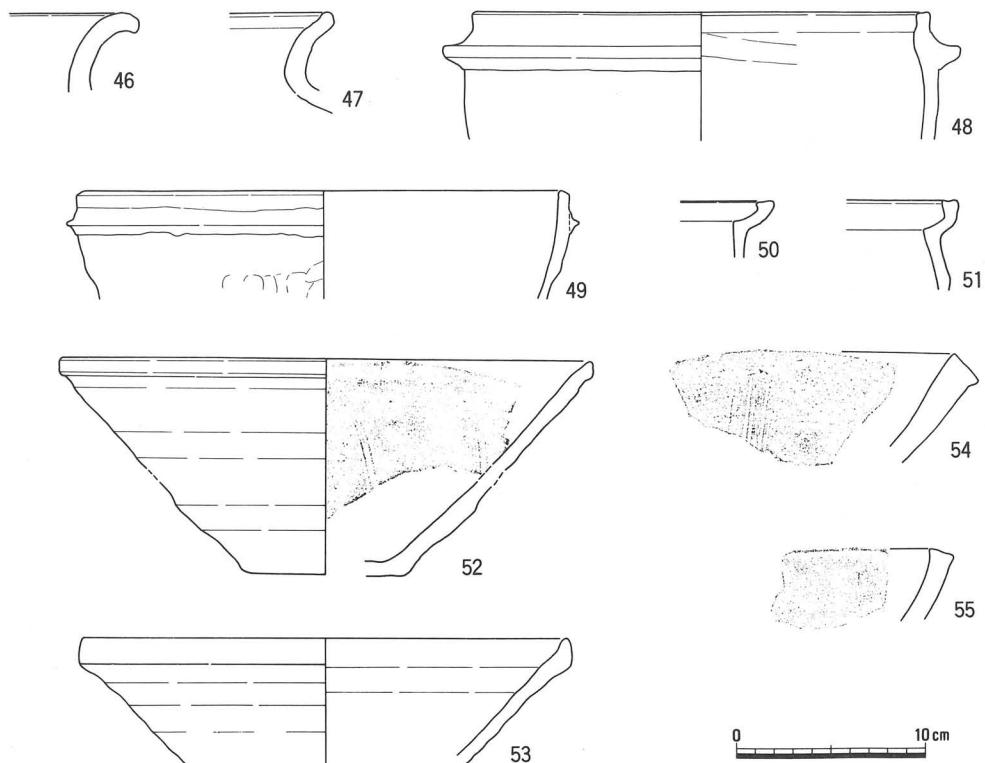
(2) 墳丘周辺包含層の出土遺物（第61・62図、図版29）

12～20が高台をもつ須恵器杯、21～28が須恵器杯で、29は須恵器壺の下半部、30、31は土師器皿・杯である。大部分が2号墳東南裾部に形成された包含層からの出土であるが、33・35・40・42・44・45・49は礫層上面ないし包含層上部からの出土である。41・54・55は2号墳石室埋土上部、37・43・47は1号墳周辺からの出土である。

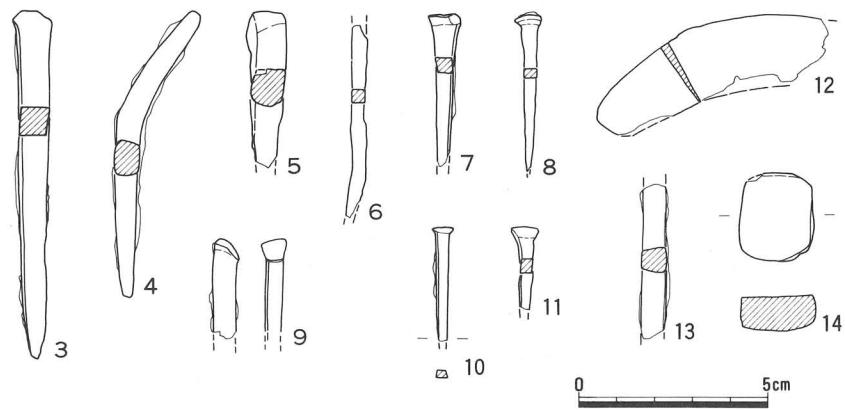
12～20はいずれも焼成が良好で、12では外面に自然釉および窯壁片が付着している。17は



第61図 古代・中世の土器



第62図 中世の土器



第63図 流土中出土鉄器

21とよく似た砂粒の少ない精良な胎土である。20は復元径22.6cmを測る大形の杯である。

21～28のうち24・27は軟質白色、23は明褐色を呈する。21・22は灰色で内外面に焼成時に生じた緋だすき状の痕跡が見られる。28は厚い底部と椀状の体部をもつもので、播磨系の須恵器



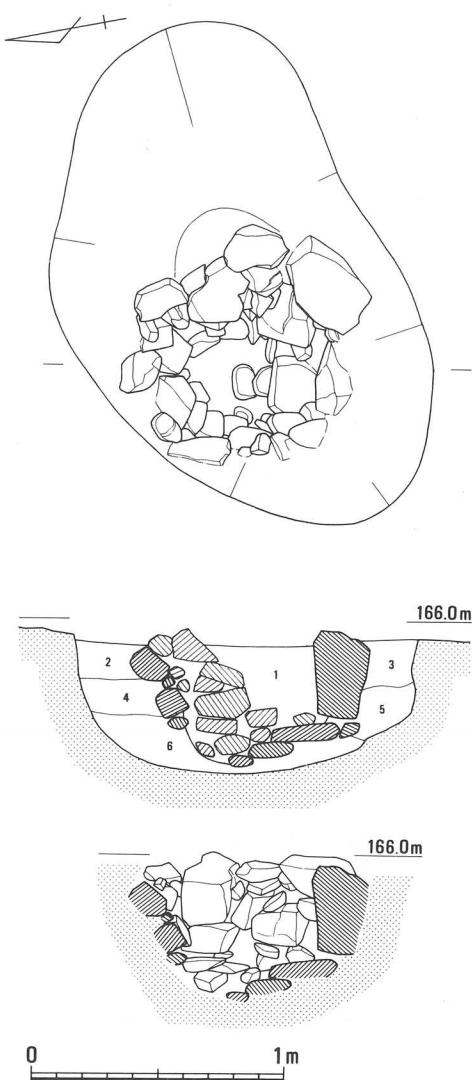
第64図 2号墳周辺の中世の遺構

椀の可能性がある。底部はいずれも回転ヘラ切りである。

29は底径11.2cmを測り、底部外面の調整は縁辺のみがヘラケズリで、底面はナデである。
30、31は土師質の皿・杯で、両者とも器表がかなり剥落しているため調整はほとんど不明であるが、30の底部調整はヘラケズリのようである。

14・20・28・30が奈良時代、12・13・15~19・21・22・29・31が奈良時代末~平安時代前半、23~27が平安時代・9世紀以降かと思われ、奈良時代末から平安時代前半の遺物が主体を占める。

32以降は古代末から中世にかけての遺物である。32・37は勝間田焼の椀で、32は口径14.7cm、器高5.6cmを測る。33~36は土師質の皿で口径は7.5cm前後、底面にはいずれも回転糸切りの跡が見られる。38は青白磁の合子で側面は細かい花弁状をなす。39~41は青磁椀である。39は輪花の口縁部で、内面には浅い彫り込みが見られる。41では見込みに花文かと思われる文様が押されている。42は瀬戸・美濃の皿である。43~45は備前焼の壺で、44では肩部に厚



第65図 井戸 1

井戸 1（第65図）

2号墳南側の礫の堆積面で検出した、上面径約60cm、深さ51cmを測る石組みの井戸で、壁面は大小の角礫を3段前後乱雜に積んだものである。掘り方は長径2.1mの楕円形をなす。井戸内から鎌12、掘り方埋土から鉄釘13が出土した。

井戸 2（第17図）

井戸1の北西で検出したもので、長径2.3m、深さ57cmと井戸1と同様の規模・形状の掘り方をもつ。井筒等の痕跡は認められなかった。

土壤 2

く自然釉がかかっており文様の有無は不明である。

46、47は甕の口縁部で明灰色を呈し勝間田焼の可能性が考えられる。48~51は瓦質の羽釜、鍋である。図示した以外に羽釜9、鍋4個体が出土しており羽釜のほうが多い。また、土師質で口縁部がく字を呈する鍋は小破片1点のみの出土で図示していない。掘り鉢のうち54~55は備前焼、52は瓦質で条線は52で4条、55が7条である。53は東播系のこね鉢である。

これらは12世紀中葉から14世紀前半にかけてのものであり、その時期の遺構が所在していたとみられるが、古代の遺構と同様、水田造成の際に削平されたと推定される。

(3) 中世後半以降の遺構・遺物（第64図）

井戸2基と柱穴、土壤を検出した。いずれもかなり削平されている。出土遺物がないため時期を明確にしがたい。

2号墳入り口部分で検出した長径65cm、深さ16cmの楕円形の浅い土壙で、上部を削られてい るようである。土壙底から1頭分の馬歯が埋納された状態で出土した。

これら以外に2号墳墳丘南東部分を中心に柱穴15基を検出したが、建物等を復元するには至らなかった。径30cm、深さ10cm前後のものが多いが、長径60cm、深さ30cmほどの土壙状のものもある。埋土はいずれも褐色土である。出土遺物がなく、時期を確定できないためすべてこの項で取り扱った。礫層上で検出したものは14世紀以降とみられ、他もその時期の可能性が強いが、墳丘上の柱穴のなかにはそれ以前のものが含まれている可能性もある。

第62図に示したのは2号墳南側から出土した鉄器で3・4・6が礫層上面、8・9が石室埋土、他は水田層下や排土からの出土である。釘が主体を占め、大部分が中世後半と思われるが、近世のものが含まれている可能性がある。14は器種不明の小鉄塊である。

このほか、2号墳石室の堆積土上部から18世紀代の肥前陶磁器、備前焼等が、羨道の石材抜き取り穴から明治時代の磁器が出土しており、天井石が撤去されたのが18世紀以降、東側壁が除去されたのが明治以降とみられる。

(4) 小結

以上のように、削平のため遺構は明確ではなかったものの、縄文時代後期から中世にわたる多量の遺物が出土し、特に弥生時代中期中葉と9世紀前後のものが多く認められた。それらのうち、銅鐸形土製品は注目される資料である。

吉野川によって形成された平野に面する扇状地上という、居住に適した場所であるため、長期にわたって集落が形成されたようである。また、そうした所に占地する点も川戸古墳群の特色の一つと見ることができよう。

註

- 1) 小野真一『特別展図録 銅鐸』赤穂市立博物館 1992年
- 2) 平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ 日本中世土器研究会 1993年

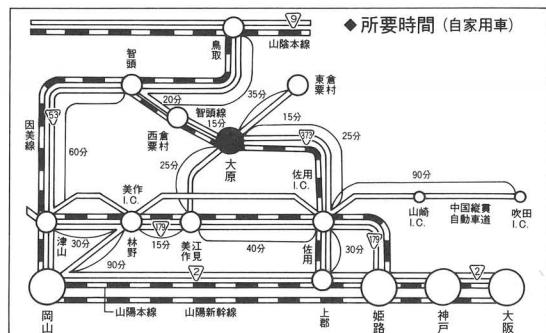
第5章 復元・整備の概要

古墳群は1号墳と2、3号墳の間が離れているためその部分を造成して駐車場、休憩所（小亭）の用地とした。敷地内には芝張り・植樹を行い、周囲および入り口についても植樹等の整備を行った（第66・67図、図版11）。

1号墳については墳丘の復元を行ったが、露呈していた天井石を見ることができるよう復元は天井石の高さまでとした。石室内は調査を実施しておらず盗掘のおそれもあるため、内部の礫は若干排出した状態にとどめている。

2号墳については石室および墳丘の復元を行った。石室は石材が除去されていた東壁を中心とし復元した。西壁が加重に耐えるかどうか不明であるため天井石等の復元は行っていない。また、2号墳の墳端は南側で大きく下がっているが、現状ではその部分が池状になるため埋め戻し、墳端は上方に復元した。なお、1、2号墳ともに墳端に施設はなかったが墳丘を明示するために低い石列を配した。

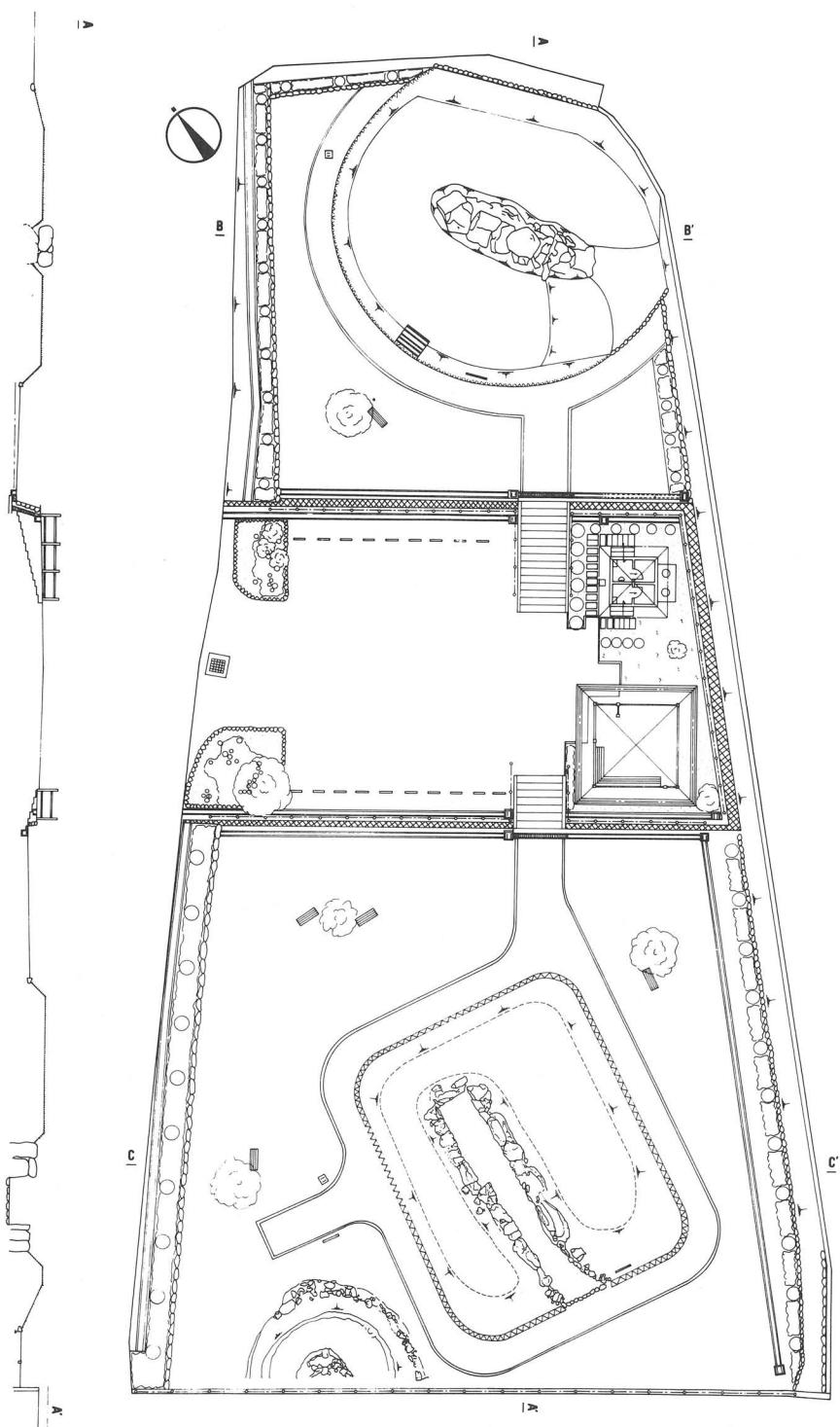
3号墳は石室の復元が困難な状態であったため墳丘の復元のみとした。



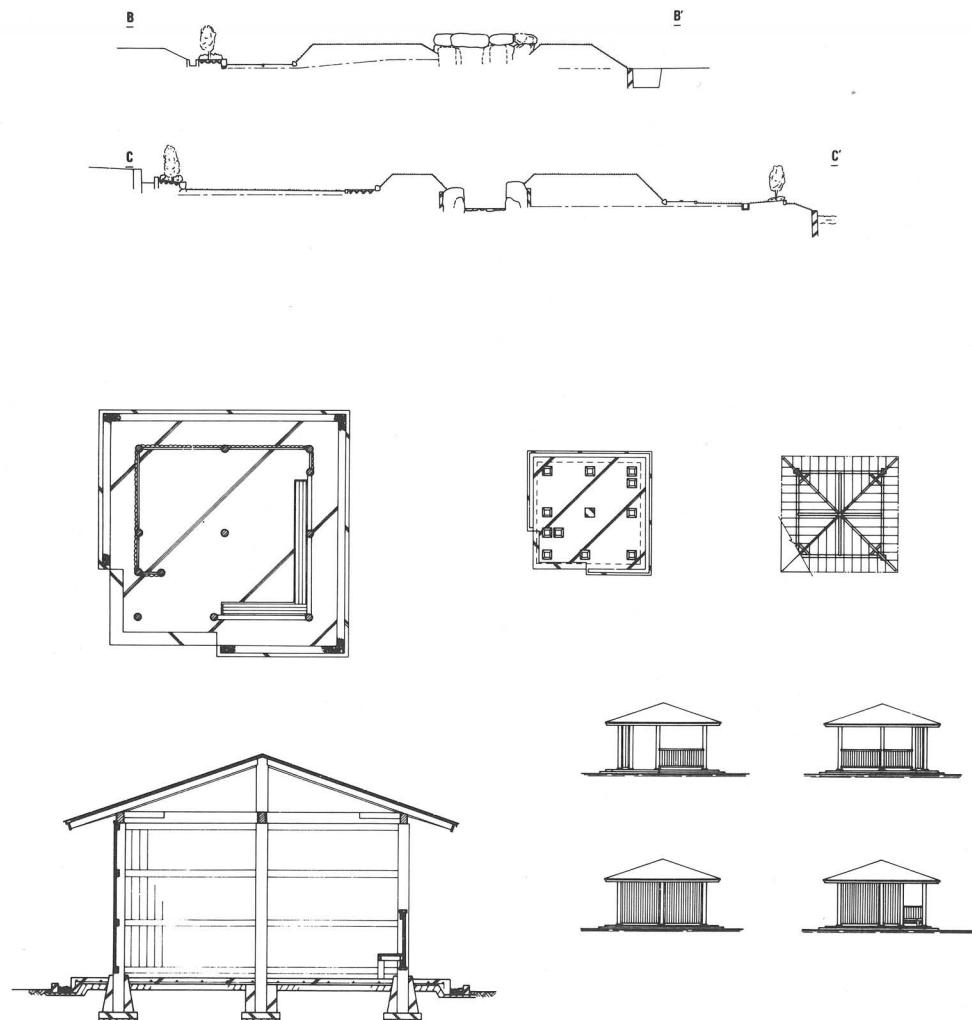
大原町への経路



復元・整備工事



第66図 古墳公園平面図



第67図 古墳公園断面図・施設

第6章 考察

第1節 2号墳の特色

以上に示したように、2号墳は南北17m、東西14.5mの方墳で、南北方向に築かれた横穴式石室は全長12.3m、最大幅2mを測るものであった。須恵器、土師器を中心に豊富な副葬品が出土したが、なかでも金銅装の馬具一式は注目される資料である。また、3号墳は径9.8m、石室推定幅1mの小規模な石室をもつものである。1号墳は径18mの円墳で、石室幅1.45m、全長7.8m以上と、これもこの地域にあっては大形であることが判明した。築造の順序は6世紀末ないし7世紀初頭に2号墳、続いて3号墳が築かれ、遅れて7世紀前半に1号墳が築かれたとみることができる。墳丘・石室の規模において3号墳と1・2号墳とでは大きな隔たりがあり、首長墓としての築造は2号墳→1号墳とみてよいであろう。

以下では2号墳についてその特色を整理し、川戸古墳群の評価を試みたい。

(1) 立地と方位

川戸1～3号墳は山麓の扇状地上に築かれており、周囲から容易にその存在を知ることができる。やすらぎ荘裏古墳が斜面のかなり低いところに所在し、やや立地が似ているが、その他の大原町内の後期古墳は基本的に丘陵の斜面に築かれている。6世紀末以降の吉備の古墳において川戸古墳群のように開闊な地形に面して築かれた後期古墳は少數である。そうした例として岡山市牟佐大塚古墳¹⁾、佐伯町三宅町田古墳などがあるがそれらは地域最大の巨石墳であり、この時期の首長墓の立地形態の一つとみることができる。なお、7世紀前半以降は首長墓は谷奥あるいは山の上に築かれるようになり、この時期が首長墓を顯示する最後の段階と言えよう。

一方、石室の主軸については川戸2号墳の場合、磁北に対して11°東に振っており、真北に合わせることを企図したものと思われる。6世紀末以前の古墳も含まれるが群集墳の石室開口方向については岡山市三須丘陵²⁾、矢部地区³⁾などの古墳群について検討が行われており、基本的に南向きで谷にむかって開口することが指摘されている。また、山陽町岩田古墳群や久米町稼山古墳群などでも開口方向は南西から南東の間におさまっている。これらの例からみて群集墳の場合、石室の開口方向は南を基本とすると言えるが、それほど厳密なものではないようである。地形の制約とそれに従って設けられる墓道との関係などが石室の開口方向を規定する要素と考えられ、また、必ずしも石室の軸線を南北の方位に完全に合わせることまでは目されていないようである。

それらに対して、川戸2号墳と同様に石室軸線を真北方向を合致させることを企図したとみられるものに落合町穴塚古墳⁴⁾、鏡野町井上大塚古墳、総社市長砂2号墳⁵⁾、矢掛町小迫大塚古墳⁶⁾などがある。これらは7世紀初頭から中葉にかけての古墳であり、穴塚古墳、井上大塚古墳などは巨石墳、また、後2者は7世紀前半以降の有力古墳である。これらの例から見て、首長墓では立地について、付近全体の地形以外にはそれを規制するものがないか微弱であり、そのため原則となる方位に石室を合致させることが可能になったものと思われる。

(2) 石室

平面形

川戸2号墳の石室は、玄室の長さ4.75mに対して羨道の長さは7.6m、玄室長の1.6倍となっており、きわめて長い羨道を特色とする。

美作の横穴式石室を概観した場合、代表的な首長墓である加茂町万燈山古墳⁷⁾では玄室長さ6.5m、羨道長さ5.6m、鏡野町井上大塚古墳では玄室長さ6.70m、羨道長さ5.57mである。また、数値は省略するが中央町越尾古墳⁸⁾や第4図に示した作東町豊野火の釜古墳なども同様に羨道は短く、長い玄室がこの地域の横穴式石室の特色であり⁹⁾、それは古墳時代後期を通して大きな変化を示していない。

それらに対して川戸2号墳は対照的な石室形状を示すと言えるが、同様に長い羨道をもつものとして落合町穴塚古墳がある。この古墳は玄室の全長3.8mに対し、羨道の長さは8.5mを測り、羨道の長さは玄室の2倍以上となっている。穴塚古墳は川戸2号墳よりも後出の可能性が強いが、その時期の他の古墳でこうした長い羨道をもつ例は知られておらず、この2基は美作の横穴式石室のなかでも特異な存在とすることができます。一方、備前・備中南部地域の大形石室では、備中こうもり塚古墳¹⁰⁾を代表例として長い羨道をもつものが一般的である。したがって、美作地域のこの2基の古墳の石室形態は備前・備中南部地域、あるいは畿内から伝えられたものと考えられる。

石積み

備前・備中南部の横穴式石室では玄室壁面の構築に用いられる石材はおおむね大きさがそろっており目地はほぼ水平に通っている。美作の横穴式石室では石材の大形化はやや遅れるが、大形化した段階の石室では側壁の最も奥側、奥壁と接する部分に最も大きな石材を用いたり、縦長に石を配するが多く、側壁最下段の目地の線は羨道にむかって下降している。こうした側壁の構築手法は美作の後期古墳の地域性とみられるが、川戸2号墳や穴塚古墳もこうした構築手法であり、石室平面形の場合とは異なり地域性の枠内にあると言える。

一方、川戸2号墳の場合、袖部には奥壁石材に次ぐ大形のものが用いられている。備前・備中南部、あるいは畿内の石室ではこの部分に大形の石材が使用されるが、美作の横穴式石室で

は最後までそうした形態にはならないようで、井上大塚古墳、鏡野町法明寺火の金古墳、万燈山古墳などでは細長い石材を立柱状に配しており、穴塚古墳の石材が比較的大きい程度である。したがって、袖部の形状に関しては特異な存在とみることができよう。

(3) 墳形

川戸2号墳は南北17mの方墳であることが判明した。古墳時代後期後半の畿内では前方後円墳の築造が終わり、かわって大王墓や巨石墳の多くには方墳が採用されることが明らかになっている。大形の方墳には崇峻天皇陵の可能性が指摘されている赤坂天王山古墳や蘇我馬子の桃原墓とみられている石舞台古墳などが含まれており、蘇我氏およびその親縁関係にある大王や豪族にこの墳形が採用されたと考えられている¹¹⁾。

吉備においても7世紀には北房町大谷1号墳¹²⁾や岡山市牟佐大塚古墳¹³⁾など多くの方墳が築かれるが、大部分が7世紀前半以降の築造である。現在の資料による限り川戸2号墳が後期の方墳のなかで最も古く位置付けられ、畿内における方墳の採用時期からさほどの時期差を置くことなしに築かれた方墳とみてよい。

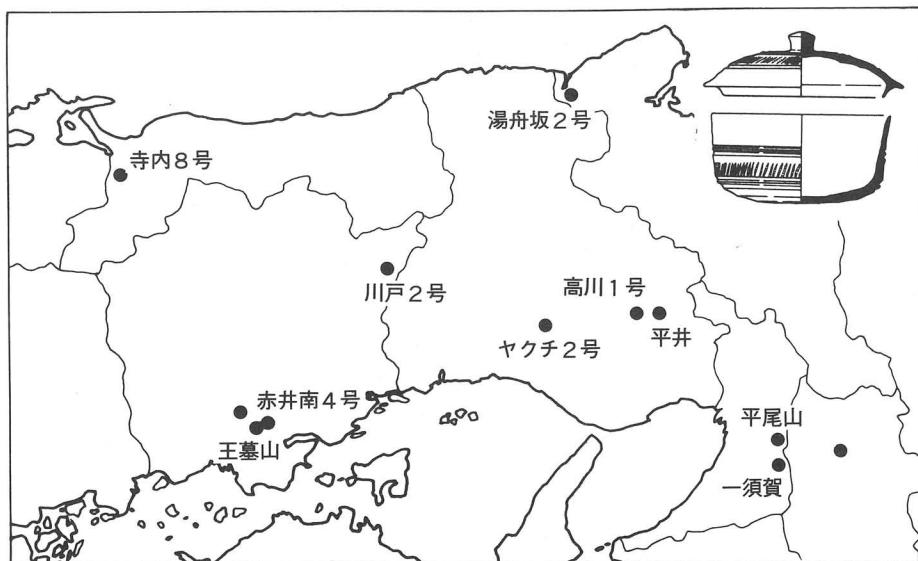
この場合、川戸2号墳の被葬者が採用したのではなく、方墳の築造を許されたとみるべきであるが、それが可能となった背景としてこの地域の地理的条件を指摘することができよう。第2章においても指摘したが、この地域は播磨から因幡、また、美作を経て出雲に至る交通の要衝にあたり、さらに付近は鉄の生産地帯である。大和政権にとっては地方支配を行う上で完全な掌握が必要な地域であったとみることができ、そうした地政学的な重要性によってこの地の首長に方墳の築造が許されたものと考えられる。

なお、美作においては後期方墳の築造は少数である。美甘村森谷古墳¹⁴⁾はその例とみられるが、この地域は出雲街道が伯耆に越える位置にあたる。また、川戸2号墳との共通性を指摘した穴塚古墳は墳形が明確でないものの、方墳の可能性が強い¹⁵⁾。

(4) 出土遺物

副葬品のうち中核をなすのは馬具であり、ほぼ一式の出土であることから編年上良好な資料と言えるが、それ以上に、この古墳の性格をよく表す遺物である。雲珠・辻金具は金銅張りであり、特に辻金具は宝珠飾をもつもので、類似した資料としては美作では万燈山古墳、備中では赤井西2号墳などがあり、他地域では兵庫県名草4号墳¹⁷⁾、奈良県平群・三里古墳¹⁸⁾出土資料などがよく知られている。こうした金銅装馬具は儀仗的、装飾的なものであり、畿内において製作され、大和政権から下賜されたものとみてよいであろう。

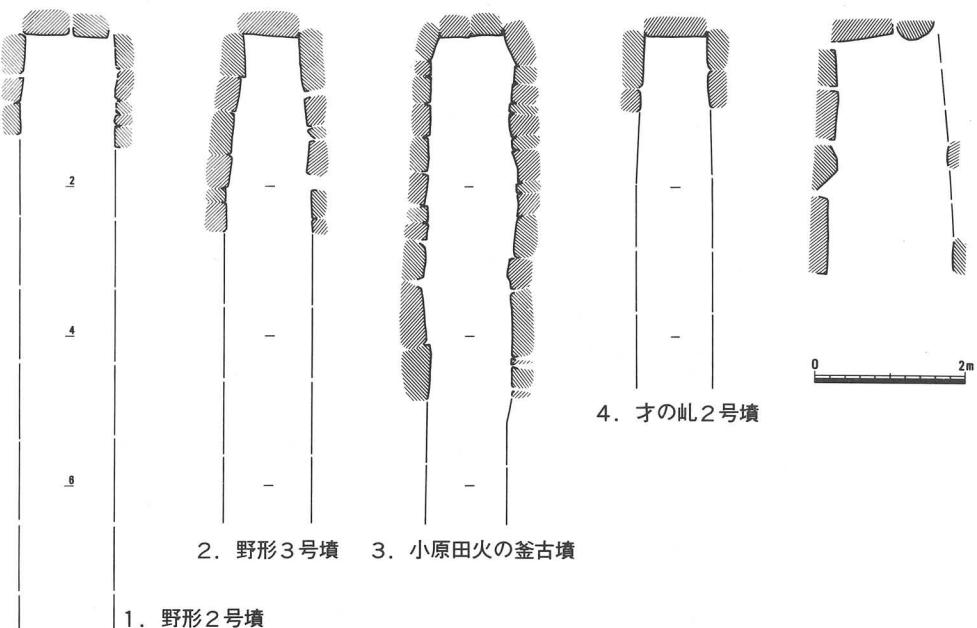
吉備の古墳の場合、金銅装馬具の出土状況は盗掘のためあまり明確ではないものの、一式を保有しているのは万燈山古墳、岩田14号墳、備中こうもり塚古墳など大形の石室をもつものに限られ、中規模の石室では飾金具等のみであることが多いようである。



第68図 装飾椀の分布

また、2号墳出土土器のうち有蓋椀29～40は無蓋高杯の杯部を思わせる特異な形状で、体部を沈線ないし段によって区画してその間に板状工具による列点文を配し、底部には丁寧なヘラケズリを施している。

この種の椀は岡山県下でも出土例が少なく、倉敷市王墓山古墳¹⁸⁾など数基の古墳の資料が知られるにすぎず、美作において類似する資料は知られていない。体部の装飾を指標として、管見の範囲で知りえた資料を表示したのが第68図であるが、畿内から中国地方にかけて、きわめて散漫な分布を示しており、若干まとまった分布を見せるのは兵庫県東部の三田盆地のみである。出土古墳・遺跡のうち京都府湯舟坂2号墳¹⁹⁾、大阪府平尾山古墳群平野大県第20支群3号墳²⁰⁾、兵庫県高川1号墳²¹⁾、岡山県王墓山古墳などはいずれも環頭大刀や金銅装馬具などを副葬した有力古墳で、被葬者と大和政権との密接な結び付きを考えることができる。また、これらの古墳間には相当の距離があり、首長間の交流によってこの器種が伝播したとは考えにくく、畿内から各首長のもとに直接伝えられたものと考えられる。王墓山古墳や平尾山古墳群平野大県第20支群3号墳の資料（第68図右上）では蓋が丸みをもち、つまみは上部でふくらんで銅椀を思わせる形状である。それに対して、川戸2号墳の資料では蓋は円盤状、つまみも指頭状になっており、形態に崩れが認められる。畿内から入手した土器をこの地域で模倣して製作されたものではないかと考えられる。

第69図 吉野川上流域の横穴式石室 ($S=1/100$)

第2節 川戸2号墳の占める位置

(1) 石室の規模

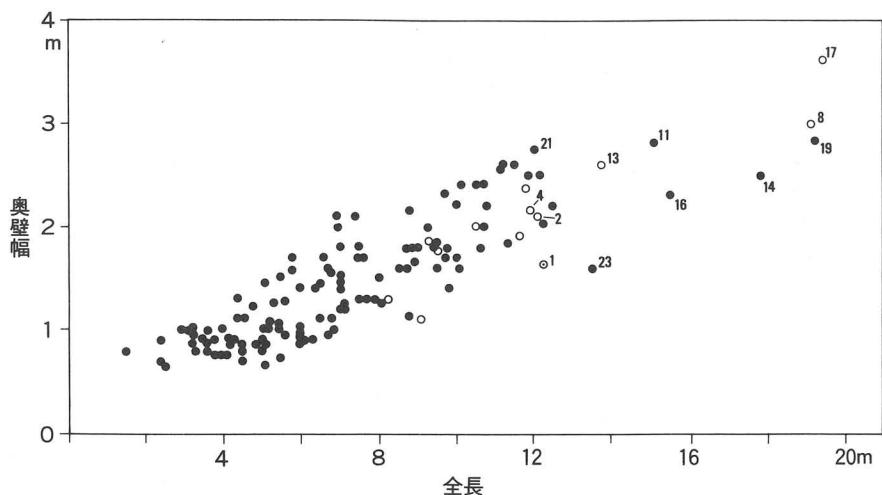
吉野川上流地域のうち大原町には約33基の後期古墳が築かれ、作東町北部にも2基前後が所在しており、この盆地に築かれた後期古墳の総数は40基弱とみられる。多くが無袖の石室で、袖をもつのは川戸2号墳と豊野火の釜古墳のみのようである。町教育委員会に保管されている町内出土須恵器資料は基本的にTK209型式からTK217型式にかけてのもので、6世紀後半段階の古墳は少ないものと思われる。

第69図にはそれらのうち石室規模を把握することができたいいくつかを示しており、これらや計測値をもとに以下のような石室規模の類型化を行うことができる。なお、石室全長は墳端の位置から推定したが、最も長くなった場合を示している。

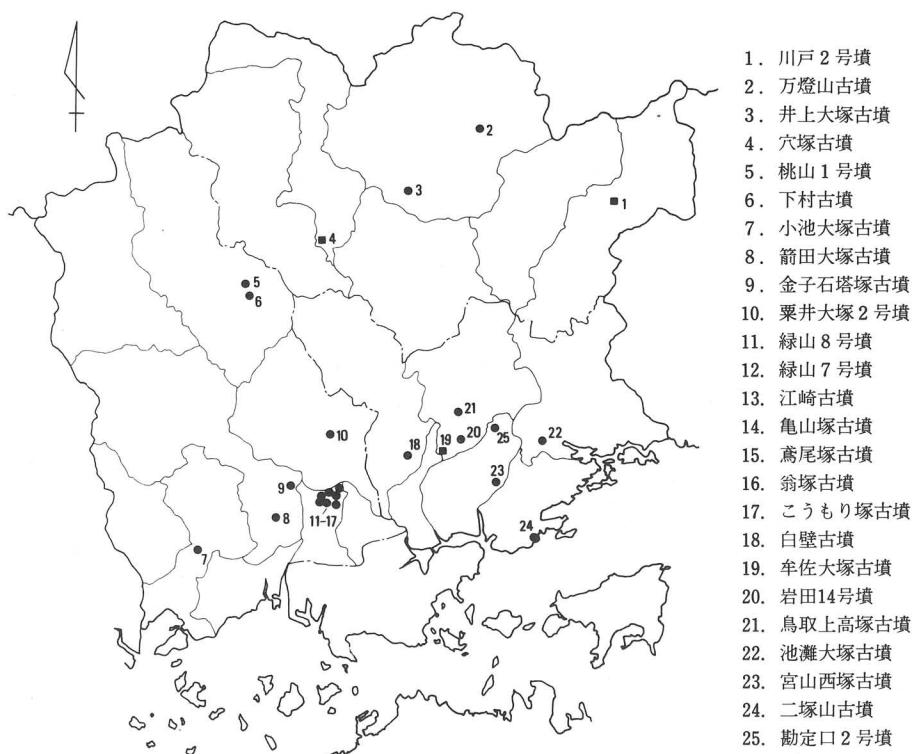
A. 玄室幅1.0~1.15m、石室全長は5~7mの小規模なもの。稼山古墳群のBタイプ²²⁾に相当する。図示したものでは2.野形3号墳、3.小原田火の釜古墳、4.才の丸2号墳が該当し、川戸3号墳もこの規模に含まれると思われる。これら以外に庄田1号墳、小原田2号墳などがあり、この地域の古墳の大半はこの規模になるようである。

B. 玄室幅1.2m以上、全長7~8m。1.野形2号墳が該当する。

C. 玄室幅1.6~1.7m。これに相当するのはやすらぎ荘裏古墳と川戸4号墳のみであるが、い



第70図 石室規模の比較



第71図 巨石墳・大型石室の分布

ずれも前半が埋没しており長さは不明である。

時期によって石室規模が変化することも考慮しなければならないが、多数の最小規模石室Aの上に数基の中規模石室B、Cが位置するという階層構成になる可能性が考えられ、それらに

対して豊野火の釜1号墳、川戸2号墳の2基は群を抜いた大きさで、この地域の首長墓とみてよい。

また、C類が7世紀前半まで下がるとは考えにくいため、川戸1号墳も他と大きな格差をもつと言えよう。

なお、A～C類では奥壁を縦長の石材2枚で構成する例が多い。久米町稼山古墳群においてもこうした例が認められ、美作の中小規模の石室の特色であるかもしれない。

第70図に示したのは岡山県下の6世紀後半以降の横穴式石室のうち、発掘調査によって全長が確認されたものを中心に、石室規模を示したものである。本来は2、3の時期に区分して作成すべきであろうが、後期古墳全体のなかに川戸2号墳がどのように位置付けられるかを見ることはこの表で可能であるため網羅的にプロットした。なお、縦軸は最大幅が適當と思われるが、奥壁幅しか示されていない資料が少なくないため、やむをえずこれを用いた。白ヌキの表示は金銅装馬具の出土古墳である。

この表から指摘できるのは、1) 玄室幅と全長は相関関係をもつ、2) 全長12m付近に大きな断絶があり、それよりも規模の大きいものはごく少数である、3) 12m以下の規模の石室は8m付近で大きく区分できる、4) 幅1m前後の小規模石室が最も多くなる、などの点であろう。このうち、2)の12mを大きく越える石室は地域を越えた最有力の首長、国造級の墳墓と思われる。3)については時期を限ってもう少し詳細に検討する必要があろう。また、4)は前記分類のAに相当するが、おもに7世紀前半に集中的に築かれる小古墳の数が多いことを示している。これらのことからみて、それぞれの地域の首長墓は全長12m前後の石室を中心になると考えられるが、12mで途切れたかのようなデータの散布状態からみて、この規模が首長墓の規格であり、また、その長さで規制がなされた可能性が考えられる。

第71図には11.5m以上の石室を表示したが、律令制の郡に1、2基の分布となっており、これが欠落する地域ではもう少し規模の小さいものが首長墓になるとみられる。なお、窪屋郡北部には巨石墳・こうもり塚古墳を筆頭に8基の分布がみられ、この地域の特殊性を示している。また、備中北部の北房町は小範囲に複数の大型石室(5・6)が築かれる点で注目される。

以上の検討に基づけば、川戸2号墳も首長墓の格付けに収まっているとみてよい。玄室幅を石室最大になおせば幅の点でも他と遜色のない規模であり、美作においては加茂町万燈山古墳、落合町穴塚古墳などに比肩する古墳と言えよう。

(2) 鉄滓の評価

川戸2号墳から出土した遺物の一つに鉄滓がある。古墳出土の鉄滓については早くから注意がはらわれ、また、年代の確実な資料として製鉄に関する研究においても重視されてきた。これまでのところ、鉄滓を伴う古墳については被葬者が製鉄に関わっていたことを示すとする意



第72図 岡山県下の鉄滓出土古墳

見が一般的であり²³⁾、吉備における鉄生産の隆盛を物語る資料として取り扱われているが、その評価は見直す必要があると思われる。

鉄滓を出土した古墳の数は1982年の集成で35基²⁴⁾、1994年現在、96基に達している。これらのなかには総社市千引古墳群²⁵⁾や同じく総社市の水島機械金属工業団地内の古墳群²⁶⁾のように製鉄遺跡に近接して所在するものもあるが、総社市緑山17号墳²⁷⁾や岡山市甫崎天神山8号墳²⁸⁾など付近に製鉄遺跡の所在が確認されていない地域の古墳においても出土が判明してきた。第72図は鉄滓出土古墳の分布を示したものである。分布に偏りがあるようにも見えるが、この分布は最近の発掘調査実施古墳の分布と言えるものもあり、現状で鉄滓出土古墳の分布に偏りを指摘することは困難である。

後期古墳における鉄滓のあり方としては土器内に鉄滓が入れられていた稲山古墳群のコウデン2号墳²⁹⁾のような例もあるが、そうしたものは少数で、基本的に石室入り口付近ないし周溝から出土している。山麓部に築かれることの多い後期古墳にあっては、これらの部分は最も削平や流出を受けやすく、最も遺存しにくい遺物の一つとみられる。また、1970年代前半以前の発掘調査では石室内の調査が中心で、周溝内の調査が十分に行われていないものも多いため、

それらの資料は鉄滓の有無については不明確とせざるをえない。したがって、保存状態の良好な後期古墳を全面的に発掘調査した場合、数基に1基の割合で鉄滓が出土するとみてよく、鉄滓をもつ古墳の数は膨大なものとなろう。ちなみに、山陽自動車道の建設に伴って鴨方町から瀬戸町までの間で28基の横穴式石室墳の発掘調査が実施された。そのうち鉄滓が出土したのは9基、小鉄塊が出土したのが1基である。鉄滓が出土しなかった古墳のうち岡山市前池内古墳群³⁰⁾や瀬戸町松尾古墳群³¹⁾などは多くが畑の造成によって石室の前半を削り取られているため不明データとして除外するなら、出土の確率は約1/2となる。

また、上記のように鉄滓は他の副葬品とは全く別に取り扱われており、被葬者の職能、鉄生産を示すものとして説明するのはむずかしい。さらに、川戸2号墳、備中こうもり塚古墳、万燈山古墳などの首長墓からの出土が明らかになってきた。これらの首長は当然それぞれの地域における鉄生産を掌握していたであろうことは疑いないが、直接製鉄に携わった可能性はないとしてよい。それでもかかわらず鉄滓が供献されていることについて、これまでの論では十分な説明が困難である。

そのほか、古墳出土鉄滓と近接して所在する製鉄遺跡の鉄滓の成分分析がある。津山市緑山A1号墳と緑山製鉄遺跡の例では分析値は近似した値を示したが³²⁾、久米町稼山古墳群と大蔵池南製鉄遺跡では直接的な結びつきは確定できず³³⁾、総社市板井砂奥古墳群他と沖田奥製鉄遺跡との分析では古墳群出土の鉄滓は他からの搬入された可能性が考えられている³⁴⁾。したがって、至近の距離で製鉄が実施されていても供献された鉄滓は別のところからもたらされることがあったようであり、短絡的に鉄滓の供献された古墳の被葬者が製鉄に関係していたと考えることは適当ではない。

以上の点をふまえれば、吉備においては少なくとも古墳時代後期には古墳への鉄滓の供献は一般的になされていたことと考えられ、それは被葬者の職能を表示するものではなく、むしろ、大甕等を用いて行われる石室入り口付近での祭祀に用いられたものと思われる。鉄滓に呪的な意義を見出した祭祀は鍛冶集団の祭祀に起源をもつとみられるが、それが古墳祭祀の一角に組み込まれ、さらに横穴式石室墳における祭祀の一部として吉備全域に拡大していくものと思われる。なお、このことは鉄滓の入手が容易であってはじめて可能となるものであり、鉄滓供獻古墳の多さは間接的に吉備における鉄生産の隆盛を物語るものと言えよう。

(3) まとめ

以上の諸点から、川戸2号墳は古墳時代後期の英田郡北部を支配の中心領域とする首長墓であったとみられ、方墳の採用からは大和政権との密接な関係をうかがうことができ、石室の諸要素には在地性と他地域からの影響の両者が認められる。金銅装馬具や銀象嵌鍔の大刀などは大和政権から下賜されたものであり、特殊な形態の有蓋椀もそれに関係するものであったと思

第6章 考察

われる。被葬者の候補として第2章でふれた別部犬を考えることも可能であるかもしれない。

7世紀前半には1号墳が築かれ、2号墳に続く首長墓と見られる。英田郡南部の英田町奥火の釜古墳は石室全長10.7mの巨石墳であるが、これが1号墳と時期的に平行する可能性があり、英田郡の南北に首長が並立、ないしは南部に地域全体の首長権が移動した可能性が考えられる。その後、7世紀後半には古墳の築造はみられなくなる。1号墳被葬者の後継の首長も大和朝廷の地方支配の官人化し、古墳の築造に用いられていた力は寺院の造営に振り向かれて、大海廃寺、今岡廃寺などの建立をむかえることになる。

註

- 1) 春成秀爾・出宮徳尚・近成久美子「岡山市牟佐大塚古墳」『古代吉備』第7集 1971年
- 2) 『三須丘陵遺跡分布調査報告』岡山大学考古学研究部 1976年
- 3) 『倉敷市矢部遺跡分布調査報告書』岡山大学考古学研究部 1984年
- 4) 中力 昭・伊藤 晃「穴塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975年
- 5) 「長砂2号墳」『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会 1987年
- 6) 藤田憲司・伊藤 晃「小迫大塚古墳」『岡山県史』第18巻考古資料 1986年
- 7) 渡辺健治・今井 堯『万燈山古墳』 加茂町文化財保護委員会 1974年
- 8) 正岡睦夫「久米郡中央町越尾古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』4 岡山県教育委員会 1974年
- 9) 内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根2号墳について」『古代吉備』第13集 1991年
- 10) 葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35 岡山県教育委員会 1979年
- 11) 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年
- 12) 平井 勝『岡山県指定史跡 大谷1号墳』 北房町教育委員会 1989年
- 13) 註1) 文献。

石室の形態から7世紀初頭の築造と考えられている。周辺地形や切岡から大形方墳と判断する。

- 14) 近藤義郎ほか『美作 塚ヶ成古墳』美甘村教育委員会 1994年
- 15) 註4) 文献。 墳丘測量図や写真図版によれば方墳とみて支障ないと思われる。
- 16) 河上邦彦・千賀 久ほか「平群・三里古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』33 檜原考古学研究所 1977年
- 17) 森下大輔ほか「名草3号墳・4号墳」『加東郡埋蔵文化財報告』4 加東郡教育委員会 1984年
- 18) 三木文雄「王墓山古墳の遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館 1974年
- 19) 奥村清一郎ほか「湯船坂2号墳」『京都府久美浜町文化財調査報告』第7集 久美浜町教育委員会 1983年
- 20) 石田成年「平尾山古墳群」『柏原市遺跡群発掘調査概報』1992年度 柏原市教育委員会 1993年
- 21) 岡崎正雄ほか「高川古墳群」『兵庫県文化財調査報告書』第97冊 兵庫県教育委員会 1991年

第2節 川戸2号墳の占める位置

- 22) 村上幸雄「横穴式石室について」『稼山古墳群』Ⅱ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980年
- 23) 安川豊史「古墳時代における美作の特質」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 1992年
杉山尚人「陶棺」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 1992年
- 24) 大澤正己「大蔵池南製鉄遺跡を中心とする製錬溝、鍛冶溝の検討」『稼山古墳群』Ⅳ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982年
- 25) 武田恭彰「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』1 総社市教育委員会 1991年
- 26) 村上幸雄ほか「水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財調査報告』9 総社市教育委員会 1991年
- 27) 村上幸雄「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財調査報告』1 総社市教育委員会 1984年
- 28) 宇垣匡雅ほか「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994年
- 29) 村上幸雄『稼山古墳群』Ⅱ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980年
- 30) 中野雅美ほか「前池内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994年
- 31) 下澤公明「山陽自動車道建設に伴う発掘調査(備前工事事務所)」『岡山県埋蔵文化財報告』 岡山県教育委員会 1991年
- 32) 中山俊紀「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第19集 津山市教育委員会 1986年
- 33) 森田友子「まとめと若干の考察」『稼山古墳群』Ⅳ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982年
- 34) 註23) 文献



1. 調査前の状況（南西から）（手前畠畔－2号墳、中央－1号墳）



2. 調査前の状況・2号墳（南東から）

図版2



1. 発掘調査風景（東から）



2. 2号墳玄室上部の堆積（南から）

図版3

2号墳・3号墳



1. 2号墳および3号墳（南東から）（堆積層掘り下げ前）



2. 2号墳 石室前半の状況（南から）

図版4

2号墳



1. 前庭部・墳丘（西から）



2. 石室内の遺物出土状況（東から）

2号墳



1. 遺物出土状況（玄室奥）（北から）



2. 遺物出土状況（玄室奥）（北から）

図版6

2号墳



1. 遺物出土状況（袖部）（北から）



2. 石室前半の状況（北から）

2号墳



1. 石室（東から）



2. 玄室西壁（南東から）

図版8

2号墳・3号墳



1. 2号墳西裾・須恵器甕出土状況（南西から）



2. 3号墳全景（西から）

3号墳



1. 墳丘および葺石（東から）



2. 石室残存状態（南から）



1. 発掘調査風景（北から）

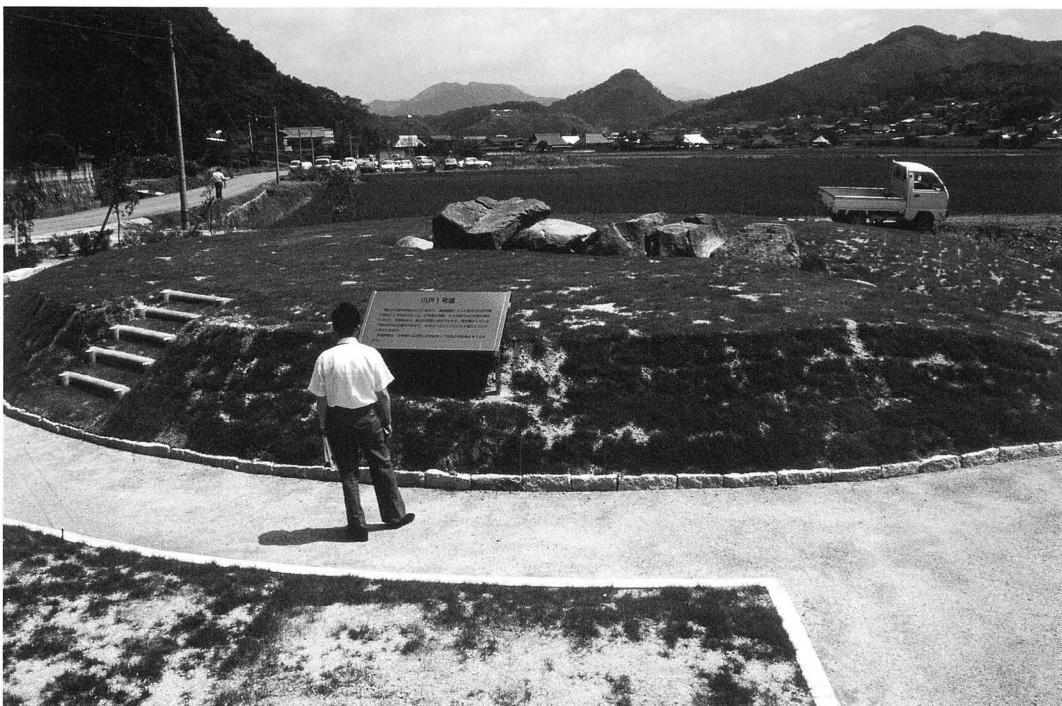


2. 墓丘および石室（西から）

復元・整備



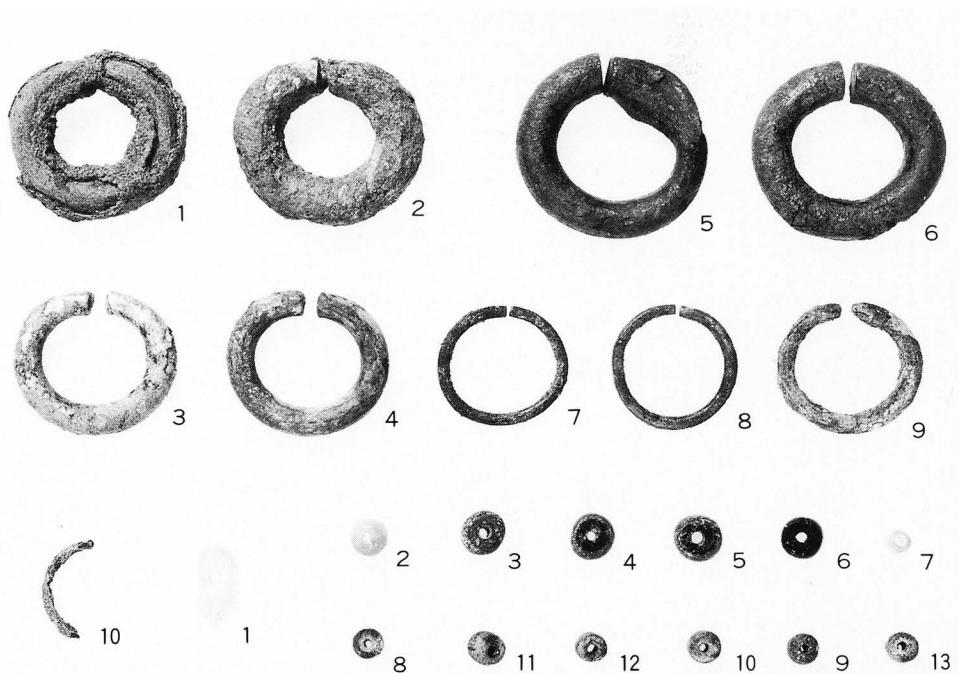
1. 復元後の2号墳（南から）



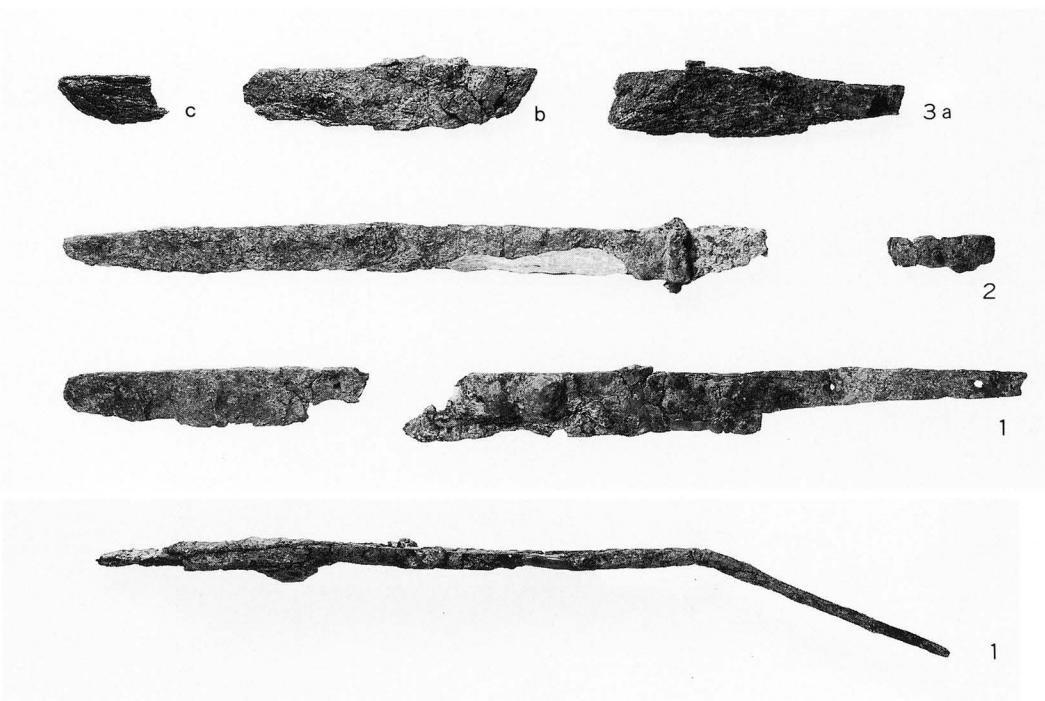
2. 復元後の1号墳（西から）

図版12

2号墳出土遺物



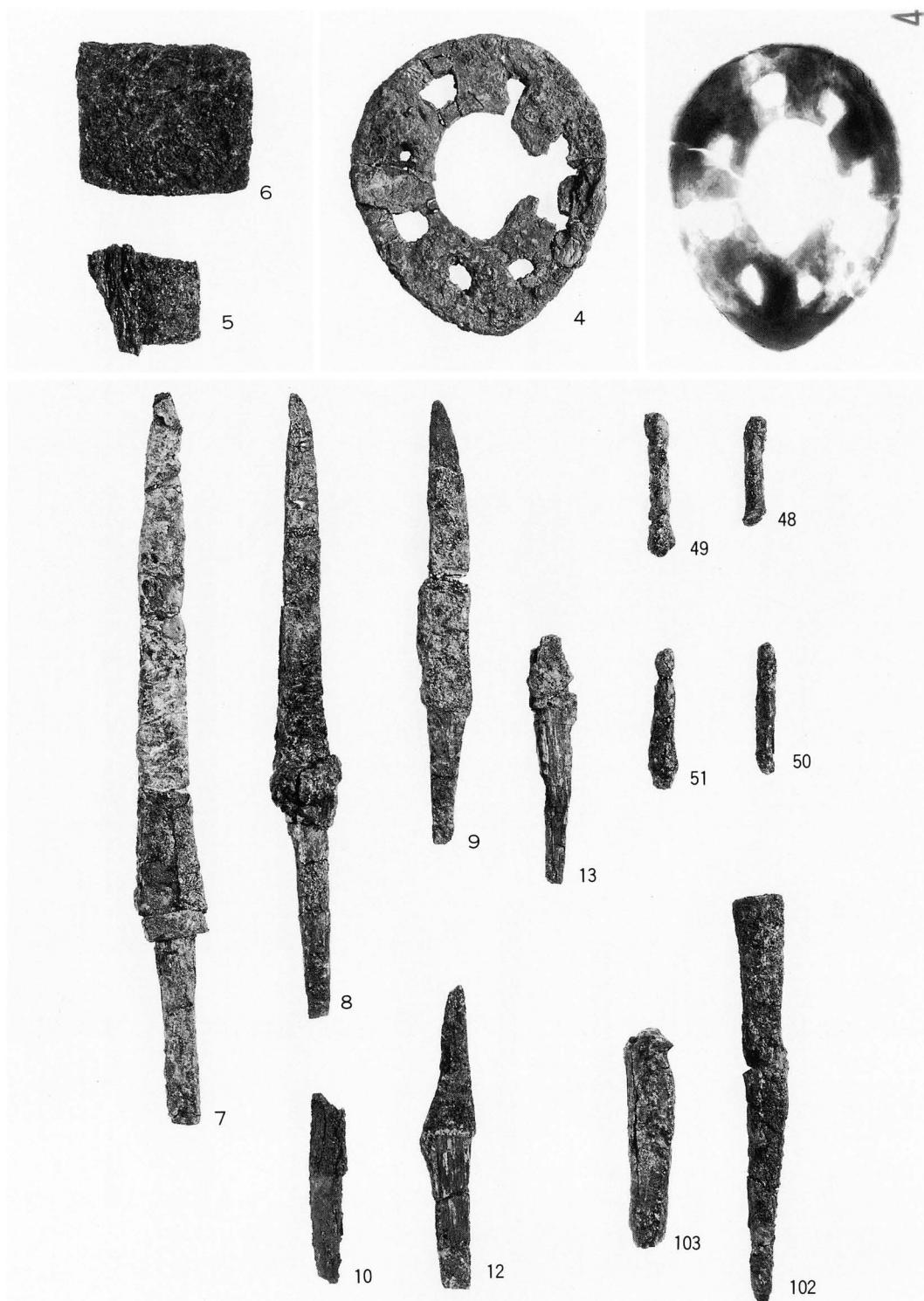
1. 耳環および玉類



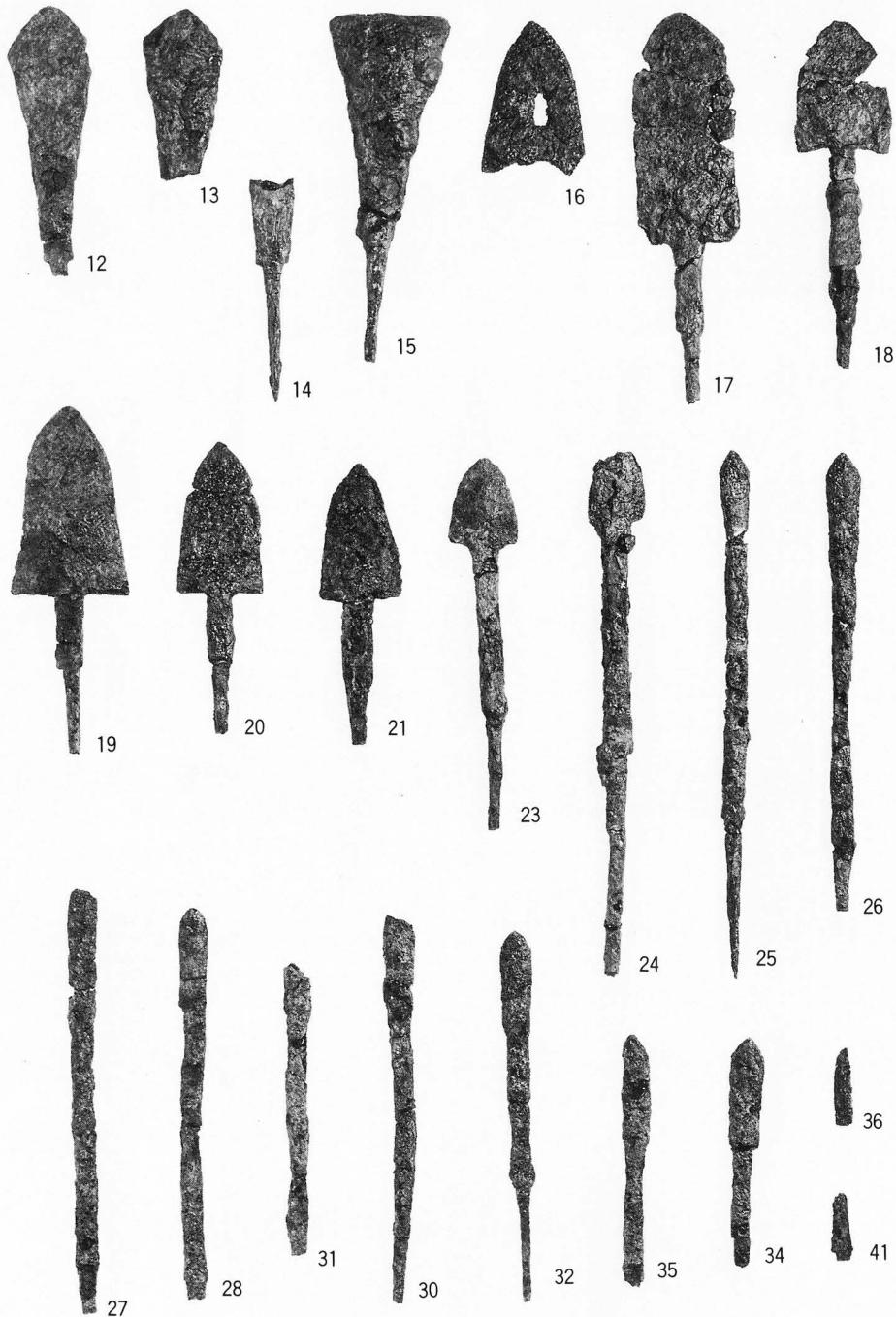
2. 大刀

2号墳出土遺物

図版13



刀装具(4~6)・刀子(7~13)・両頭金具(49~51)・釘(103)・鉈(102)



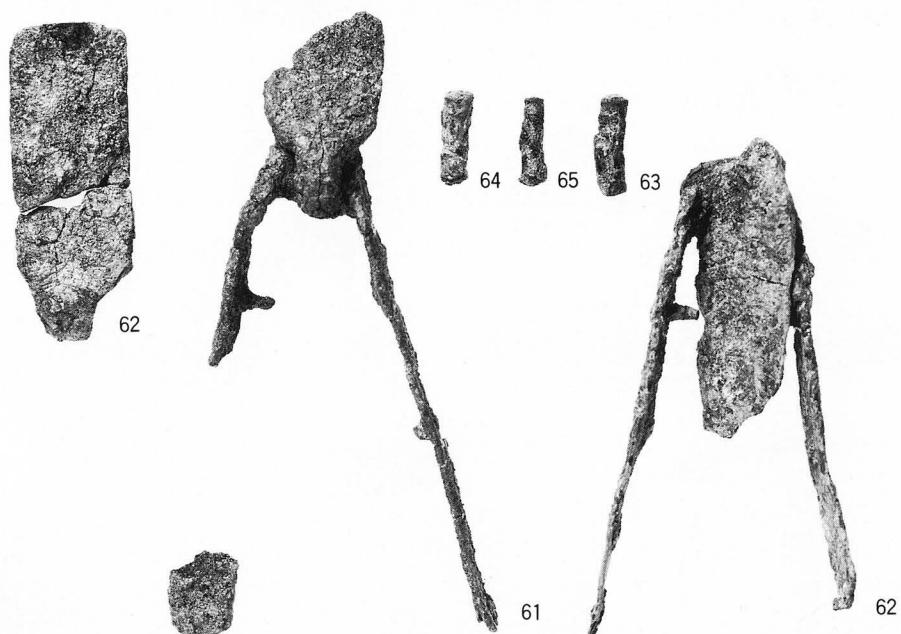
鉄鎌

2号墳出土遺物

図版15



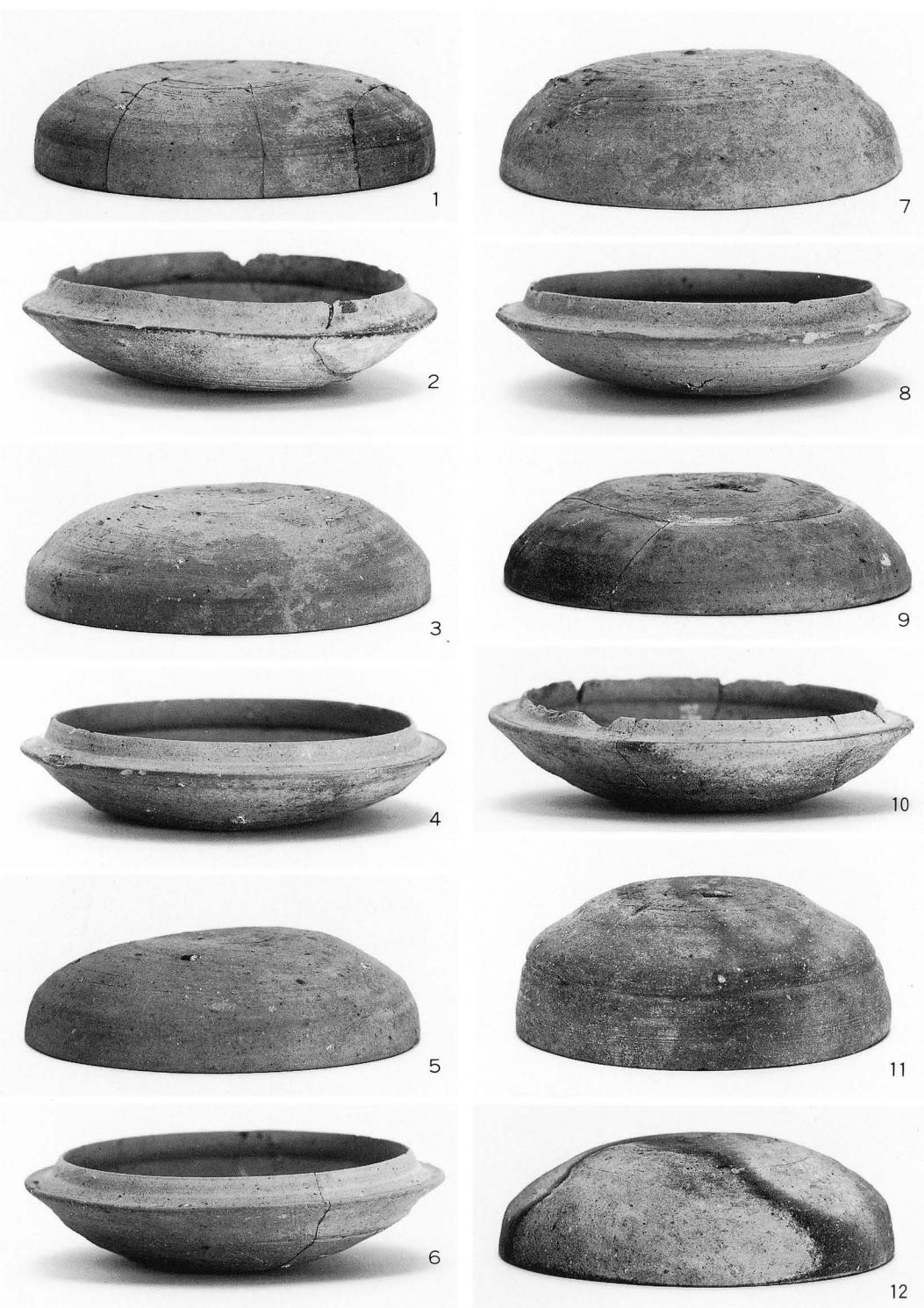
1. 繩・釣舌金具



2. 鐙



辻金具b・飾金具・鉸具他



須恵器〈1〉杯



13



18



14



19



15



16



41



17



42

須恵器〈2〉 杯・高杯・蓋



須恵器〈3〉 高杯・碗



24



25



26



27



28



47

須恵器〈4〉 高杯・椀

2号墳出土遺物

図版21



須恵器〈5〉 有蓋椀



48



51



49



52



53



54

須恵器（6）壺



55



56

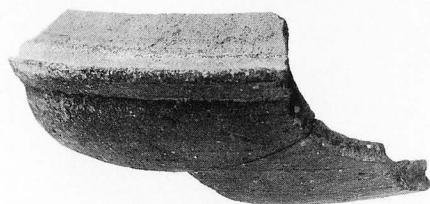


57



58

須恵器（7） 球・提瓶



須恵器〈8〉・土師器〈1〉 提瓶・椀・甕



64



80



65



須恵器〈9〉・土師器〈2〉 壺・甕

図版26

2号墳・3号墳出土遺物



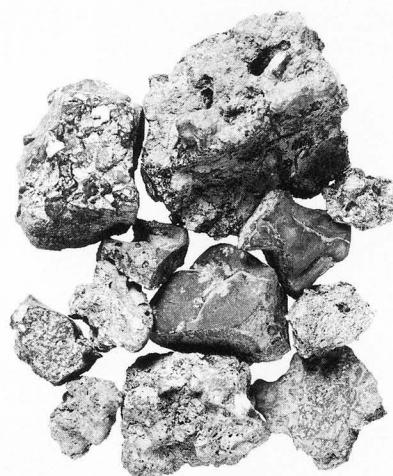
60



81



S1



鉄滓



羽口

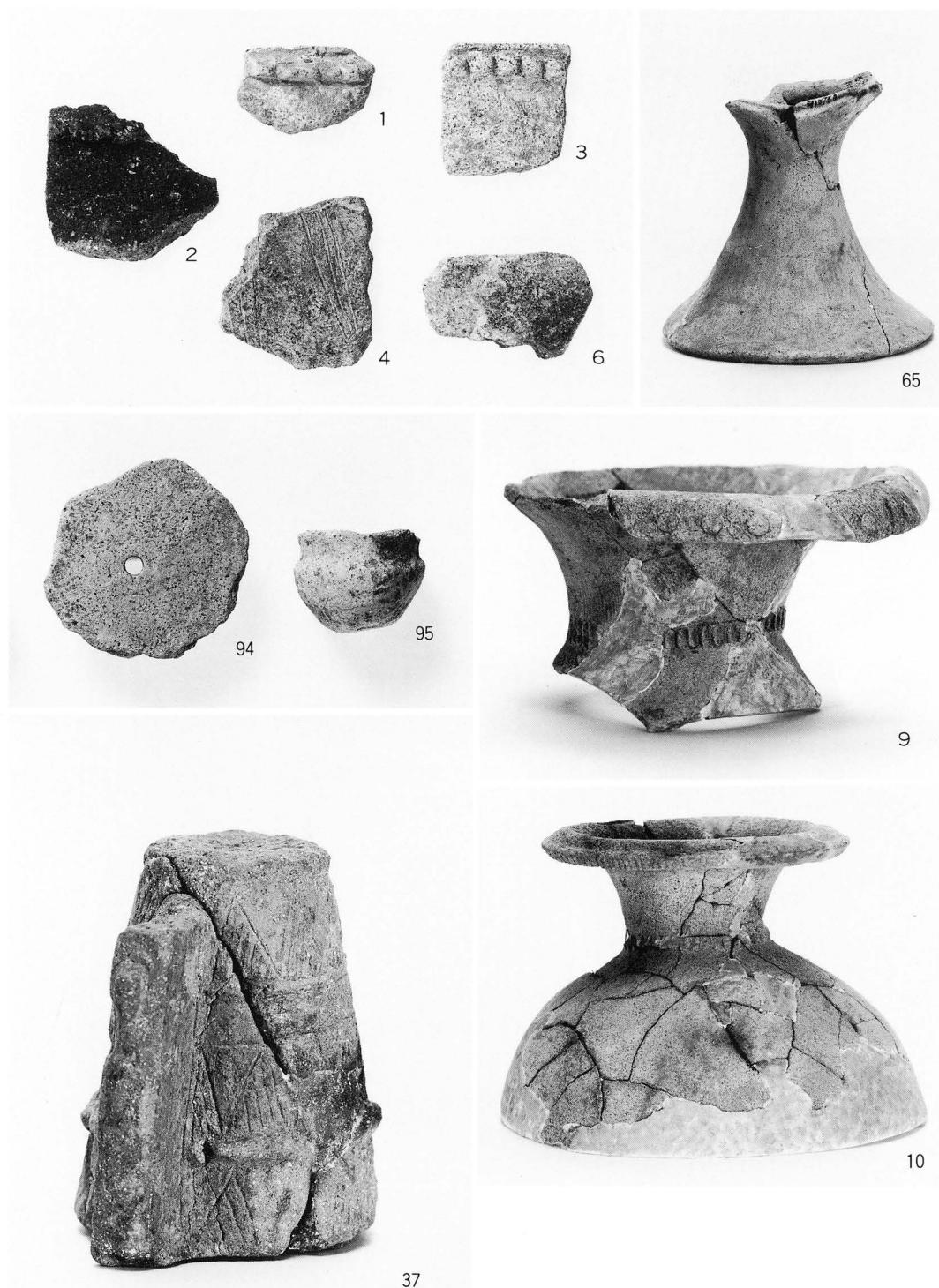


5



4

須恵器（10） 器台・甕・高杯、鉄滓他

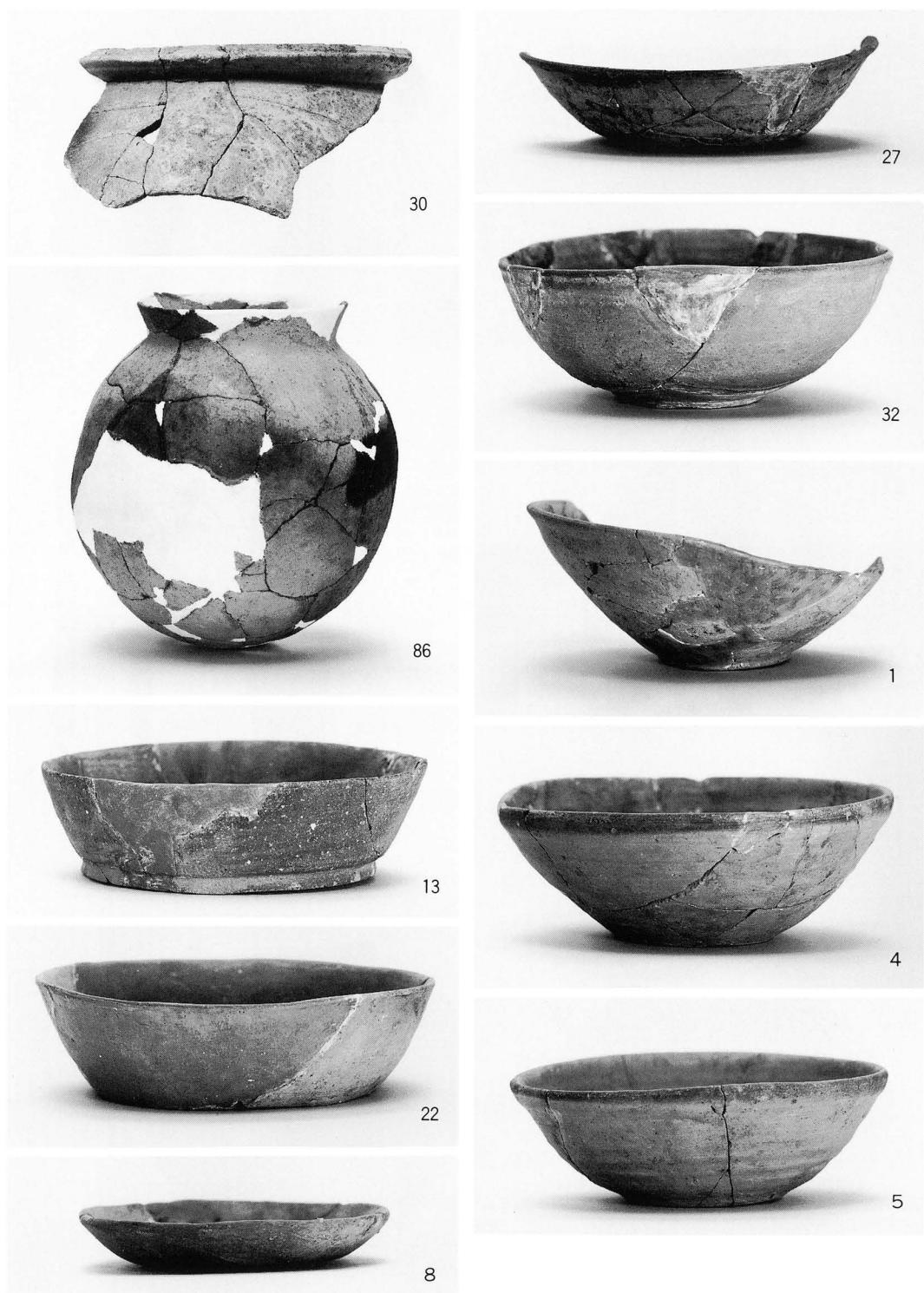


縄文土器・弥生土器・銅鐸形土製品

図版28



石斧未製品



弥生土器・土師器・須恵器・勝間田焼

川戸古墳群 発掘調査報告書

平成7年3月20日 印刷

平成7年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

発行 大原町教育委員会

印刷 西日本法規出版株式会社

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かわとこふんぐんはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	川戸古墳群発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宇垣匡雅							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	大原町教育委員会							
所在地	〒707-04 岡山県英田郡大原町古町1709 TEL 08687-8-3111							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯 °， ′， ″	東經 °， ′， ″	調査期間	調査面 積(m ²)	調査原因
かわと 川戸古墳 群	おかやま 岡山県英田 郡大原町川 戸 307-3 ほ か	あいだ おおはら かわ	33641	35° 03' 53.2"	134° 16' 37.7"	19900723 ～199011 13	800	県営圃場 整備事業 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
川戸古墳群	古墳 集落跡	古墳 弥生 古墳 古代～中 世	古墳3基 土壙1基 井戸2基 土壙1基	縄文土器・弥生土 器・土師器・須恵 器・鉄器・石器	1基は後期の方墳 金銅装馬具 銅鐸形土製品			

KAWATO TUMULI

The Excavation Report of The Ancient
Burial Mounds in Okayama, Japan

March, 1995

The Board of Education of Ohara-cho
Okayama, Japan